

○鳶魚 僕の再板本には、仙助の能も、忠七の浮世物真似も書いてない。

○若樹 再板物にはその物が絶えて了つたから取つて了つたのでせう。

○鳶魚 忠七は皇都午睡三の中に、忠七を豆藏又おで子とも云、とある。同じ本の初の上には、「輕口物真似とて性もなき馬鹿口をたゞき願をはづさせ、劇場俳優の物真似をするを東都にて豆藏聲色と云、浪華にて忠七身ぶり物まねと云、豆藏忠七は小屋主座元の名也」ともあります。おでこ芝居のことは、月堂見聞集にも書いてある。ところで「仙助の能」はわかりません。

○若樹 是は能狂言の真似をしたのだ、こんな處でやる可きものでない。

○筑波 仙助と云ふのは三味線を入れて能を崩した能狂言で、大阪の方では仙助の能狂言と云ふのが行はれたと云ふ事を聞いて来ました。

○仙秀 勸進帳は仙助能から探つたと云ふ事を、ある雑誌に大槻如電さんがかゝれてゐました。

○若樹 さう云はなくては……探つたと云つちやア大變だ。

○竹清 船と陸とが争ふ事です。是は彼方の御語りする時には斯う云ふ事をやるのです。

○筑波 野崎詣です。それで言ひ負けた奴は運を取損ふといふ事です。

○華洲 京都で……。

○竹清 祇園でせう。此間見に行つたが、今ではやりません。尤も四條通があんなに廣くなつたら、向側と此方側で喧嘩も出来ない。やりません、唯火繩をふりまはしてあるく位のことです。

○華洲 もとはナカノ盛でした。

○若樹 「まことや神徳の彭々」とあるが、そんな言葉がありませんか。

○共古 神徳の盛んなる事だから、それで宜いでせう。

○若樹 一番初に「海内秀異」とありますが、これも變な言葉ですね。

かくて社内ことごとく順拜し靈符の女のましろきかほも横目に見なし小山屋のかどをもむなしく打すぎ天神ばし通りに出たる時、彌次郎兵衛のはきたる雪駄いかゞしてや横ばなをぬけたりければ、彌「しまつた京のものハゆだんがならねへ、ごうせへに請合てくりやアがつていま〜しい、トつぶやく向ふよりかみくつかい「デイ〜デイ〜、これは大さかにてはかみくすかひかくのごとく、デイ〜とよんであるくを、彌次郎はどのせつたなをとおもひよびかけて、彌治郎「コレ〜、せつたたのみます、かみくすかひ「ハイコリヤかたしかいな、かたしではどふもならんわいな、見りやそのはいてじやもはなをがどふやらそこねそうじや、いつ所にさんせ、彌「ホンニこいつも今にぬけるは、とても事に一所にしていくらだ〜、トいふゆへかみくづ

かい、是をかひ取こゝろにてひねくりまはし、「コリヤいこ安いがゑいかな、彌そふきなんでも安
 いがい、かみくす」さよなら四十八文じやがどふじやいな、彌「イヤそれではたかい、廿四文
 ばかりでよからう、かみくす」エ、じやら、いふてじや、彌「ハテサ、ほんとうに廿四文、と
 むせうにはきものをつき付るゆへ、かみくすかいはいつかうにがてんゆかず、賣人のほうからね
 だんをねぎるはめづらしいとおかしき半分、何にしてもそのいかぬことなればせに取出し、
 「ハイそしたら廿四文にまけて上て買ましよかいな、ト廿四文彌次郎にわたし、せつたを取、荷
 の中へいれてゆかふとする、彌次郎「コリヤ、まつたく、おれに錢をよこしてその雪駄をどふす
 るのだ、くすや」ハテ買ふたのじやわいな、彌「とんだことをいふ、花をがぬけたからなをしてくれ
 ろといふのだけはな、くすや」イヤこなはん、わしをはきもんなをしじやとおもふてかいな、コレ紙
 屑かいはわたなべから出やせんぞへ、あたけたいなわろじやわい、彌「イヤこのよこつたをしめが
 なせそんならデイノ」といつてあるくのだ、とりきみかゝるを左平次おしとめ「ハ、アきこへた、
 コリヤおまいが龜相じや、わしやさつきにからかはつたことじやとおもふてゐるが、アノおろど
 じやはきもん直しがデイノ」といふてあるきおるといふこつちやが、當地ではくすやどのが皆デ
 イノといふてあるくことを御ぞんじないさかい、御了簡ちがひじや、コレくすやさん、こちらが

わるい、ゆるしなされ、くすや「じやて、あんまりなわろじやわいな、あんだらくさい、北「ハテ間
 違じや、その雪駄をけへしてくんな、くすや「いやじやわいの、こちをはきもんなをしじやといひ
 くさつて、こちや外聞がわるいわいの、トはらたつを北八平次がやう」とことはりいひてせ
 つたを取かへし、それより彌次郎はわらざうりをもとめてはき、せつたはこしにはさみて天神ば
 しをみなみへ打わたりてよこほりどほりをたどりのゆくに、

○二葉 何も無いやうです。

○若樹 「靈符の女」

○鳶魚 筆拍子に遊里の異名の言葉と云ふ處に、靈符——袋谷とあります。圖で見ると天神様の禰宜
 の家の脇の處に在ります。

○若樹 是は私娼でせう。茲に祕事眞告と云ふ安永頃の大坂版の洒落本に在ります。安治川の相、安
 治川古川並に千守、靈符、サナタ山此類多けれど取集めて見た處が同じ心意、みなく目立たぬ
 用心こそ肝要なり」とあつて、やはりごく下等の遊處でせう。

○二葉 靈符は處の名です。

○竹清 鎮宅靈府神の祠を言つたのでせう。

○若樹 「小山屋」は料理屋でせうな。
○二葉 サア分りません。



京 阪

江戸京阪紙屑
かいの籠
京阪は圓の如
く低き丸形の
籠上に麻布風
呂敷を置く、
江戸は丸形方
形二種あり、
方形を御膳籠
といふ、仕出
料理其他には
専ら用之こと
多し。

守 貞 漫 稿 所 載

○鳶魚 紙屑屋は渡邊村から出る。渡邊村は癩村だ。
○共古 是は一九が斯んな事を言つたけれども間違つて居る。それは紙屑買の言葉と東京のデー／＼とは少々言葉が違つて居る。紙屑買はテンテと云ふのでテン／＼は古手と云ふ事です。古手々々と云ふ、それは守貞漫稿に書いてあります。江戸のはデー／＼です。デー／＼は手入手入

○若樹 活版などでデーとデーと濁りが落ちては居ませんか。
です。

江戸の雪踏直



大阪の雪踏直



膝栗毛輪講

街 能 噺 所 載

○共古 テン／＼と云ふ言葉をデー／＼と聞誤るやうになつた。
○若樹 明かに大阪でテン／＼と云ふやうに言つたのならば……。
○共古 紙屑をテン／＼と云ふ。守貞漫稿に書いた人は大阪の人です。それからモウ一つ皇都午睡の著者も大阪の人です。江戸で穿物直しをデー／＼と云ふと是だけの言葉は言つて居る。向うの穿物ではどうだと言ふと、向ふぢや直し／＼と言つて居る。是は雪駄直し、それも守貞漫稿の言葉に書いてあります。
○竹清 今では直しと言ひます。今では紙屑買は全くデー／＼と言はないさうです。
○共古 直しは無論修理と云ふ俗語でせう。それか

ら「よこつたをしめ」と云ふ事、是は江戸ぢや言はない言葉でせうけれども、「よこつたをしめは無
理を云ふ事です。それは横ッ丁のことであつて詰り横紙破りを云ふのでせう。眞直に行くのならば
順當だけれども、横に行く」と云ふので横道だ。

○鼠骨 横に車を引くと云ふことか。

○若樹 横つ倒れですな。「けたいなわろじやわい」

○共古 餘程當前の人間ぢやない。

○若樹 「けたい」は怪體な、奇怪な……。

○鼠骨 怪體でせう。

○鳶魚 占ひ屋の卦と體、卦體が悪いと書いてあります。怪しい體と書いたものもあります。——怪體
が悪いと云ふのも可笑しい。八卦の卦の字を書いて卦體が悪いと云ふのが宜い。

○鼠骨 大體怪體と言ひます。怪體が悪いと云ふ事は聞かない。

○鳶魚 さうすれば卦體が悪い、縁起が悪いといふ程の意味だから、こじつけられない事は無い。ど
つち道、こじつけものだ。

○鼠骨 「あんだらくさい」

○二葉 馬鹿臭い。

こゝに人だちさはがしく、けんくわと見へてくらゝ、わめきのゝしりてうちあひ、わうらい
いやがうへにかさなりさうだうするに、彌次郎北八も人におされて行ぬけんとしたるが、何か紙
につゝみたるものあしもとにおちてあるゆへ、彌次郎何心なくひろいと、ひらき見れば、

〔字八拾八番〕 かくのごとくかきたる札なり、今はたへてそのことなしといへども、此時分はざ
まの宮に富のありし時節にて、わうらいの人々のくんじゆにとりおとしたると見へたり、はるか
にこゝをゆきすぎて、左平次「モシ、今あなたのおひらいなされたのは富の札じやないかいな、
彌」そふだらう、コレ八十八ばんとありやす、左平「コリヤ座摩の宮の札じや、しかもけふつく日
じやわいな、おゝかた今頃はもふついてしもふたじやろぞいな、彌」そふさ、どふせおとすくらへ
のもんだものをからつほの札であるう、へちまにもならねへ、トそのまゝひねりてうちすてるを
北八あとよりちやつとひろいてくはいちうしゆくほどに、やがてかのさまのやしろにいたりける
が、けふはくはんけ富の當日、ことに今つきしまひたると見へて、くんじゆ下向おびたしくお
しもわけられず、その中に人のはなしながらゆくをきけば、「ア、残念なことをしたわいな、あの
八十八ばんすでのことにわしが買ふ所じや有たわいの、あれ買ぞこなふたはこちの運の來らん

じや、買ふたら第一ばんで金百兩とりおつたものをけたいがわるい、トはなしながらゆくを彌次郎きよつけ、ぎよつとして、「北八きいたか、今の札を打ちやらなんだらよかつたもの、エ、どうしよふ、あとへもどつてもふあるめへか、北「ナニ今まであるものか、彌「エ、ノ、残り多いことをした、トあとふりかへりノ、神前にいたり見るに、富はつきしまひて、第一ばんよりだん／＼あたりふだのばんづけ、いち／＼して、正めんにはりつけあるをみれば、一のとみは八十八ばんとふでぶとにかきたりける、彌次郎あまりのことにあきれはて、「エ、いめへましい、おらアもふいつその事坊主にでもなりてへ、とても運のひらける時節はねへ、北「ハ、ハ、ハ、ハ、そんなにちからをおとすめへ、おれが百兩取から、おめへにも三兩や五兩はかしてやる、コレ見なせへ、トかのひろいし札を出して見せる、彌「ヤアノ、手めへひろつて来たか、出かしたノ、こつちへよこせ、北「イヤそふはなるめへ、おめへのすてたものをあとからちやつとひろつてきたから、コリヤおいらにさづかつたのだ、彌「イヤノ、ひつきやうおれがさきに見つけてひろつたりやこそ、又手めへの手へも入たといふものだから、もとはおいらがものだ、北「それでもおめへ一たんすてたじやアねへか、彌「ハテそふはいはずとマアよこせ、トむりにひつとろうとする、きた八いかな、やるまいとせりあふを左平次とめて、「これ／＼しづかになされ、そないにいふたらひよ

つとすてたぬしがきよつけて出まいものでもないさかい、何じやあろとわしが挨拶じや、半分つゝわけなされ、そしてわしにもちとはおくれじやあろな、北「ソリヤアおいらがせうちの助だ、何にしる善はいそけだ、金はどこで請取のだらう、左平「ソリヤ、あこの世話人のあるところであつたしおりますわいな、北「そんならそけへいつて見やう、と打つて、そのところへゆき見れば、かくのごとくさけふだしてありけるゆへ、さてはけふの事にはいかすとまづ神前にまいりて、

口上

當日殊の外混雑仕候に付當り札の御方明日四ツ
時金子御渡可申候 以上

月日	世話人
----	-----

御神の利生かくべつありがたや罰にはあらであたる富札かくゑいじて大きにいさみたち、社内のこらすじゆんばいしておもてのかたにたちいで、北「ナント、其内すてたやつが金受取にいきはせまいか、左平「ソリヤ氣遣ひないわいの、往たとて、札と引替にせにやわたさんさかい、なんほ當人でも無證據じやわいの、彌「きめう／＼ごうてきにおも

しろくなつたわへ、北、あしたは百兩久しぶりの對面、彌、エ、ひさしぶりもおかしい、ついぞあつたこともなくて、ハ、ハ、ハ、ハ、トいさみよろこひやがてかしこのちや屋にはいりてまづまへはひと酒くみかはしぬ。

○鳶魚 此富は何處の富であつたか、何處の御寺の爲にやるのか、社の爲にやるのか、それはどうも分りません。

○竹清 座摩の社だ。

○鳶魚 場所は座摩の社だけれども、彼處は能く持たしてやるのだ。

○鼠骨 けれども後の方で座摩の再建の爲とあります。

○鳶魚 それでは宜しい。それで「今はたへて其ことなし」とありますから、此時分まで有つたので彌次の行く時分には無かつたでせう。それから富の事を計算的に言はなくちやならん。未だ勘定が出来て居りませんから、どうせ是は終ひに言はなくちやならんから、其時に勘定して置いて申上げます。併し一體この跡の方を見ますと一番に當ると云ふのが亥の八十八番であつて、さうして彌次郎北八の拾つたのは子の八十八番であつたから、何にもならなかつたと云ふ終ひが落ちになるのですけれども、決して富と云ふものはさう云ふものぢやない。そこで一番二番三番、此大當りに當つ

たものと同じ番數ならば、十二通り十二支の席があつて居りまして、八十八番に何人が宛花を持つて來る譯です。丸つきり何も取れない筈は無。是は一の仕組の爲にさう云ふ風にしたのかも知れません。どうしても是は事實として一文も取れなかつたと云ふ事は無い事だと思ひます。是は跡で使つて何にもならなかつたと云ふ所で、計算表みたやうなものに拵へて置いて、さうして申上げたいと思つて居ります。マア今日はそれだけしか申上げます材料がございません。

○若樹 「からつほの札」

○鳶魚 「からつほの札」と云ふのは是は分りません。

○若樹 「から」で宜いでせう。

○鳶魚 「から」は分つて居るが「つほ」が分りません。

○煙崖 「からつほ」は空穂と云ふやうな所から出た言葉でせう。

○竹清 モツと富と云ふものはどう云ふものだと云ふ事を精しく言はないと分らない。

○共古 それは本堂再建で分つてゐる。唯、變に思ふのは、八十八番が一番になつて居ると云ふ事が變だ。百番目なら宜いが、突きまして百圓に當るのが八十八番です。

○鳶魚 札を突きますには斯んな札で、大きな箱に景物を入れてそれを突く。突いて一番先きに突い

た奴が一番富だ。それは劔の先へ喰付いて来る。それだから何番が出て来るか分らない。是に書いてあるといふと八十八番を突いた、だから一番先に突いた富の札は八十八番、一番の富が八十八番です。

○共古 さう云ふ定め方ですか、百圓を當りとして居りますのがあります、關西あたりの富に……。

○鳶魚 それはマア表に就いて考へませう。

○共古 私にも表は一つあります。初めからさう云ふ風にしてある富の札があります。本堂再建に就て二百五十圓取れるのが鶴三千五百枚、雉三千五百枚、一つの札が價は二種です。二種を置いて百圓取と二百五十圓取、けれども二割は奉納する。今の三田村さんの御話のやうに、假令鶴でも此方で十二突くまでの間には是が當るですけれども、何でも構はず、さう云ふ風に鶴で同じやうな百枚ある、それが幾ら宛か皆附いて居ります。

○鳶魚 さう致しますと一番二番三番の富があつて、其一番富から數へて百番になるものが當りになつて居る。其他に尙十番目々々々を引いて細かに數へて五十番と百番は大節と言つてそれに大きな花が附く。それから眞直に下の方へ行つて今度は其袖と云ふのがあります。それから又袖と云ふのと孫袖と云ふのと二つあります。之を計算して見たが、表のやうにして書かないと些と分らんと思

ひます。

○共古 だから是などを見ると百番と云ふ處で二百五十兩取りまして、其兩節は十五兩二分づゝ與へます。

○竹清 是は百番は二番に突けば百二番が當る譯でせう。最初から百番當りと定まつて居ると二突き必要は無いです。だから若し八十八番の札を突いたとすれば、百八十八番が當りになります。

○若樹 さう云ふ仕方であつたでせうが、此處ではさうぢやない。

○鼠骨 それより富は勝手に許しますか。

○鳶魚 政府の許可を得なければならぬ。

○鼠骨 政府は其場合に許可しましたか。

○鳶魚 大抵は寺社の建築、それから何かの爲にやる。一體富が公許を得なければならぬ事に定まつたのは享保年代からです。其前には大變盛んであつたのを吉宗が享保の改革の時に皆止めた。……さうして世間に儉約令を布いた。大さう幕府の苦しい時でありましたから、今まで御朱印があつて寺の普請金を請求されて困つた。由緒の有る寺で整理をして居ると居ないと依つて金を出す事が難儀だから、已むを得ず官許した。それ以外には禁じた。それからズツと寺社の爲にする分は許可



(載所記事歳都東) 圖の富寺王天中谷

を與へる事の慣例が出来た。

二〇四

○鼠骨 富は振つて居りましたか。

○鳶魚 それは斯うやつて箱の中に、東都歳事記に谷中天王寺の畫があります。箱を揺ぶつて子供が出て大きな木で突く。

○竹清 子供ちやありません。社村を著て居る大人です。

○鼠骨 さうすると振ると云ふのは突くの振出すと云ふのではなかつた。

○鳶魚 坊さんが御經を上げて振つた。

○華洲 目隠しがありました。

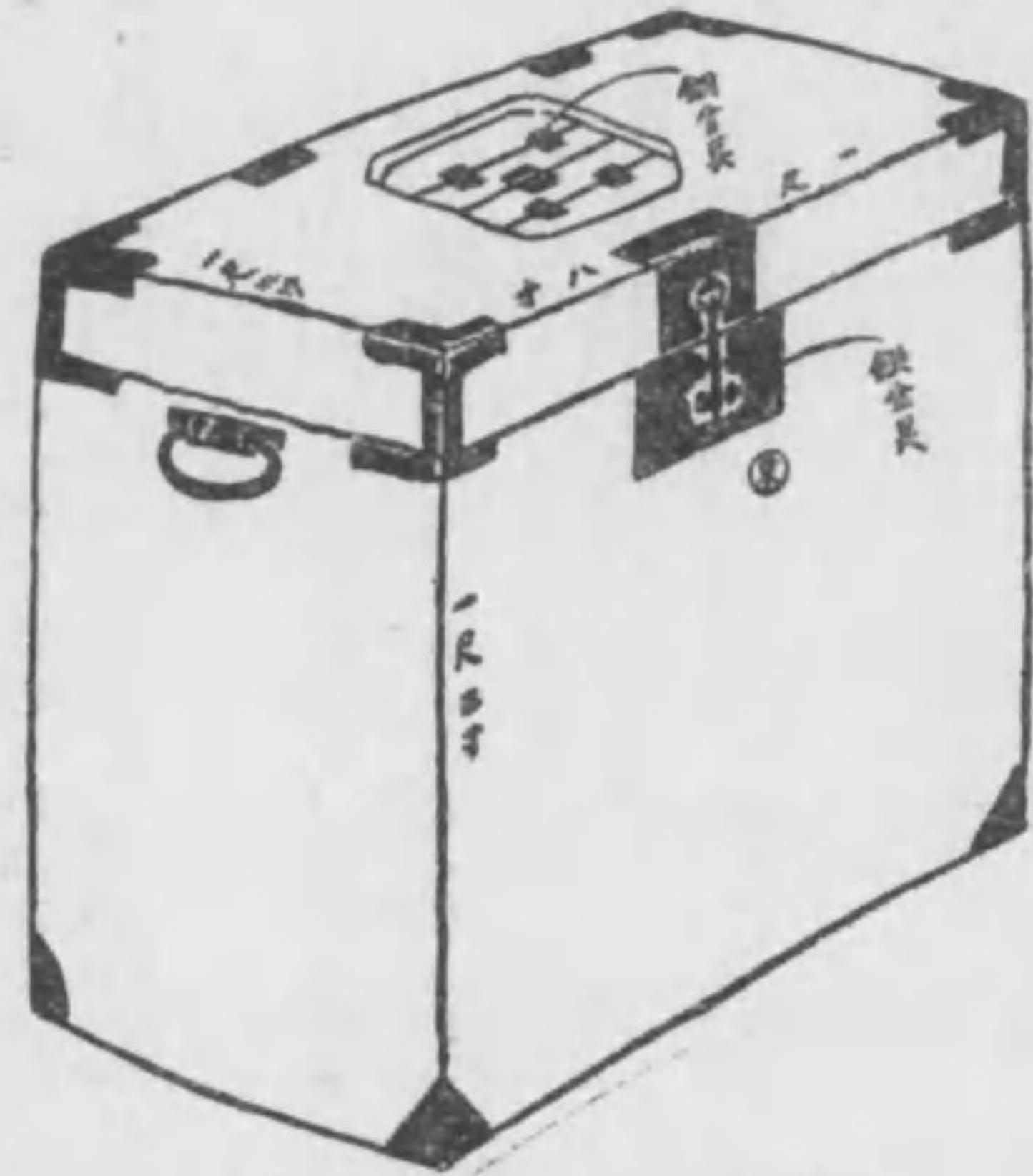
○鳶魚 さう云ふもので突きます。

○鼠骨 櫛のやうな物で下齒が無い。

○共古 林さん御覽になつたでせう。兩國

で回向院でやつたでせう。何處かにあつたのを……。

○鼠骨 兎に角富を突いて居るのを御覽になつた事がありますか。



丸で違ひます。

膝栗毛輪講

蓋裏に天
保十五辰
年五月十
九日と御
家流にて
記しあり

箱の富

○鳶魚 それは無いでせう。

○鼠骨 さうすると餘程前から無くなつた。

○鳶魚 天保で水野の改革の時に無くなつた。あの時にやつ付けた、それつきり無い。其代り今の勸業債券の仕方が似て居る。アレは抽籤でせう。意味は同じだ。

○竹清 臺灣の彩票、アレはガラ／＼廻します。

○鼠骨 勸業債券のは元金を返すから

○竹清 やはり彩票の方です。

○二葉 札を賣つた時に鶴龜といふ事を書いて置いたと思ひます。

○竹清 富の節は田子泰三郎さんが持つて居つて、私が寫生して置いた。併し何處の御寺の富の箱であつたか知れない。

○鳶魚 前に許可を得ます時に、幾日あたりに何本々々割渡して何本残る。斯う云ふ事になつて一錢一厘間違はないやうと云ふ許可を得なければならぬ面倒な届書があります。

○華洲 深川八幡にありました。

○鳶魚 江戸には澤山あります。

○竹清 富の事は幸田成友君が書いた。私が上げた材料の中に、富の場所をスツカリ書いたものがあつた。

○二葉 二十ヶ所ばかりあります。

○鳶魚 此間届書を四五通見付けまして、變てこな面倒な計算を致しました。

○竹清 これは如何にも輕薄な江戸ッ兒を現はしてゐる。始終チヨコくして損をする。

○鼠骨 「百兩とるからおまへにも三兩や五兩は貸してやる」と云ふのが可笑しい。

○若樹 江戸ッ兒は斯う云ふ者です。職人手合の江戸ッ兒はこれだ。

○竹清 江戸ッ兒の弊はさしたる事でない所で吝たり慾張つたりする。

○鼠骨 「三兩や五兩は」まで行つた時に呉れてやるのかと思つたら貸してやる、際どい處でやつてると思ひます。非常な皮肉だね。

第十七回

八編卷之中

鳶魚 落花 若樹 竹清 仙秀
共古 筑波 鼠骨 二葉

かくて彌次郎兵衛北八はおもひもよらず百兩の富にあたりたちまちいきをひをえて、座摩の社地をいでしより煮うり茶屋に入て酒くみかはしほろ酔きけんとな心おもしろけにうかれ立て、案内者の佐平次にひかれ難波御堂の穴門より御境内を順拜しながら

おふみさまときけば女の名にも似てあらありがたの穴かしこなり

それより仁徳天皇の社にまいる、これは世俗に博勞の稻荷といふ、ばくらうのいなりは別にけいだいにあり、

博勞のいなりといふもことはりや繪馬うつてくふみせも見ゆれば

門前のでんがくちやや「おはいりな〜」、田樂のやきたてあがらんかないな、北「エ、しれた事をいふ、でんがくのさめたのがいけるものか、芝居の木戸「サア今が盛衰記むけんのかねじや、評判〜、彌「むけんのかねもすさまじいこつちは百兩取つてゐるは、とほうもねへ、コウ北八、ナント

是から新町とやらへ女郎買にやらかしはどふだ、北「おもしろへすぐにかふか、ノウ佐平さん、

左「ソリヤお出なされるは悪いが、無躰ながらおまいさんがたのそのなりじやとつともふあかんじやないかいな、ソリヤ局女郎などおかいなさりや格別店つきじやて〜、ちと身なりあんじやうしてあすの夜さりなどお出なされ、彌「コリヤなるほどおめへのいふとふりだ、ハテ百兩といふ金かとれるものをとても買ならその太夫とやらを買て見る心いきだ、北「チャもうくらへそばへてきたの、左「ソリヤ其はづのこといの、わしおともして九軒の揚屋とつこへなとおつれ申そ、時に是が大丸屋、ナントゑらいもんじやあるがな、ごふく店大丸や「あなたは是へ〜、なんでござい、おはいりな〜、彌「ナント北八、こ〜へ今著物をあつらへていかふじやアねへか、左「ハ、ハ、ハ、ハ、おまいさんもまんがちな、あすのことになされませいな、北「そふさ、いまにやアかきらねへ、サアサアあよびなせへ、彌「そんならあしたのことにしよふ、北八手めへは何にするつもりだ、北「著もの〜ことか、さればの結城のぐつといきな綿で三枚ばかり、羽織はりうもんのこり〜するやつ芥子あられなぞが金持ちらしくてよからうじやアねへか、彌「イヤ〜それでは店者めく、そんなきもの著たらコレおまいゆふべは何ほ出た、ヨの字かキの字か、こちや保久のしろもので位出たよゑらい徳したなど〜符帳でしやれよふといふふうだからおさまらねへ、おいらはしまらりそ

へに黒羽折、お太刀一本ちよいときめの判官もりひさは妙であろう、たゞしはぐつと大ふざけにひがのこのへりとりむく、うへにゆふきの棒島對の羽織はあんまりきいたふうであろうか、八丈もやほになつた、唐棧はおやぢめく、南部じまはもふゆやにぬいであるやうになつたからおそれる／＼、北「そふさ、なるほど著やうといふとまさかきるものもねへもんだ、トむちうになりてはなしゆくあとから、往來のもの「きるもんがなかアやつぱりそのうしろにおつきな紋所のある職の染かへしを著てるさんすがゑいわいのハ、、、北「イヤ、こいつア何ぬかしやアがる、うしろの人「おまいのこつちやないわいの、トいちもくさんにかけてゆく、北「エ、いめへましいやつらだ、今に見ろ、あしたはどんなものきるとおもやアがる、左「ハ、、、コリヤ無躰ながら、おまいがたがそないにしゆんだなりして縮緬じやの羽二重じやのといふてじやさかい、わらひくさるのじやが、コリヤ敵等がもつともじやわいなハ、、、、ときには是からあみだ池へさんじて、破場の和泉屋をおめにつけたいな、彌「イヤ、宮寺もあきはてた、それよりはやく新町へ行てへものだがあすの晩まではごうてきにまちどをな、左「さよなら斯いたそかいな、わしなんと損料のきりもん借てあけるさかい、夫著て、今宵しんまらへお出なされ、おかねはあとでもだんない、わしがおやかたのしつてじや揚屋へゆくさかい、どしてあすは百兩お取なさるのじやもの、なんじ

やあろとそふしなされ、北「コリヤおもしろへりけつだ、彌「いか様なア、そんならすぐにかへつておめへにそのさんだんをしてもらひやせう、トうてうてんになり、しんさいばしすじを南へはやくもどうとんほりにいたりければ、まことに當地第一のさかりばにして、まへにしまの内あり、うしろに坂町あり、おやまけいこのなまめき行かふさまにぎやか也、

いつとても調子くるはじ三味線のどうとんほりのにぎはひはそも

○共古 どうも大阪の地名や言葉が澤山ありますので、行つた事のない私には何とも言ふことは出来ません。初めの「難波御堂の穴門」と云ふのは、廊下になつて其下を通ると云ふことを聞いて居りますから、それでせう。上が樓門になつて其下を通つて境内に這入る、それを穴門と稱するさうです。そんな所を通つて行くので狂歌が浮んだ。「おふみさま」と云ふのは門徒宗の御文章です。から、門徒宗の「お文」にかけて女と云ふ言葉が出て「ありがたの穴」女と云ふ所から、女の文の終にかく「あなかしこ」の穴とかけただけであります。それから仁徳帝の社に詣つた。世俗に博勞稻荷と云ふけれども、それは別にあるのです。此狂歌は博勞稻荷から出たもので、博勞稻荷では繪馬を賣つて居ります。博勞と云ふものも馬の賣買をすると云ふ所から、繪馬を賣ると云ふことにかけただけの狂歌です。大阪の言葉は、私にはよく分りません。



載所「梅の波難」

二二二

- 竹清 「もふくらへそばへてきた」
- 共古 これは贅澤になつて来た、と云ふ意味です。
- 竹清 江戸ッ子ですか。
- 共古 江戸ッ子です。今は遣ひますまい。
- 竹清 正しく言へば「くらひそばへる」でせうな。原本には「くらへ」となつて居ります。
- 落花 私の「くらひ」となつて居る。
- 若樹 穴門と云ふのは、入口が樓門の下になつて居る、丁度隧道のやうになつて居て、夏などは此處に來ると涼しいさうです。是は大坂の一つの名物ださうです。
- 竹清 此繪で見ると御堂の所から突當るので

せう。右に曲つて左に曲つた所の門でせう。

- 鳶魚 大阪繁昌誌の中に「東本願寺、在其南、堂宇結構、較西少減、大門二、東向、擊鼓閣至低、石門在其後、疊石造之、邦俗稱穴門」と云ふことがあります。
- 仙秀 九軒の揚屋、これは新町の廊の中の内にある町で揚屋ばかりあつた。此廊始まりしとき揚屋九軒を取立たる故此名あり」と「みをつくし」に出て居る。
- 竹清 此符牒は古著屋の符牒のやうです。
- 鳶魚 紙屋の符牒です。イ、コ、ヨ、キ、久、位、保、正、さう云ふのです。
- 若樹 紙屋にも使ひますが、共通に使ふのではありませんか。どうもこれは紙屋の番頭とも見えな
- い。
- 鳶魚 「筆拍子」には紙屋の符牒として擧げてあります。
- 仙秀 今は東京の紙屋では「テ」ではない、「チ」です。
- 鳶魚 大阪のかも知れません。
- 共古 反物屋か何かにありますか。
- 鳶魚 是は紙屋となつて居りますが……。

膝栗毛輪講

二二三

○仙秀 東京でも使つて居ります。しかし東京の方は少しちがひます。イ、コ、ヨ、キ、久、位、ホ、ナ、リ、タです。

○鳶魚 それでは紙屋でせうな。

○竹清 丁度それを知つて居つたのでせうな。

○共古 「まんがち」と云ふのは大阪の言葉ですかね、どう云ふ意味ですか。

○鳶魚 東京では言ひませんか。

○落花 「我れ勝ち」でせう。

○鳶魚 「我れ勝ち」の事でせう。「きめの判官」は「主馬の判官」でせう。

○若樹 「羽折はりうもんのこりくするやつ」とある。袴などに「りうもん」と云ふものがありま
すな。

○落花 鹽瀬羽二重ですな、あれを今「りうもん」と云ひます。「りうもん」を鹽瀬羽二重と云ふ。

○鳶魚 「きめの判官もりひさ」は「主馬の判官盛久」の口合ですな。

○若樹 「ひがのこのへりとりむく」と云ふのは何ですか。

○鳶魚 胴拔の事ではありませんか。

○共古 裏が緋鹿子で、縁だけ附けたのでせう。

○鳶魚 浦里時次郎の芝居で、時次郎の役者が著て居ります。胴拔の大變なものです。あれですよ。

○共古 赤いやつですな。

○若樹 やはり袖口からひら／＼出るのでせうな。

○鳶魚 出ますとも、前はチヨイ／＼出ないでせう。随分人情本式のもので、うんざりします。色男
過ぎて胸の悪くなるやうなものです。

○仙秀 今でも京都邊の人もある、北國の人もありますが、襦袢の袖口などは一寸五分位、殆ど縁とり
のやうに縮緬をつけてゐる。だから今の縁取りの口といふのはこんなのをいふのでせう。

○若樹 「南部じま」と云ふのはどんなものです。

○鳶魚 知りません。是は木村さんの畠でせう。

○共古 南部縮と云ふのは染めるではありませんか。

○落花 南部で出来たものではありませんか。つまり悪い所は南部とか云ふのが吾々の時には流行りま
した。やはり南部で出来た袖ではないでせうか。つまり南部縮で縮になつて居りますから云ふので
せう。「ひかのこのむく」と云ふのは何でせう。緋鹿子のむくと云ふのでせうか。

○仙秀追記 南部納もそんなにけなしたものでないやうです。寛政六年の「虚實柳巷方言」に、大阪の色町の大盡の出立をかけた所がある。「廊中大盡の出立は黒羽二重のきつけ、浅むくの下著、南部じまの羽織、本博多の帯でつくりごへ、にかみのはしつた有徳人、長わけの南大盡、粹なるは小紋羽二重の小袖、奥嶋の羽織に身體もゆしく見ゆる、黒羽二重いとわの小さ紋といふ小袖、八丈しまの羽織、唐さらさのつき／＼の下著など申する大盡、花やかまたいふはかりなし」とある。著附の参考になる、時代は少し上つてゐるが……。

○鳶魚 あれは縮の入つた絹物のことを無垢と云ふですな。

○落花 「へりとりむく」と云ふのはどうでせう。何か緋鹿子で縁を取つた無垢の著物と云ふのでせうか。それは却て可笑しいですな。

○鳶魚 是は言葉が悪いのでせう。

○共古 緋鹿子のブク／＼した著物を著て居るのでせうな。それから縁はどうしたのでせう。

○若樹 縁は黒緋子でせう。出る所がヒラ／＼するだけでせう。

○落花 さうすると此處の縁だけ緋鹿子にして、あとは皆なさう云ふ著物になるのですか。さうではない、胴抜でせう。併し、どうも「むく」と云ふのはどんなのですか、分りませんね。



載所「梅の波盤」

○鳶魚 無垢と云ふから可笑しいですな。言葉が悪いのでせう。胴抜の事だらうと思ひます。上方では胴抜と云ひますが、胴抜と云はないとすれば、それで宜い譯です。

○共古 「むまいがたそないにしゆんだ」「しゆんだ」と云ふのは「くすんだ」と云ふ意味ですか。

○若樹 「けちくさい」と云ふ意味でせう。

○竹清 「しみつたれ」でせう。

○二葉 阿彌陀池は御承知の蓮の名所で北堀江下通り四丁目の和光寺境内にあります。池中の嶋に寶塔があつて之を放光閣と申します。

○仙秀 「砂場」と云ふのは新町の西口の南にある町の名前で、あの繪圖にもありました。「和泉屋」と云ふのは。

○鳶魚 大阪繁昌誌に書いてあります。砂場在新町西二南北に店あり、饅餡に名高し



載所「會圖所名津攝」

○仙秀 「おめにかけてたい」と云ふのは可
笑しいですな。

○若樹 名所圖會に店
頭のところが書いて
ある。それが一寸變
つて居るから「おめ
にかけてたい」と云つ
たのでせう。

○共古 砂場蕎麥の本
元ですな。

○若樹 安永六年板の

きを風味として」とある。

○鼠骨 砂場饅餡と云ふのは饅餡で大きいのではないでせうか。

○鳶魚 そんな特別なのがありますか。

○鼠骨 少し大きいのですよ。

○若樹 此狂歌は。

○共古 三味線の洞と、道頓堀の道へかけ、盛衰なく賑ふと云ふのと、それきりです。

其日もはや七ツさがり、大西の芝居打出して櫓たいこの音喧く、評判じやくの聲木戸口にあらふれて、見物もとよみつれおしあふ中をやうくすりぬけくゆくまゝに、角の芝居中のしばいの看板さへも目につかず、若太夫竹田の切狂言もうち出しまへ、いろは茶屋の仲居あかまへたれと俱に毛氈を引ずりてはしり、島の内の迎へ駕、ハイ〜馬じやく〜につれてもまれ行ほどにはや日本橋ちかくなりて、往來もすきたりければ頓てはしりいだしてゆくまゝに早なが町の宿に著たりける、左平次さきにたちて、「サア〜、お歸りじや、やどの女どもおはやうござります、「アイ〜、是は左平さん、御苦勞、ときに今の損印の理屈はどふだろ、左「かしこまりました、いつきにせいらくして參上わいな、此「そんならはやく〜、トふたりはおくへとふるとおんなきたりて、「モ

シナお湯におめしなさらんかいな、おひもじかア御膳にいたしましたしよわいな、彌「イヤめしも咽へはとふらぬなんだかそはくして、しかし湯へはらよつと這入てこよふ、北「おそくなる湯もいじやアねへか、彌「イヤ、良ばかりあらつてくる、北「おきやアがれハ、ハ、ハ、ト此内彌次郎はのにいりにゆく、しばらくして左平次損料ものをふろしきにつみみてはしりもちきたり「おまちなねであつたじやある、トつみみをとけば北八かれこれとひねくり廻し「モシぶいきものばかりだね、左「じやて、是がいつちゑいのじやわいな、おまいには此黒袖がよかる、北「なんだとほうもねへ紋所だ、そしてだけがてんつるで袖はてへそうに大きい、これを著たら無鹽の奴風といふものだろう、そつちらの嶋はなんだ、左「ふとりじやそふな、北「イヤ此小紋がよからう、ト引たてみれば女のきもの也、左「ハ、ハ、ハ、わしやおとこのきりもんかとおもふてとてきたわいの、北「よし、斯しよふ、小袖ひとつじやア、しみたれだから、此女小そでをしたにきてうへはふとりじまときめやせう、トふたつかさねてきかへおびをめてゐるところへ彌次郎ゆよりあがり來り「チャ左平さんはやいな、エ、きた八めが著たはく、男ぶりがいゝからどこへ出しても借著したとやつぱり見へる、北「しやれずとはやくしたくをしねへ、彌「おらア此黒いやつかよし、旦那と見へるやうにお太刀一ほんこうきめてゆくは、北「コレサおまへきものをきねへ

か、裸身にその脇ざしを差て行つもりか、醫者が清盛さまの脈を見にいきやアしめへし、とんだうろたへやうだ、彌「ときにはをりは、左「おまい様は此ぬきもんになされ、北「けちなはをりだ、干鯛の仕切にゆかふといふなりだ、彌「人の事をいふてめへのふうは舊木寸伯さまの代脈に來たといふふうだ、ハ、ハ、ハ、左「おしたくがよござりますんじやうわいな、北「チャおいらはまだ湯へはいらなんだ、彌「ばかアいはずとサア、出かけやう、ト打つれてこゝを立、左平次はふたりが百兩のとみにあたりしにつけこみ、なんでもわりまへをせしめんとてむせうにおひやりちらかし、このやどのぼんどうへふきこみしんまちあけやへのがみをもらひ、打つれ此所を出かける。

○筑波 若太夫、竹田、是は前にありましたか。

○鳶魚 ありません。お初です。

○竹清 こゝには斯う云ふ風に書いてある。東第一竹田近江のからくり、第二豊竹若太夫あやつり、第三角芝居、大阪太左衛門かふき大芝居、第四中の芝居、鹽屋九郎右衛門、是も歌舞伎、第五竹本筑後の操り、大西の芝居が絶えてから筑後の事を大西と云ふ、いろは茶屋」と云ふのは芝居の前に四十七軒あつたお茶屋です。



載所「考習時曲歌」籠色内の嶋

○若樹 「嶋の内」の迎ひ駕」是は芝居に行つて閉場ねた時に、嶋の内からは僅かの距離ではあるが伊達で迎ひに行く。夫れから其處で遊ぶ。此處に浪花土産と云ふ本があります。之に嶋の内と云ふ中に、駕は客の送り白人、おやまとある。おやまの朝迎ひ、若衆方、帽子掛などのとき襟に縫物をなせること外の里に勝り至つて花やかなり、帳場名うてのものは何某であると書いてある。

○二葉 迎ひ駕は色駕、茶屋駕、勘當駕などと云ひ、重井筒に「送り迎ひの色駕もしばし途絶えて、何處にも馴染々々の寝入はな云々」ともあつて、意氣な駕でせう。

○竹清 浪花土産と云ふ本を御の噂に引いてある。浪花土産に委しとある。

○若樹 「たいしようのかばやき」是は道頓堀で名高いと見える。安永六年浪花名物富貴地座位に「大正の饅道頓堀、柔かに忘れ難き風情あり、此にほひにたまりかぬる鼻いづもなく木の葉天狗の芽

出しにもなりなんとて夏のくれ尙ほ一ト間をせきたつ」とあります。

○仙秀 「いろは茶屋」の起原は南水漫遊の續篇に「古は道頓堀側芝居の近邊とても今のとく寸尺の地を争ふこともなく建家まばらなるゆゑ、炎天或は俄雨の節見物の諸人難遊に及びしにつき元禄十三年卯十一月立慶町役高二十八役、吉左衛門町役高二十役、都合四十八役右兩町一役に水茶屋一軒づゝ御免有之、濱側に於て板がこひの内に床几をかまへ、茶店を出



載所遺拾會圖屋樂場戲
籠暖屋茶はろい

すことゝは成たれども、其頃は萬事手輕き事にて右茶屋四十八軒出來し故世俗に呼んでいろは茶屋といふ」とあります。また「戲場樂屋圖會拾遺」には「元禄三年申十一月よりはじめるとあります。そして「此のうれんをかける所いづとなくうせて今すこし残る、されど古格をもつていろは茶屋の名を呼べり」とある、これは享和二年板本です。

○若樹 つまり後になつては「大正」が無くなつてしまつた。

○竹清 「いつきにせいらくして」とあります。是は此間らまたの噂を見ましたら「穿鑿」と云ふこととです。今は「せいらく」と書いてある、意味を爲しません、是は「穿鑿」と云ふことだと、ちまたの噂の間答に書いてあります。

○落花 此處には「詮義」と書いてあります。

○共古 大阪の方言の中にも「せいらく」と云ふことがあります。それから「てんつるてん」

○鳶魚 是は東京の「つんつるてん」ですな、昔は「てんつるてん」と言ひましたかね。

○竹清 云つたと見えますな。

○若樹 何か御説があつたやうですな。

○共古 吊し上ることを「てんてるてん」と云ふのでせう。たゞそれだけの事でせう。

○落花 天に吊し上ると云ふことでせうな。

○鳶魚 是は嘘ではありませんか。テンツル、テンツル、スツテンテンと云ふ、あれではありませんか。嘘から移して形容にしたのでせう。

○鼠骨 嘘をやつて歩く時には皆著物は短いから、あれの洒落ですな。

○若樹 「無鹽の奴鼠」

○鳶魚 生の奴鼠でせう。

○落花 生きた奴鼠でせう、鹽に漬けない。

○鼠骨 大阪邊では生きて歸つて來たと云ふことを無鹽に歸つて來たと云ふ。旅に行つて達者で歸つ

て來た時などに云ひます。

○共古 無鹽と云ふことは總て物の新しいのを云ふことで、源平盛衰記にも「無鹽のひらたけなるぞ」と云ふことがある。これによれば本文も新式の奴鼠との意でせう。

○落花 吾々の地方にも残つて居る言葉に無鹽と云ふことを云ふ。總て鹽に漬けないものを云ふのです。

○若樹 生きた奴鼠は面白い。

○鳶魚 面白いですな、生きた奴鼠は見立てが宜い。

○鼠骨 此處にある醫者の名は何ですか。此頃普通に斯う云つて居つたものですか。「帶木寸伯」何か

さう云ふ人でもあつたのですか。

○若樹 洒落でせう。

○鳶魚 醫者が清盛の脈を見に行くと言ふのは、清盛は火の病で、カツ／＼として居るから、それで醫者が裸體で行つたと云ふ意味でせう。「干鯛の仕切りにゆかふ」と云ふのは。

○共古 田舎の人が行くのを云ふのでせう。

○鳶魚 買ひに來るのでせう。仕切の方ならば漬の人だから、是は百姓の方でせう。肥料を買ひに來

た方でせう。

○共古 「おまい様は此のきもんにしなされ」ぬきもん」と云ふのは紋を染ぬく様にしたのでせうか。

○仙秀 紋を消したのではありませんか。

○若樹 石持の事を云ふのではありませんか。

○仙秀 さうでせうな。

○若樹 湯から上つて来て周章で禪一つで太刀を持つたと云ふやうな事は、旨いと思ひますな。

○鼠骨 洒落が旨いですな。湯に這入つて垢が抜けてる。

○鳶魚 「むせうにおひやりちらかし」おひやり」はどうです。

○若樹 是れこそ囃子の笛の音から出ては居ないかね。

○共古 色道大鑑に、おひや昔の太鼓持の名也とある。これから出たものか。

○若樹 笛の語などに「おひやり」……などと云ふ。浮き立たせる事を云ふのではないでせうか。

○鳶魚 其處らが宜い所でせうな。

かくて三人は足もさらに長町を北へ堺筋ますぐにゆけばはやくも順慶町にいたりける、名にしあふ此所は夜見せはんじやうの町筋にて、兩側に内みせ出見せ尺地もなく萬燈をてらし、吳服屋道

其屋ふくろもの横箆飛瑠璃馬環の類あるかとおもへば、その隣には鹽小桶飯櫃すりこ木杓子な
んど、あるひは神棚もとめて代錢をはらひきよめて行あれば、佛像買ふて尻くらい觀音と不足錢
あたへて走るもあり、傘の買人に下駄をはくあれば、草履のうり人にわらじはくあり、兩替やは
目を皿になして天秤を打ならし、金物屋は口を刺刀にひとしくきれものを商ひ、肴屋しろものは腐
たれどもうりこゑはねて呼立るを聞ば、「ヤアおつきな鯛じやア」「鱧じやア」「くるまやア」
このしろやア、はつの身のきりうりやア」「さつまいもり」「ほつこり」「ぬくいのがらん
かいな、やアほつこりじやア」「上かんや」「ぬくい」「餅のたいたのあんばいよし」「ヤアまけた
ノ、しんまいの前敷じやア」「すしうり」「御ひやうばんのちくらすし鯖じや」「鳥貝やア」
北「アレ、彌次さん見なせへ、アノ餅は京でくつたがとんだよかつた、ひとつやらかそふ、夕め
しもくわねへではらがへつた、彌「ホンニそふだ、モシこれはいくらだね、すしや」「ハイそつちや
が四文、こつちやのが六文じやわいな、彌「ヲットよし」、コウ北八そんなにやみととつてく
ふな、又長町でくわしをくつたやうなめにあをふぜ、モシこけへ三拾貳文ばかりがつよんでくん
な、トぜにをはらへばすしや竹の皮につよみて出すを彌次郎とりてみちノくらう、北「コレおれ
にもよこしねへ、彌「あとで竹の皮をやるう、北「エ、むしのいよこつちへ、トとりにかゝる、彌次

郎やるまいとするところ、下から犬がひよいとびつきひつたくるト彌次郎、「アイタ、、、、、北」どふした彌次さん、彌「いめへましいちくしやうめにしてやられた、犬」わん／＼、彌「エ、こいつめが、トあしでけると犬はにける、おつかけるはづみに井戸がわへ又ぐはつたり、彌「ア、いたく、コリヤとんだ所へ井戸を出しておきやアがる、四ツ辻のまん中に、左「コリヤ井戸の辻といふとこじやわいな、北、いゝきみだ、おれにくわせねへむくひだは、

ひとつ下されと犬めがとり具はさてもよいきみ團子ならねど

○二葉 何も別に無いやうに思ひますが、どうでせう。

○鳶魚 「尻くらひ観音」は前に出ましたが、其あとの「傘の買人に下駄をはくあれば」「下駄をはく」と云ふのは値段を高くして、一錢で買ったものを二錢で買ひましたと云ふのを下駄を穿くと云ふ、それでせう。あとの「草履のうり人にわらじはくあり」は、其對を云つただけで、草鞋を穿いて草履を賣つて居ると云ふだけです。「あんばいよし」は前に云ひましたけれども、もつと適切なものは「皇都午睡」の三の下に、「あんばいよしは田樂」とありますから、田樂の事と云ふ事は分りません。それから「ちくら鮎」と云ふのは分りません。是は御教へを願ひます。

○竹清 松の鮎のやうな名ではありませんか。

○若樹 「はつの身のきりうり」「くるま」

○二葉 「くるま」は「くるま海老」とある。「はつ」は鮎で、京阪でいふシビです。

○若樹 鮎のことは今でも「はつ」と云ふさうですね。極く安い、下魚として卑んで、餘り食はないでせう。

○鳶魚 それから「ほつこり」

○二葉 「ほつこり」は甘藷の焼いたのでせう。今でもほつこり／＼と賣りに来るさうです。

○鳶魚 焼甘藷だ。

○鼠骨 「ほつこり」は焼甘藷でなしに、温いと云ふことではありませんか。

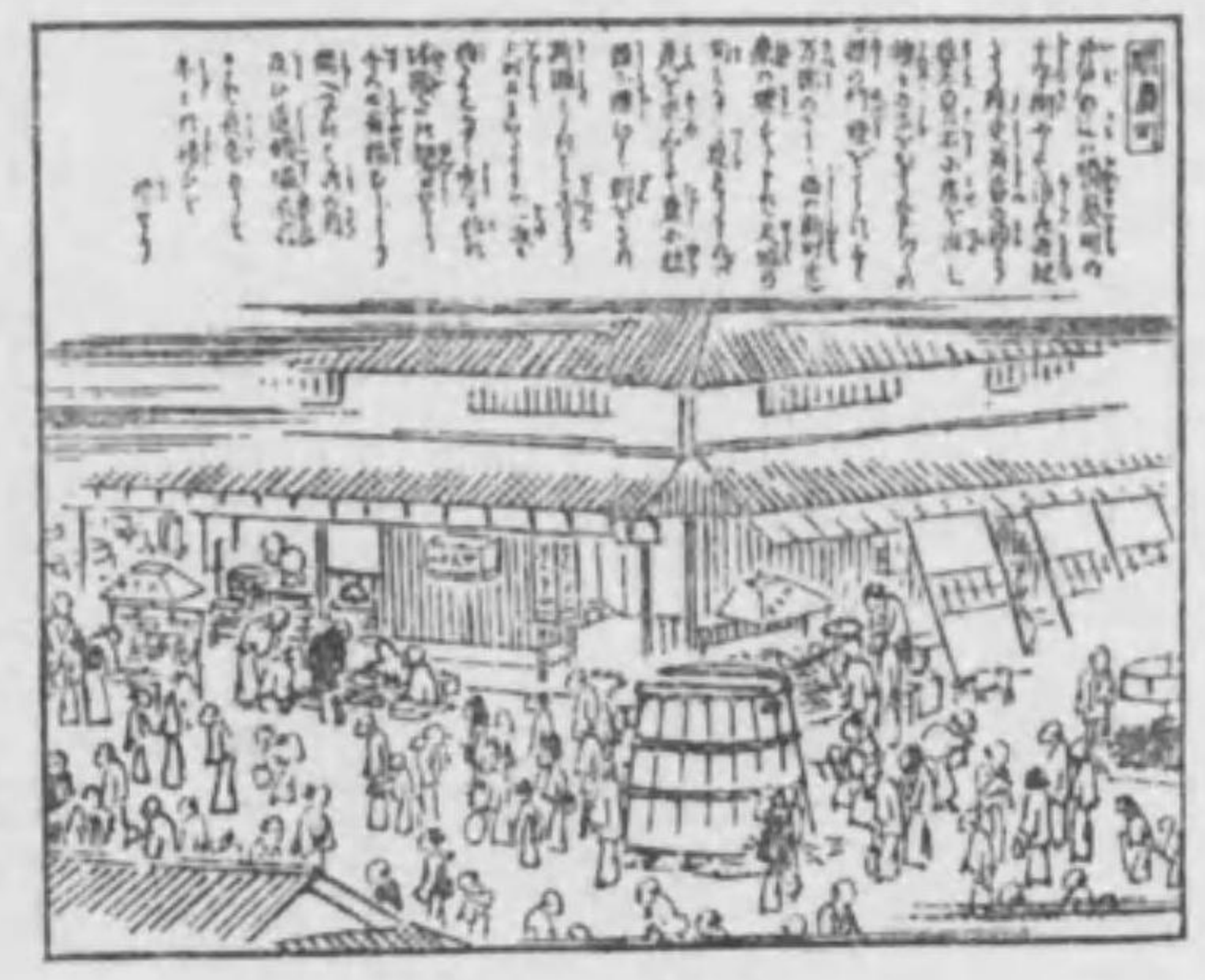
○鳶魚 原因はさうでせうけれども、事實は焼甘藷の事でせう。

○鼠骨 呼賣で、おいもでホイ、ほつこりホイのホイとやる、温いと云ふ意味でせう。それが轉じて甘藷の事を云ふやうになつたのでせう。

○若樹 無意味の事を色々書いてありますね。是はやはり狂言の太刀毒なぞに、市の所で賣物を見て、さうして是は何々と云ひ立てる所がある。成程、是には何がある、其隣には何があると云ふ所から來て居るのであらうと思ひます。一九先生始終狂言の本を見て居たらしいですな。

○竹清 「井戸の辻」と云ふのは、今でも井戸があるのでせうか。

二三〇



載所「賑の波難」

○鳶魚 あるでせう。此井戸の辻と云ふのは新町通りです。

○竹清 辻のまん中にあるらしい。

○鳶魚 其處は餘程名高い所と見えて、梅川忠兵衛の傳説の中に、忠兵衛が懐中物を落したのを梅川が拾つた、其拾つた場所は、井戸の辻である。それで其處で直ぐに返して貰つた、それが、そも馴れ染めた始であると云ふ艶つほい傳説さへある。餘程名高い所と見えます。私は其處を一度通つたことがあります。

○竹清 井戸を見ましたか。

○鳶魚 見ましたが蓋がしてあります。

○竹清 大きいですが。

○鳶魚 大きくはない、並の井戸です。誰かの屋敷の跡がさう云ふ風になつたのでせう。

○竹清 それは淨國寺の舊地で、其寺の井戸だと云ふことが書いてあります。木の井戸側です。けれ



載所(板年二十化文)玉光夜歌狂

ども現在其井戸が残つて居るかどうか、場所は西寺町でした。

藤栗毛輪講

二三一

○鳶魚 東京の井戸よりは少し側が高い。其上に鏡が掛つて蓋がしてある。

○竹清 上も何もない、丁度丈の高い天水桶を出しッ放しにしたやうになつてゐるから、突つ掛るでせう。扇松さんなら無論突つ掛るでせう。

○鼠骨 「井戸を出しておきやアがる」と云ふのは可笑しいですね。

○鳶魚 本當に出してあるやうに見えますよ、四辻のまん中にあるのですから。「出しておきやアがる」と本當に言ひたいやうな所です。此狂歌は骨が折れたやうですね。

○共古 是は桃太郎から取つて来ただけでせう。犬が鳥貝の鮎を取ると云ふ方と、それから桃太郎に一つ下さいと云ふのと、桃太郎の黍團子を一つ取るのと、いゝ氣味と云ふのと、それだけです、大分混同はして居りますが……。

○鼠骨 此頃の狂歌としては調子が餘程新傾向ですな。

○若樹 新傾向ではない、行詰つた方でせう。一つくだ、と切つて、されと犬めがとり貝は、さてもよいきみと切つて、團子ならねどと讀むなんざア。

○共古 「ちくらら鮎」と云ふのは何でせう。屋號で廣まつたのかも知れませんが、よくは分りませんが……。

○仙秀 さうでせうな、寛政六年の虚實柳巷方言に、すしは泉利千くらとある。

○若樹 「兩替やは目を皿になして」江戸ではありますまいね。

○共古 江戸にあります。天秤が飾つてあつて、銀を持つて行けばトンノとやる。

それよりも往來をおしわけてゆくさきにあみかさふかく打かぶりたる卜筮者の口から出次第、「サアノ御遠慮はない、お出なされ當卦本卦すみいろの考こるかうすいをあてるが奇妙、うせ物は存せず預りものは仕らず、待人は遅いか早いか來るか來んかの二ツ、あたるも八卦あたらぬも八卦、どつちやでも見料は拾六銅ツ、申うくる是ばかりは違ひはござらぬ、サアノこれへノ、彌「ナント北八おいらがあした百兩とる事しれるかしれねへか何もなぐさみ見てもらふ、北「コリヤおもしろへ、彌「モシわつちが運を見てくんなせへ、ト十六文出せばうらないしや彌次郎のかほをよこめに見ながら、めときをと、さん木をならべ、しばらくかんがへ、「ハ、ア是はおまいとひやうもないゑらい仕合なことがでけるわいな、彌「さやうさ、大きに心あたりがありやす、うらない「そじやあろぞいな、卦は坤の卦、坤はこんくはい、俗に申す狐すなはち狐福と申して誠にふつてわいたよふなさいわいが來ると見へます、北「コリヤ奇妙よくあたりやした、うらない「しかし變卦は乾の卦乾なけんけれつの象り、本卦の坤と變卦の乾と合してこれを考ふるときは易に

曰乾坤ふたつのあいだをぬけ離の卦にあたつて中たへたり、扱は玉なき鼓鐵炮と申事ござれば萬事にお心をつけらるゝがござります、彌「こいつはすこたんく、そふいふわけじやアねへ、もふこつちの手へにぎつたもどうぜんだものを延喜のわるい、うらない「イヤそこであたるも八卦あたらぬも八卦、北もふよしなせへ、十六文たすてた、トこどといひながらこゝを打過ゆくほどにはやしん町ばしを打わたりてひやうたんまちにぞいたりける、さてこの曲輪は寛永年中にはじめて御免許あり田甫をひらきて新に町を建たりしより新町とよんで廓の惣名となせりとぞ、むかしより今に至るまではんじやういふばかりなく兩側の六字みせうりものに花をかざりきらびやかにならびたるを壹軒々々に差覗きつゝ、それより阿波座越後町を見物し局女郎の袖ひくを罵り興じてゆくまゝにやがて九軒町にいたれば、左「モシくこゝがみな揚屋じやわいな、北「なる程こへそふな屋へほねだ、左「サアくこゝじや、おまいがたはそこにお出なされ、トふたりをけんくはんにまたせおきて左平次ひとりすみはんのかつて口へはいりかくと云いれる、この所は長まちのかわちやよりおりふし客をおくりこす内なれば、左平次手紙をもち來りてわたしけるのへていしゆさつそくはをりはかまにてむかひに來り、ていしゆ「コレハよふお出下さりました、コリヤく仲るども御案内申さんかい、サアおとをりなされませ、彌「そんならゆるしなせへ、コ

ウ北八來ねへか、かどぐちに立はだかつて花屋の柳じやアあるめへし、左「コリヤでけましたハ、い、い、サアお出、ト玄關よりあがりいく間もくこへてゆくほどにくつとおくざしきのはなやかなる所にあんないすると、左平次はわざとふたりを大じんふうにもてなし、はるか末座にすはる、仲る共ちやたばこほんをもち出るうち、

○鼠骨 「けんけれつの象り」是は洒落だらうね。「すこたんく」と云ふのは物が外れた事を云ふのでせう。「すかたん」でも宜い。「すこたんの」何とか彼とか云ふ歌がありましたやうですが、忘れ

- 竹清 「乾坤ふたつのあいだをぬけ」
- 鳶魚 成程是は五斗兵衛の所です。「六字みせ」はどうも分らない。團ひ店でせうか。
- 竹清 團ひ店で、鹿と云ふ字だからろく字店。
- 鼠骨 「すみはん」と云ふのは當時有名だつたのですか。
- 落花 吉田屋と云ふのがありますね。
- 竹清 初は「すみはん」となつて居りますが、私共の本には「よし田や」とあります。
- 鼠骨 「すみはん」と同じ事ですか。

- 竹清 違ふでせう。吉田屋と云ふのは實際に大きな家らしかった。
- 共古 「すみはん」の方が古いのです。
- 若樹 天保版の時には「すみはん」が衰へて、吉田屋が盛んだつたから吉田屋に直したのでせう。
- 鼠骨 吉田屋は出て居りますか。
- 鳶魚 今でも名高いでせう。第一流でせう。
- 仙秀 新町廓内の新堀町に、住吉屋半四郎といふのがあります。その家のことでせう。
- 筑波 墨色判断はどうでせう、何時頃から始つたのですか。
- 共古 墨色判断はズツと古くからありますが、何時頃から分りませんね。やはり江戸あたりにある。一の字を透してやる、あれでせう。
- 若樹 「狐福」と云ふのはありますか。聞いたことはあるやうですな。
- 落花 「けつぬき」に引掛けたのではないでせうか。
- 鼠骨 上方では狐を「きつね」とは言ひません。「けつね」と云ひます。併し一九は多少それを利かしたつもりでせうね。「きつぬき」よりか、狐にだまされたといふことから持つて来たのでせう。
- 若樹 狐福と云ふ熟字があるでせうか。

- 鼠骨 それがあるから——此處に適切だから持つて来たのでせう。
- 仙秀 追記 「狂歌浪花の梅」(寛政十二年板)に、「商人の嘉例はつさす初午のむまゝ、参り買ふきつね福」といふのがある。
- 竹清 「花屋の柳」はどうです。
- 共古 「乾坤ふたつのあいだをぬけて」は。
- 落花 丁度離の卦は中が切れて居りますからね。
- 竹清 五斗兵衛の文句は何と云ひますか。
- 仙秀 「陰に離れ陽に離れ、さては玉なきから鐵砲」五斗兵衛の臺詞で、淨瑠璃の「義経腰越 状泉三郎館の段」です。
- 鼠骨 「かどぐちに立はだかつて花屋の柳じやアあるめへし」花屋の柳」は前に出ましたね。
- 若樹 花屋の柳と云ふのは江戸に限つたものでせうか。さうでなければ左平次が「でけました」と云ふのは分らないでせう。
- 竹清 花屋の前を通りますけれども、うつかりしてツイ見ませんが……。
- 仙秀 近頃の東京ではあまり見うけませんな。

○竹清 あることはあります。神田の紀國屋の前の花屋にあつたと思ふ。

○共古 維新後は見たことはありません。私共が知つて居るのでは、牛込寺町通りの花屋には可なり大きなのがあつた。

○竹清 日本橋の中通りに一軒ある、屏風などを賣つて居る所に柳がある。あんな所に柳があるのは可笑しい。あれは花屋の遺蹟ではないかと思ひます。

○共古 此柳があれば必ず六角堂と稱する柳です。他の柳では花屋にならない、六角堂と云ふのは一番よく枝垂れる柳です。

○竹清 彼處の榎原に行く所の道にありますのは餘程枝垂れて居る。

○仙秀追記 一九の作で洒落本の「商内神」(享和二年板)に「入口に立て居すと花屋の柳じやアあんめへし」と同じ趣向でいつてゐるのを見たり。

ていしゆ「ていすめでござります、御ひいきによふこそ有がたふござります、彌御亭主さんか、わつちらア今度江戸から仕入に登りやしたが御當地ははじめてござりやす、逗留のうちほどふせたびくめへりやせうからおたのみ申やす、そのかはりわつちらアちよつと來てもはしたがねつかふことはきらいだからむだ遣ひの箱とふた箱は別に爲替にふつてよこしてあるから、そこ

はいつかう未練なしさ、しかし生得が商人といふものだからはじめからそふはいきやせぬによつて、マア今宵はおめへのほうでも随分やすあがりになってくんなせへ、ハテあとのためだからノウ、左平次さん、左さやうく斯いたしましよ、夜前お著なされておたくびれでもあろさかい、マア今宵は太夫さんがた借て御らうじて御酒ひとつあがつてお歸りなされるがよござりましよ、ハテまたあすの夜さりなお供いたしましたしよかい、トこゝにて左平次ふと心つき今宵かねをつかはせた所がひよつとあすの百兩どういふことにて間ちがはまいものでもなし、手に入らぬうちは不定なりと順慶まぢのうらなひしやがことばおもひ合せ安心ならねども、今さらこのまゝにもかへられず、ちよつと一ばいのませてつれてかへるもくさんゆへかくはいふと見へり、彌いづれともよろしく、左「そしたら仲居衆太夫さんがたマアかりにやらんせ、なかあ「ハイかしこまりました、トたつてゆく、此内酒さかな出、なかい共あいてにのみかけてゐると、となりざしきにはぐつと西國がたのお侍と見へたる客人たいこもちけいこども引よせて大さわぎにじやれちらすを、ふすまのこなたよりそつとのぞきみればけいこのうたう三すじほどある薄聲のあたま、やがてすほらに鳴鐘ならば權八がよかろうけんれど、是から貞月といふておくれの神かけて願ひりかしく、チッンシヤン、たいこ惣八「イヨノ、おしまさん、ソリヤ南の權八めが摺ものうたじ

やな、けい、こさよじやわいな、東南さんの手をつけてじやあつたわいな、客「コリヤ〜わいども
 がこいからおくに踊りもおどるての、サア三味引だいてたもれ、ト此内客人たつて手ぬぐひをか
 ぶり兩の耳を出し、はをりを横ちよにかたさきを出しかげちんぢばしよりして手にあふぎをもつ
 ト、けいこがさみせん「トヲチテン〜、客うた「コリヨ合、コリヨ合、コリ〜、もちこい
 か、ソコ、ヨツチヨン、三味「トヲチテン〜、うた「すやまお龜女はすやまの山の古狐龜女しり
 よふれかんべまくれちやちよれちや、コリヨ合コリヨ合コリ〜、もちこい、コリヤ、せど
 にや小屋がけ、龜女がばんそくばつたのすうからす、ほうぶら枕にへこといて、けこねいこ〜ね
 い、すりさるき、これしてよかこととしてのけた、ソコ、ヨツチヨン、トヲチテン〜、昔々「ヤン
 ヤ、でけました、客「ア、だりがてい〜、こんが酔くらひおつてわいどものしやんせめにがら
 りうはあてや、おとろし〜、げい「コヲホ、〜、何いひなますやらこちやねからよめんわいな
 客「なじかい〜、げい「コヲ、すかんやの、アノお顔見なませぬらいおつきな目してひかる様に
 ねらんでじやわいな、客「イヤこやつふとうなやつ、わいどもの頬よりお身のつらなんじや、
 ふぐとうどもの横さるきせるやうなぶつそうつらしておもしろふないぞ、わいども最早づらんば
 い、づるぞ〜、ともつての外むかばららちて立あがるを伸るども引とめ、仲「コレナアおまい

さんそないにんでお腹たしますぞいな、たいこち「コリヤしままが無調法、ナントこういたし
 ましよかいな、どうやらおざしきがしゆんできたさかい是からわつさりと額風呂へなりこみの例
 のフカ〜フツ、カホカ〜けつこう〜なぞはどでござりますぞいな、客「なんじや額風呂とい
 ふは敷ふろのことじやな、こやつわいどもをのろまじやおもひおるか、客共に向つてあんがい
 おろよいことぬかいてよかばいものか、づくにうどもにやいてくれるぞ、ト此客人はらち上戸
 と見へてむしやうにおこりちらしみな〜とめるをもつきのけ〜ぜひかへらうと大もめのさい
 中、あいかたの大夫引ふねかふるをつれてこ〜に來ると、仲「ソレ〜大夫主が來なましたわい
 な、大夫「チ、しんど、おまいさん何じやいな、仲「今おかへりなますとてゑらうおはらたて〜じ
 やわいな、大夫「おまいさんもマアこちや洲濱のうちかたに出でじやさかい、ちとの間まつておく
 れなませといふておこしたじやないかいな、それに今お歸なますはなんのこつちやいな、それほ
 どちがおいやならサアおかへりなませ〜、客「イヤわいどもそれでづるといふではなかばい、
 たんだ此廊ども脚ふりにづらんばいといひおつたのじや、もふよかばい〜、引ふれ「よふせわや
 かしてじや、サアあつちやへお出なませ、ト大せいに引立られかしこのざしきにゆく、

○落花 どうも読み方さへ分らんのですから、意味は分りません。どなたか一つ願ひませう。読むの



原 本 挿 畫

が漸く讀んだのです。

○若樹 「むだ使ひの二箱とふた箱」是は千兩箱でせうな。

○共古 さうでせう。

○鼠骨 此千兩箱の所の言葉ですが、是が江戸から仕人に上つて来たやうな人の言葉ですか。こんな所は何だ可笑しい。「爲替にふつてよこしてあるからそこはいつかう未練なしさ、しかし生得が商人」と云ふやうに随分下卑て居りますね。

○若樹 それはわざ／＼やつたのでせう。素性を見せた所です。一箱二箱と云つて居る所に「やすあがりになれてくんせへ」と云ふので随分お里が見える。

○共古 「三すじほどある薄髪にあたまですほらに鳴鐘ならば權八がよかろうけんれど是から貞月といふておくれ」是は何の文句にありますか、貞月と云ふのは權八に何か關係がありますか。

○若樹 權八と云ふ幫間でせう。「南の權八めが指り物のうたじやな」とある。權八が頭を刺つて是から貞月と云つて下さいと云ふ意味でせう。刷物を配つて……。

○共古 貞月と云ふのは女の名前のやうですが、是は男ですな。

○若樹 幫間です。法體になつたのでせう。

○鳶魚 此處の所は、鳴鐘、權八などと云ふのは清元でせうな。

○鼠骨 「やがてすほら」とある、是は「すほう」でせう。「ばうす」でせう。

○竹清 すほうに鳴鐘でせう、鐘だから「ごん」が出たのでせう。

○共古 南と云ふ所はあるですな。南新地とか何とか云ふ。

○竹清 東南さんと云ふのは何です。

○若樹 難波土産の中の崎人に、浪花は大みなと希有の好士あまたにして遊里にはまりて大盡の名を得るあり、諸藝堪能にして人にしらるゝあり、人にさせて楽しむもあり、夫が中にわきて人の及ばぬ所ありて人にしらるゝ雅人達の中でも、といふ前書があつて數十の名が列ねてある中に、東南と

いふのがある。又雅婦の部に東南の妻といふ名が見える。

○仙秀 「虚實柳巷方言」にも大盡株のあとに名人と記し、其中に東南の名があり、又をどりの部にも東南がある。つまりをどりの名人でせう。手つけたは踊の手を附たと云ふ意味です。

○鼠骨 客の言葉は幾らか上方が交つて居ますね。

○若樹 「すやまお龜女」と云ふのは。

○鳶魚 お龜女の事は、何處かの宿で飯盛の事をお龜と云ふ、あれでせう。けれども「すやま」と云ふのは一體何處だらう。「すやまの山の古狐龜女しりよふれかんべまくれ」と云ふのは何の事だ。

○落花 「しりよふれ」と云ふのは。

○竹清 裾と云ふ事ではありませんか。

○鳶魚 「ちやちよれちやコリヨ合コリヨ合コリ／＼／＼もちこいコリヤせどにや小屋がけ龜女がばん」

○若樹 龜女が番をするのだ。

○二葉 「そくばつたのづうからす」是は西洋の言葉のやうですな。

○鼠骨 是れこそオベラに宜いな。

○共古 「ほうぶら枕に」

○若樹 「ほうぶら」は南瓜です。「すりさるきこれしこよかこととしてのけた」

○竹清 「是はよい事をしてのけた」と云ふのでせう。

○落花 「これしこ」は「是程よい事」でせう。

○鼠骨 「すやま」と云ふ山があるのでせうな。固有名詞でせう。

○落花 此人の言葉はどうしても鹿兒嶋か宮崎縣の言葉らしい。

○鼠骨 鹿兒嶋らしいね。「せどにや小屋がけ龜女がばんそくばつたのづうからす」どうしても鹿兒嶋でせうな。

○若樹 「だりがてい」と云ふのは何處の言葉でせう。

○鼠骨 是は鹿兒嶋ばかりではない、西國が交つて居るやうです。

○落花 草臥れたと云ふことでせう。

○鳶魚 「だりがてい」とか「しやんすめ」とか云ふのは日本語ではないやうだね。

○鼠骨 「がらりうばあてやおとろしく」は「恐ろしい」でせう。

○竹清 之を翻譯すると、「ア、草臥れたく、こんなに酔ひくらつて俺の敵娼が來たら叱られるだら

う、怖い、怖い」と云ふのだらう。

○若樹 其次の「こやつふとうなやつ」是は「ふ」ですが、「ぶ」ですか。原本は澄んで居りますね。「太い」でせう。

○竹清 「わいどもの頬よりもお身のつらなんじや」「よこさるき」

○鼠骨 「横あるき」でせうな。「ぶつそうつらしておもしろふない」でせう。

○若樹 是で一首の萬葉が出来てしまった。「わいどものつらよりお身のつらなんぢやふぐとうどもの横さるきせる」

○鼠骨 それは面白い。

○落花 「ぶつそうつら」とあるが「佛頂面」是は前にありましたでせうな。

○鳶魚 前には無いやうです。

○落花 「ぶつちようづら」と云ふのは此本には佛頂と書いてありますが、本に依つてはこんな字は書いてありません。今私は忘れました、何でしたが、つまりぬ本でしたが、「ぶつちよう」と云ふのは多分不調法と云ふのではないかと思ひます。

○共古 佛の頭はブツ／＼して居る、それで口小言をブツ／＼言ふ奴を佛頂面と云ふのだらう。私

はさう思つて居ます。ブツ／＼云ふ、粒々ですな。阿彌陀様の頭はブツ／＼して居る。螺髪頭ですから。

○若樹 それはどうだか。

○共古 ブツ／＼する顔付きをする。

○若樹 佛頂禪師がこんな事を言つたとか何とか云ふやうなことがある。夫れは固より取るに足らないが、他に色々な解があつて結局解らない。

○二葉 「大夫さん借て」と云ふのはどう云ふのですか、借りるのはどうでせう、あの方にもありますが、私共は委しいことは知りませんが……

○鳶魚 呼びにやる事を普通に借りると云ふのですか。

○二葉 借りると云ふのは店の引付けですね。畢竟引付けをさせるだけに借るのです。客へのお目見えですな。此方でいふお見立です。一人々々呼んで出して来て盃をさして引込んで行く、其中で氣に入つたのを見立てる、選擇するのですね。

○仙秀 太夫を一つ呼ぶ所が後にありますね。

○若樹 前の方の龜女、是は前にお國舞を踊ると云ふことがあるから、何處の踊と云ふことは分りま

すね。夫れから幫間が「額風呂へなりこみの例のフカ／＼フツ、カ／＼ホカ／＼けつこう／＼」
是は當時の流行物でせう。

○仙秀 額風呂と云ふのは骨董集だつたかに繪があつたと思ひましたが……しかしこれは古い時代の
であつたらう。

○鳶魚 あります。ところが仕舞の方に額風呂と云ふのは鼓風呂だな、と云ふことがある。鼓風呂と
云ふのは風呂屋の名前のみあつて風呂が無いのでせう。鼓風呂と云ふのは湯女は居るけれども湯は
ない。フカ／＼フツ、カ／＼ホカ／＼と云ふのは何の事か分かりません。

○竹清 フカ／＼フツのホカ／＼とあるから、私は蒸風呂かと思ひました。それで「わいどもをのろ
まじやとおもひおるか」と怒つたのですかね。

○鳶魚 「おまいさんもマアこちや洲濱」の「洲濱」と云ふのは家の名ですか。

○若樹 さうでせう。

○鼠骨 此處に「太夫主」と書いてある。「主」とは何です。

○鳶魚 是は「太夫衆」です。

○鼠骨 「衆」が間違つたのだらう。

○若樹 けれども此處では一人しか来ない。

○鳶魚 さうむづかしくはない、太夫衆、女中衆の「衆」でせう。

○若樹 單數と複數とある。

○落花 「太夫ぬし」でせう。一人です。

○若樹 「しま主」と云ふことがありますね。

○共古 田舎のお客様が額風呂と云ふのは鼓風呂ぢやなと云ふことを云つて居る。通でなければ客が
知つて居る筈はない。鼓風呂と云つても額風呂と云つても、客を取つた意味ではないと思ふ。客が
何だ鼓風呂だなど云ふならば、西國のお客さんは、名ばかりだと云ふことを知つて居るから通人だ
けれども、通人と見る意味ではないと思ひます。

○竹清 併し「例のフカ／＼」とある。

○共古 それは一杯飲ませる所がある。他で一杯飲みませうと云ふので、一つの河岸で以て涼むとか
何とか云ふ所がある、お茶屋です。決して遊女町ではないと思ひます。遊女の居る所へ斯う云ふ者
を引張つて行くことはありません。鼓風呂と云ふのはさう云ふ所ではないかと思ひます。若し田舎
者が知つて居れば餘程通人です。

○鼠骨 穀風呂と云ふものがあつて、これはやはり額風呂の事で、幫間が別の飲ます所へ座敷を替へて一杯飲まうぢやないか、それは面白い、結構ではないかと云つたら、兩方で散財して飲む程のろまではないと云つたので、此處に止まることを主張したのではない。

○共古 田舎者が云つたのは、湯に入ることを知つて居つて、たゞ額風呂と云ふことを云つたのではない。

○鳶魚 たゞお湯にお入りなさいと云つて、額風呂と心得て居る者はないでせう。

○共古 温泉場とか何とか云ふ名目のものが風呂になつて、一杯飲ませる所になつて居るのではありませんか。女を變へて向うの女を買ふと云ふことではないでせう。

○鳶魚 浮世草紙には額風呂と云ふのは湯はないとある。

○若樹 俺を野呂間と思ひ居るか、胡魔化するだらう、その手に乗る俺ではないと云つたので、額風呂は疑問にして置いてもそれで宜いだらう。

○鼠骨 「あんがいおろよいことぬかいて」

○鳶魚 「フカノ、フツカホカノ」が分らない。

○若樹 それは時の流行物でせう、「例の」とあるから。

○竹清 「おろよい」と云ふのは本字がありますか。

○若樹 「過言」とある。

○鼠骨 「よかばいものか」は長崎ですな。

○竹清 「イヤわいどもそれでづるといふではななばいたんだ此廊ども脚ふりにづらんばい」俺は歸ると云ふのではない、其處らを歩いて行つて來ると云つたのだ、モウ宜いだらうと云ふのでせう。

「脚ふり」と云ふのは散歩でせう。

○鳶魚 こちらには「素見」と書いてある。

○竹清 それでは同じ事ですな。散歩、散策と云ふことでせう。

さてかなたには太夫十人ばかり次の間につめかけひかへるト、てうしさかづきをべつにもち出伸るてうめんとすどりばこをひかへ、伸る「あふぎやの折琴さんこれへおかし、トよびいだせば折琴太夫さしきに出、さかづきとりのむまねして下におき、なかるのかほを見てにつこりわらひ立て行、伸る「つちやの雛松さんこれへおかし、ト此内だん／＼と大夫ひとり／＼に出、はしめのとく皆々さかづきをとりのむまねしてゆく、彌次郎北八は是をめぐらしきことにおほへ、こゝにもさま／＼むだあれどもりやくす、伸る「となたぞお氣に入なしたかいな、北「イヤもふのこらす氣

に入ら、そのうち三ばんめに出たはなんといふ女郎だの、なかるてうめんとり「ハイ西の屋敷の東路さんじやわいな、左「マア今宵は御見ぶつのみこのつちやさかい、あすの夜さりなとおゆるりとあそびなさるがよござりましよ、彌「ナゼ今夜でもいじやアねへか、左「ハテマアわしにしたいにしておきなされ、ト心にいちもつあるゆへこれぎりしようとする、彌次郎もくさんちがいてふせうふに「そんなら酒でもたらふくやらかしやせう、仲「けいこさんは、左「イヤそれも忍いわいの、お急じやさかい、北「こけへきて酒ばかりじやアはじまらねへ、何ぞ呼にやアこゝのうちへきのどくじやアねへか、仲「なんのまあ、サアおひとつお上りなませ、ホンニおはをりおとりなませんかいな、ト仲「でも二三人たちかゝり、彌次郎北八に羽をりをぬがせてたゞみながらはをりのうらにしろしあるを見つけてくつ／＼わらひ出し、仲「のいさ「コレ見いな、十もんじの糸ぬいがあるわいな、大かた損料の著物借てお出たのじやある、ト仲「どしちいさなこゑにてさゝやきわらふ、すべて長町のそん料にてはきものはをりともうらには白糸にて十もんじのしろしをつけおくとみへたり、をり／＼長町どまりの旅人はをかり著してしんまちなどへゆくことあれば、此さとのものどもみなかねてしやうちしてゐることゆへ、かくはさゝやきわらふと見へたり、左平次はこれをきゝつけ、心の内におかしくおもひおれども、彌次郎北八はつゆしらす、彌「ナント

女中しゆ、此くるわ中に太夫はいくたりほどある、みな惣揚にして遊んだらおもしろかろふ、北「わつちらが逗留の内どふぞみんなへそろひの仕著でも残していきてへもんだ、ノッ彌次さん、仲「ソリヤおうれしうおますわいな、ソノきりもんのうらに十もんじの印つけてかいな、今ひとりの仲「コレイナそないなこといわんすな、トそで引てわらへどもふたりはいつかうしらす、北「ナニうらに十のじとは何かあたりのあることだな、ちくせうめが、成ほどおめへなぞはいろいろあるう、こうてきに仇ものだ、ドレおさかづきいたゞきやせう、仲「ヲホ、、、、ゑらいあぶらいひなます、さよなら十の字のおかたへあぎよわいな、北「ナニ十のじとはおれがことか、コリヤありがてへ、トおのれがあそばれることはしらす、さかづきをとりあぐるとなかるてうしをとつてつぐとき、北八このなるのひざをちよいとつめると、なかむ「ヲ、いた、トとびのくひやうしさかづきにさはり、北八のひざのうへへばつたりおちるとそこらちう酒たらけに成、なかむ「ヲ、せうし、おきのどくなこといたしたわいな、今一人のなかむ「めつそふなきをつけさんしたがよいわいな、あなたじみ／＼しておわるかろ、そしてさゝのかゝつたのはきはづくものじや、ちやとく／＼み水でなと洗ふてあけさせ、仲「ホンニざつとなとあろふてさんじやう、おぬぎなませ、ト立かゝりぬがそふとする、北八はトに女のきものをきてゐるゆへうはぎをぬきてはかつこ

うわるしとなかるをはねのけ、北「イヤあらはずとよし〜、コリヤほんの不斷ぎだ、仲る「ハテ御
ゑんりよはおませんわいな、おぬぎなませ〜、トこのなかるどもふたり北八のき物これもうら
に十のじのしるしあるか見てやらんとおもひうなづきあふてむりにふたりしておびをときにかゝ
る、北八きもをつぶし、北「コレサ〜よいといふに、彌「ハテコリヤ北八ゑて吉じや、しみがつい
てはナ、ソレちよつくりとぞこの所ばかりゆすいでもらうがい、わな、ハテ火ばちでなりとあぶれ
ばじきにひることだ、トそん印ゆへあとでやかましかるふと目良でしらせて北八にぬけとおしゆ
る、北八大きにこまりはて、北「エ、なんのちつとばかりさけのしみたぐらひ、彌「ハテさてちつと
でもあとがきはづいちやア、ソレわるいじやアねへか、仲居衆太義ながらざつとつまみ洗してや
つてくんな、仲る「ハイ〜サアおぬぎなませ、北「ハテ扱なさないことをいふ、もふよいといふ
に、トいろ〜いひまぎらしてぬぐまいとすれどもとう〜ふたりしておびをとき、むりにぬが
せた所が、下には女のきものをきてるる、そでちいさくゆきのみじかい所をかくさんと北八兩手
をちよめてしりごみする、

○鳶魚 成程此處には「あふぎやの折琴さんこれへおかし」とある。「それへお越しなさい」と云ふ所
に「おかし」と書いてある。

○竹清 顔を貸して呉れと云ふのではありませんか。

○鳶魚 成程さうですか。

○若樹 けれども面と向つて借りると云ふことはないでせう。借りに行くのでせう。

○竹清 此處では「お越し」と云ふ所です。

○共古 自分の所に一晩買つて一つ寝するならば借りるのではない。今の斯う云ふのは借りるのでせ
う。

○鼠骨 一體上方では一晩寝るにも借つて來ると云ひませんか。つまり揚屋と買方と違ふ、月の末ま
で揚代を借りて置くのでせう。

○若樹 是は「お越し」だらう、聞いて居ると「おかし」と聞えるので、たゞそれを直寫したのでせ
う。

○落花 「顔をお貸し」ではありませんか。

○共古 やはり「顔をお貸し」と云ふことだらうと思ひますね。

○竹清 「あふぎや」に「つちや」とありますか。

○鳶魚 さうあります。

○竹清 「つちや」とか、東の扇屋、中の扇屋とか云ふのがあるやうですな。折琴とか、籬松とか、東路などがあつたかどうか知りません。

○二葉 借りるのは一分とありますね。

○竹清 後で勘定を取りに来た時にありはしませんか。

○二葉 此時代はどうであつたか知りませんが、渡邊霞亭さんが書いて居られたものに、借賃は一分です。引付のやうな事をする時に、引船の大反りと云ふものがある。それが面白くて通人は借りをやつたものだと言ふことです。引船の大反りと云ふのは、盃事が済んで太夫が歸つて行く、太夫の後は引船が附いて居りますが、太夫が客に後を見させて今や座敷を出ようとする時に、座敷の境の所に来るとグット一反り反つて見せるのですが、その反り方が疊に頭の附く位に反るのを大反りと言つて、それが非常に巧みなもので、初めて見るものは角兵衛獅子の再来かと驚きます。これが此の土地で一つの名物になつて居て、新町の大反りと云ふのださうです。

○若樹 霞亭さんの書かれたといふ其時代は何時頃を書かれたのですか。文化時代にもさういふ大反りといふことがありましたらうか。よしあつたとしてもそれは特別な事ではありませんか。特別の祝儀が出た場合ではありませんか。普通にやつて居ては目が廻つてしまふでせう。

○二葉 皆やるのださうです。一人や二人ではない、その席へ借りられたものは、一々この盃當を遣つて引下るらしいです。

○共古 「ふらいあふらいひなます」とある、これは江戸では言ひますが、油をたらすと云ふ意味ですか。

○竹清 油をかけると云ふ意味でせう。

○共古 おだてるやうな意味でせうか。

○鳶魚 さうでせうね。

○共古 油をかけるなんと云ふのは回轉する意味、回らせる意味かね。

○竹清 「火を燃やさう」でせう。「おだてる」

○鼠骨 「たきつける」でせう。

○竹清 損料著物はこんな印をつけるのですかね。

○鳶魚 さうだと見えますね。

○竹清 尤も損料ならばつけて置かなければならんでせう。生田可久さんの如つて居る損料屋などは唐草で分らないやうに印がしてあるさうです。是は蒲團ですがね。

○共古 さうして質屋に話して置くさうですね。質屋では其印のあるものは取らないと云ふ話を聞いて居ります。

○鼠骨 取りに行く位ならばそれを持つて行きさうなものです。

○鳶魚 印が氣のつかない所にあるのでせう。女共の方は通だから直ぐに知れるけれども……。

○鼠骨 「こうてきにあだもの」

○共古 「仇ッほい」でせう。

○仙秀 北八と彌次の應對が面白いですね。分らないやうに汚點を洗つて貰はなければならぬ、「ゑて吉」なんと云つて居る。

○鳶魚 「ゑて吉」は猿の事を云ふのですな。

○仙秀 例のあれだからと云ふ意味でせう。目附まで教へるつもりで云つて居る所が面白い。言外に意味をふくまして仲居には分らない積りで云つて居るのでせうが、仲居には疾うに分つて居る。だから中々こゝの應對が面白く出来て居る。

○共古 「ツイてんがうにいふたのじやさかい」

○若樹 「てんがう」と云ふのは笑談でせう。其處はまだ讀まないののでせう。

○落花 言はれない事を「ゑて吉」と云ふのではありませんか。「ゑて」と云ふのは符牒で、猿と云ふことを嫌つて「ゑて」と云ふ。それで云はれない場合を「ゑて」と云ふのではありませんか。

○鳶魚 陰莖の事を「ゑて」と云ふ。

○落花 やはりそれは言はれない事でせう。

○仙秀 云はれない所に「えて」と云ふ言葉の應用は廣いでせうが、本當は猿から出て居るのでせう。けれども、芝に猿明といみところがあるが、あれも「えてまち」といつて「さるまち」といふ人は少ない。

○落花 「えてもの」なんと云ふ。

○鳶魚 「えてもの」と云ふのは「避けべきもの」ですな。

彌次郎ふしぎそふに、彌「チャ／＼手めへなんだ、女の著物をきてゐるか、北「エ、とんだことをいふもふ／＼ひとつ脱だら寒くてならねへ、トだん／＼うしろのほうへちどまる、左「おさむかる、ひとつあがりなされ、北「彌次さん、其盃をとつてくん、彌「ナゼ手めへ手を延すことはならねへか、そこにあるとりやな、北「いま／＼しい、おめへまでがおいらをへこませるな、ト此うちなかるかの酒のかゝりしきものをあらひ、火にほして干あがりたるをもちきたり、仲む「サア／＼十

のじがよござりますわいなヲホ、、、、こちやいやいな、あなたのそのなりは何でおますぞいな、ヲホ、、、、トむせうにわらへば北八むつとして、「コリヤうぬらはさつきにからおれがだまつてゐりやア十のじだのなんのとおいらに符帳をつけてなぐさみものにしやアがるがなんでおいらが十の字だ、それをぬかせく、ト何があたりまなこにねぢかゝる、仲のどもこまりはて、「ツイてんがうにいふたのじやさかいおきにあたりなましたらかんになんしておくれなませ、北「イヤおくれなませめへ、なんでもその十のじのわけをきかねへうちは了簡がならねへは、左「ハテゑいわいな、そないにおまい腹立てじやといんまのさきのお侍のよふに無粹じやぞへ、北「ハテぬしのしつたことじやアねへ、ぶすいでもさんすいでも頓著はねへ、サアふんばりめら、十のじたアなんのこつた、ぬかせく、トわめきちらすを彌次郎左平次いろくにとめてもさけきけんにて一かうにがてんせず、せひく十のじのわけをきかねばりやうけんならぬとのことゆへ、左平次もしちめんどうに成、この上はせんかたなしとて、左「コレく仲るしゆ、あないにおつしやるものをしよことがない、十のじのこといはんしたがゑいわいの、仲る「そじやて、それがまあ、北「はやくぬかせ、仲「いふたら又おはらたらなますじやある、彌「は、ア、たつてもわつちが吞込んでゐるから念晴しにいつてしまいなせへ、おいらもどふかきゝてへやうだの、仲る「さよなら

いふてのけるぞいな、アノナ十のじとは是じやわいな、トふたりのぬぎおきたるはをりのうらなひつくりかへして見せる、彌「チャノくなんで此はをりに十もんじがぬひつけてある、左「ハ、、、コリヤモウとつとねからやくだいじや、ハテ旅のおかたぐじやもの、そないに著物用意してお出るおかたばかりもないもんじやさかい、それで損料借てお出たじやわいの、北「ナニおいらが損料のきものきてくるものか、とんだことをいふ、左「イヤもふそないにいわんしてもあかんわいな、長町の損料屋のきりもんにはみな十の字の印ついてあること敵等よふしつてじやさかい、それであないにいふのじやわいな、ト十のじのわけさりとわかりて、ふたりはにはかに大へこみとなり、北八なまなかのこといひつもの今さらはぢのうはぬりし、くしやくおもふ内にもおかしくなり、そうく支度してこそくとこを掛けけるに、そりやおかへりじやとなかるとも大ぜい目ひきそでひきわらひをかくしておくり出るにぞ、三人やがておもてにたらいで、

損料のきものみか太夫までかりてみたりの不首尾たらく

十の字のしるしありとは露しらす借しはをりのうらめしきかな

かく打興じつ、長町さしていそぎける。

○若樹 モウ何もないやうですな。

○二葉 「ふんばりめら」「ふんばりめ」と云ふのは前にありましたね。

○仙秀 長崎の人の言葉にあつたやうですけども、前にはないやうでしたね。江戸ッ子の言葉としては此處が初めてのやうですな。

○鳶魚 此處らは面白いですね。かんにんしておくれなませ、イヤおくれなませめへ」なんと云ふのは面白いね。「ふんばり」は「ふん」と「ばり」ではないでせうか、「糞」、「尿」

○落花 やはり「ふん張る」でせう、足を踏ん張る、それで言ふ事を聞かない、仕方のない奴を「ふんばり」と云ふのでせう。

○鼠骨 私共は下等社会の事を「ふんばる」と云ふのかと思つた。足を踏ん張つて脚力に依つて仕事をして居る者と云ふ意味で……。

○落花 併し女の事を言ふので、男の事は餘り言はないではありませんか。

○鳶魚 だから糞と尿をする外は用はない奴なんだから。

○落花 製糞機ですかね。

○鳶魚 製糞機の意味だと思ふんですがね。

○竹清 男には實際言はんですか。

○共古 是はマア女でせうな。女に限るやうです。「ふんばる」もあなたのお説のやうに足を踏ん張る方の硬いやつでせう。

○落花 どうせ何も知らない下等の奴でせう。

○竹清 此狂歌は、損料の借りて来た著物ばかりでなしに、太夫まで借りて見た、それで借りて見たりの不首尾たらん、甚だ失敗であつたと云ふだけの意です。モウ一つは、十の字の印があつたとは些つとも知らずに、借りた羽織の裏、裏に十の字の印があると云ふのとかけて、うらめしい事である、それだけの狂歌でせう。

○竹清 「敵等よふしつてじやさかい」とある、「敵等」と云ふのは東京で言ひますか。

○落花 言はないでせう。ツイぞ我々は聞いたことはありません。

○竹清 實際借衣には斯う云ふ事があるでせうか。

○仙秀 實際にかういふ印をつけることはありさうですね。

○共古 衣類の損料賃は江戸時代に四谷、新宿の側の湯屋の一階番の女がして居ました。侍が袴を脱いだり、坊さんが衣を脱いで羽織を借りたりして女郎屋へ行つた。さう云ふことがあの時分には

ありました。——「そないにはんしてもあかんわいな」はどうです。

○鳶魚 是は埒があかんと云ふことでせう。

○竹清 「いけない」と云ふ意味の時に「あかん」と云ひますね。

○共古 「てんがう」は何です。

○落花 笑談。

○竹清 「てんがう」は言葉ばかりではない、業でする時も「てんがう」です。

第十八回

八編卷之下

共古 若樹 鳶魚 落花
仙秀

かくてみたりは、新町のおそびにおもひもよらす面目をうしなひしも、道すがらわらひのたねとなりて、うち興じつゝ、曲輪を出たりしは、最早子の刻過けるゆへ、順慶町の夜見せもひけて、往來さびしければ、おの／＼あしをはやめて長町に立かへり、翌日こそは、かの百兩をあたゝまり、今宵の恥辱をすゝがんと、胸工みして、河内屋のおくざしきに臥たりけるが、なにとなく心さへてね入もやらず、漸く一ばん鶏のうたふころ、とろ／＼とまどろみたるか、はやくも夜明て、こゝに泊り合せし旅人追々起出で、はなしこへするに、彌次郎兵衛きた八も、目さめて床を出れば、左平次目をこすりながら出きたり、はやとく／＼とすゝめたつるにぞ、ふたりは食事もそこそこに支度調へ昨夜の損料著物引つはり、立出ていそぎはせゆくまゝに、頓てかの座摩の宮なる、富會所にぞいたりける、北八「急ぎ候ほどにもふこれだ／＼。サア彌次さんはいらねへか、彌次「手めへさきへはいれ、北八へ、どふやらはづかしいやうだハ、ハ、ハ、モシちとおたのん申やす、わつち

らア昨日の一の富にあたりやした、金子をおわたし下さりませ、トいひ入れると、せわやき講中
 と見へたるが一人はをりはかまにてさつそく立出、「コレハようこそ、サア／＼こつちやへおとを
 りなされ、トけんくはんへあけてしばらくまたせやがて又出きたり、「きんすおわたし申ましょ、
 マアこつちやのほうへ御案内いたしましょ、ト打つれて、ぐつとおくの二十疊ばかりのさしきへ
 とをす、三人こゝにすわりて見まはすにりうきうおもてをけぬきあはせにしきつめとこのま、ちが
 ひだなのかよりきらびやかに、ちりひとつなきざしきのけつかういふばかりなし、此内十三四歳
 ばかりのうつくしきわかしのゆがくろつむぎに、もへきちやうのはかまにて茶たばこほんをはこび、
 つぎにすいものすゝりぶたてうしさがつきをもち出るとこち中一人、「たゞ今金子おわたし申まし
 よ、先御酒一献、めしあがりませ、彌次「コレハ／＼御ていねいなハ、ハ、ハ、ハ、ハ、北八「ナニ
 それがおかしいことか、お辭儀なしにはじめなせへ、こち中「まことにはや、このおほくの札數
 のうちにて、一の富におあたりなさるといふは、御運のひらける瑞相、わたくしなども、あなた
 がたに、あやかるやうに、お盃いたゞきましょかいな、彌次「左様ならばゞかりなから、こち中
 「イヤまづあなたへ、北八「コレは御ちそうでござりやすヲト、ト、トしたちはすきなり、きよ
 るはよし、むしやうにさいつおさへつ、のんでいるうち、さかないろ／＼出、せわやきこち中、

かはる／＼あいさつにきたり、ついせうたら／＼をやしたてゝ、さけのあいととなり、大かたに
 生酔となりたる頃、「御時分でござりましょ、龜末の出来合さしあけましょかいな、トさけをひきて
 本ぜんをすへる、北八「コレハいろ／＼御念の入たことだ、彌次「もふお構なさいやすなハ、ハ、ハ、
 イヤモおもしろくてこたへられねへ、ト三人ともおもふさまにくひしまうと、やがてぜんもひけ
 たるに、當社の神しよくと見へたるがさきにたち、こち中「三人つきそひ、南りやうにて百兩さ
 んほうにつみあけたるをふたわけにして、日八分にもち出三人の前へおく、彌次郎北八これを見
 るよりぞく／＼してうてんとなり、にこ／＼ものにてひかへると神主「さておの／＼がた
 にははじめて御意を申す、拙者神職の名代でござります、先はお悦申入ましょ、おめでたいこ
 とでござります、彌次「ハイ／＼、こち中「金子おわたし申ましょ、北八「ハイ／＼、こ
 ち中「ときにお願がござります、當社御覽のとをり大破につきまして再建のため興行いたした富
 にござりますれば、おあたりなされたお方は、どなたへもお願ひ申て百兩の内十兩寄進におつき
 申て、おもらひ申ますさかいあなた方もさやうなされて下さりませ、彌次「ハイ／＼、こち中
 「まだ外にお願がござりますわいな、是もすべてさやうにいたします、金子五兩、せわやきども
 へ御祝儀といたしておもらひ申たうござります、北八「ハイ／＼、こち中「まだひとつござりま

すわいな、今五兩、あと札をおかきなされて下さりませ、彌次「ハイ／＼／＼、こう中「さよなら百兩の内、二十兩引ましておわたし申ますさかい、それでよござりませすかいな、彌次「ハイ／＼／＼どふなりとも、よろしくなされてくださりませ、こう中「さよならその札をこれへお出しなされ、引かへに金子おわたし申ましよ、北八「ハイ是にござりやす、とくだんの札をくはいちより出してわたせば、こう中「手にとり見てびつくりし、「モシ札は是ばかりかいな、北八「ハイそればかりさ、こう中「コリヤちがふたわいな、北八「ナニちがつたとは、アノ一の富は八十八ばんじやござりやせんか、こう中「さよじや、八十八番じやわいな、北八「そんなら何が違ひやした、こう中「コノ十二支がらがふたわいな、當社の札には、みな番付のうへに、コレ見やんせ十二支がついてあるわいな、一の富は子の八十八番こなさんがたのもてこんしたのは亥の八十八番じやわいな、といふはこの所のふだはすべて十二支をかしらにつけてあるゆへおなじはんかすの札十二まいづゝあるゆへなり、北八「これをしらす、うづかりとしてそこへ心つかざれば、このまちかひ出来たるなり、兩人これをきくよりはつとおもひくんにやりとなけくひして、北八「エ、そんなら、三文にもなりやせんか、彌次さんコリヤどふしたものだろ、彌次「ア、／＼とふといつたら、ねつからさつばりちからがおちて、おいらアもふとふも、北八「エ、なんだおめへ泣か、業さらしな、こう中「コリ

ヤこなさんたちは、よふ札をあらためてごんしたがゑいわいの、ゑらいあほうな衆じやわいの、神主「いこやくたいじやとつとゞ出ていなしやれ、こう中「サア／＼いんだ／＼、彌次「ハイ／＼／＼コリヤ思ひがけもない御馳走になりやしたなんなら十二支くらゐはまちがつてもよふござりやすからどうぞ今の金子を、こう中「あほうなことぬかしやアがれ、こゝんならすめが、北八「イヤものの間違といふとはありうちだそんなにやすくいやアがるこたアねへぞ、こう中「たはこといふとどつき倒すぞ、左平「コレイナもふゑいわいのこちがわるい、ハテこないちそうにあふてきのどくじやさかいしよことがない、サア／＼こち來なされ、是はしたり彌次さんどしたもんじやぞい、サアたちなされ／＼、彌次「ア、コレ／＼北八おれがうしろをかゝへてくれ、左平「なんじやいな、おまい腰がぬけたかいの、彌次「はつとおもつたせいかしてどふもこしがのされぬ、アイタ、／＼、北「エ、いくちのねへこつた、サア立ねへな、彌次「コレサそのやうにひつばるな、あいた／＼ト立あがりしが、ひよろ／＼としてあるかれず、せんかたなくて四つばいに、けんくはんまではい出れば、そのいのかんばんきたるほうつきの男ともくち／＼にゑらいあんだらじやな、敵等はおほかたあないなことをいふて酒のみにかなうせおつたもんじやあろぞい、晝盜賊めがやはなことさらすな、北「なんだいめへましいやつらだ、よこつつらはりとばすぞ、ぼうつき「ア、いしこやのと

やいてこませ、トみなく立かゝるを左平次中にいりをしなだめて「サア忍いわいの、ちちごんせ、トむりに北八が手を引はりさきへやり彌次郎がよい、めきたるあるきぶりをかいほうしながら、やうくといけいだいを出たれとふたりとも元氣おちてきぬけのしたるごとくくにやりとなつて、北、ホニに勘半じやアねへが、することなすこりいすかのはしだ、今おもへばゆうべの占者めがきついいことをぬかしやアがつた、

百兩の的ははづれてあたらねどよくあたりたるさきのうらない

○共古 此前の處は新町で女郎屋に遊んだけれども、女郎を買ふ事が出来ない。さうして出て來るところなんです。道すがら笑の種とあつて、打興じつゝ新町の廓を出たのは最早子の刻過ぎた、丁度夜の九つ過でありましたから、今で言へば十二時、草木も眠る丑満にはちつと前だ。随分夜が更けた。だから順慶町の夜見世もひけて往來が寂しくなつた。けれども明日百兩取れる、能く金が有ると温まると言ひます。福々しく懐が温くなつて來ると云ふのであたゝまりと申します。明日さう云ふ事をやると言つて喜んだ。トロくゝと寝た處がどうも明日の嬉しさが心に在るものですから、それが爲に心が冴えて眠る事も出来ない。漸く一番雞の頃にトロくゝとまどろんで、さうして早く支度をして出掛けるやうになつた。さうして座摩の宮、そこに富會所があつて「急ぎ候程に」は誠

の文句で洒落た。是だ、サア彌次さん這入らぬかと言つて這入つた。茲に例の通り金子渡し申すと云ふ其前に御馳走を逃けたものでせう。斯う云ふ御馳走など無盡に當つた人に出すのが例だつたと見えます。そこで先づ御馳走を出すと言つた。此處は何も無い。處が愈々神主が來て札を調べる、札の番は八十八番だけれども、札の肩書が子と亥と違つた。十二支、是は此前にもチヨツとお話がありました、關東の富の札には、同じ番であるのかどうか存じませんが、無い様に思ひます。處が外の國のは鶴龜とか松竹梅とか云ふ風に同じ番だといふと、前後の番が、例へば子の八十八番に當ると、丑と子の前の亥とが其隣番だ。其隣番は割合も幾らか好くなる云ふ風で、干支の出る時に五番でも十二枚附けるとか、十五枚附けるとか云ふことがありますものでせう。江戸には是が無いやうに思ひます。ハツキリ申されませんが、さういふのが一つ二つあります。札を見るとそんなものは附いて無くて、唯番ばかり附いたのを見ました、皆がどうか知りません。さうして彌次もがつかりして腰が抜けて、四ッ匂ひになつて這ひ出るやうになつた。「ゑらいあんたらじや」は能く分りませんが、阿呆といふやうな事ですか。大阪言葉でどう言ふか知りません。「敵等」は貴様達と云ふ程の事でありませう。敵等はあんな事を言つて酒呑みたれ居つたのだらう。「晝盜賊」は晝泥坊だ。「危なことさらすな」、危い事と云ふ字が出て居りますが、斯んな事でせう。北八は横つ面を撲飛す

ぞと言つた。向うも打ん擲つてやらうと言ふ。左平次が間に這入つて止めた。さうして引分けた。此狂歌は百兩の的は中らないけれども、前の占者に見て貰つた其占ひの方は申つたと云ふ事でありませぬ。狐福と云ふものは消えて了ふと言はれたことがあります。これが能く中つて居ると、それへ引掛けて言ひました。——前の方で「りうきうおもてをけぬきはせに」とある。是はつまり疊の両方が凸凹があつたりするといふのは、疊が悪いのだ。是が琉球表の良いのは両方がチャンと行つて居る。疊が好く行つて居る處だ。

○鳶魚 是は斯う考へる。會所などは廣い座敷です。座敷が雜に出來て居るから、良い疊を使はないで悪い琉球疊でせう。毛拔合せといふ事を使つたのは、縁が無いからシツクリ咬ひ合ふ處を見立て「毛拔合せ」と云ふ事を置いたのだらうと思ひます。私などは古い事は分りませんが、私の幼年の頃、東京に小さい店を出しましたが、それは大概琉球疊で縁無しでございました。備後と云ふ物も結構な疊ぢやありませんが、琉球は大抵縁無しです。「毛拔合せ」といふ言葉は縁無しから來た言葉です。それから「あたゝまり」と云ふ事は懐中と云ふ事では無からうかと思ひます。懐へ入れるから温まる。元來さうなんだけれども、金を懐に入れたら金は温まらぬと云ふやうに使ふけれども、一體は金を懐へ入れるから、懐中と云ふ言葉から温いと云ふ事が出て來て居るのぢやないかと思ひ

ます。

○共古 此琉球は立派な座敷と思ひます。之を書いた人は知らないのでせう。

○鳶魚 講中の事務所にさう立派な物はございませんよ。

○共古 けれども周圍が立派だね、引つめ床の間違ひ棚の掛りきらびやかに塵一つなき座敷の結構いふ言なし」といふとさう下等な處では無い。

○鳶魚 それからしるし違ひの事でございますが、是は一通り富の事を調べて見ようと思ひましたけれども、モウ幸田成友さんか詳しく「日本人」に御書きになつてゐまして、此前の「一人一字觀」の中に出て居りますから、繰返さなくても宜いだらうと思ひまして止しました。併し千支の符の處で、是は東京で十二支の符が附いて居りますのは、近頃で金龍山の富は十二支であります。それから茅場町天神のは松竹梅、鶴龜、白銀町白旗神社のは鶴龜、大と、留と四口であります。それから先度先生から御承しになつた紀州の奉禮の正念寺の富は二色になつて居ります。鶴龜と二色です。そんな様になつて居ります。それからしるし違ひといふ事も、字番で見ましても一の富は二百五十兩で、しるし違ひで、百番の一の富に相當する番號の分のは十五兩つゝ出す事になつて居る。それから千支の方で見ましても、何れもしるし違ひといふ事はどうもさう云ふ點も有るので、大概先づ宜いの

で二割位、それから悪いのでも一割位で、却つて奉禮の富の方が割が悪い位になつたから、キツとこの一文も取らなかつたと云ふ事は受取れない話で、是は駄目だらうと思ひます。それから茲に講中の言葉で「あほなことぬかしやアがれ」とあります。是は大坂の講中の人だからどうも「ぬかしやアがれ」は受取り悪い。江戸ッ子に急に化けたやうに思ひますが、どうでせう。

○共古 「金子五兩世話やし前に世話やし講中といふ事があります。」「金子をお渡し下さりませ」「世話やし講中」と見えて居る。それが一つの講中になつて居るのぢやないか。

○鳶魚 イヤさうでない、講中の世話をする人間と云ふ事でございませう。それから「そろいの看板」是は看板と云ふのは法被で、さうして大きな紋が附いて居る。襟が掛つて居る物は今のやうに羽織の紐みたやうな物が附いて居る。それと法被と違ふのでせう。法被には羽織の紐みたやうな物が附いて居りませう。それで法被と看板の違ひは、是は陸尺が著るものです。それから「あんたら」です。此「あんたら」は此前も雲助の話にあつた。「あんただだから、こんただだから」といふ處から發生したと云ふ、それは怪しいものだけれども、酔拂ひの事をボーダラと言ひます。役に立たぬ奴の事を「何だボーダラ」といふ奴が釣まつたのぢやないか。「危な」は危いといふ事です。それから「皆番付の上」にコレ見やんせ……この「番付」は一體一番目二番目でせう。アレから來たのでせう。番組の



三文字屋 攝津名所圖會

書附で、相撲もさうでせう。一體取組番附でありまして、誰と誰と取組む、出す時の取組、一番最初に誰と誰と取組むと云ふ附け出しでありませう。

○共古 番附と云ふ稱は寛政頃相撲番附が始めてせう。

○鳶魚 さう、芝居の方は繪草紙と言ひました。

○落花 今の「あんたら」の「たら」と云ふのは道樂と云ふのぢやないですか。能く「たら」と云ふ事を金山あたりで言ひます。道樂と云ふ義ではあるまいかと思ひます。

○共古 道樂と云ふ方言ですな。

○落花 何たる道樂ではありますまいか。

○鳶魚 大に訓詰附きだな。

- 共古 看板と云ふのは無い、ズーツと著物だけになつて居るのでせう。
- 落花 ハアさうだ、尻を端折るやうになるのですな。
- 鳶魚 著物の丈の長いのは陸尺でなければ著ないものだ、襟の掛つて居るものと紐のあるものと。
- 共古 紐があります。
- 鳶魚 イエ、あれは千切るのです。
- 共古 謝ると云ふのぢや不可ないな。
- 鳶魚 「勘平じゃねへがすること爲すかのはしだ」是は本當に忠臣蔵の臺詞ですな。
- 共古 百兩の金を懐に入れて其方から金に人間が温まるのだと逆に使ふのだな。

彌次「エ、哥どころか、コリヤもふつまらねへものになつた、左平「サイノおきのとくなこつちやわいの、北八「コリヤ全體左平さんおめへがわりへ、わつちらア他國ものでこの土地の勝手はしらす、アノ札の十二支の理屈もいつてきかしてくんさると何もこんなにはんくるわけはせはなかつたものを、いめへましいいつそのくされに是からとこそ遊びにつれてあよびなせへ、左平「ホンニわしもねから氣がつかなんだわいの、まあなんじやあるとひとかへりもどりなされ、其著物のこともあるさかい、ト一のとみのもくさんちがひ、左平次もおのれがうけ合せんりやうのこととき

にかゝり、又彌次郎がうか／＼ときぬけのしたるていに、もしやはしのうへからどんぶりとやりはせまいかとこゝろのうちゆだんせず、さま／＼にいひくろめてまつやう／＼と長まらのかわちやにつれかへりければばんとうはかの富のこともせうちなればさだめし百兩せしめてかへりつらんと出むかひて、「コレハおはやうござります、ソレ女子どもおちやあけんかい、マアおくへ／＼、ときにお客さまがたは何じややらおめでたいことがあると夜前ちらるときましましたが、どふでござりましたな、彌「イヤいつかうやくたい／＼しかし命に別條なく歸りやした、トひよろ／＼ふたりともおくへのく、左平次ばんとうにさ／＼やきて、「イヤモ、ゑらいばんくであつたわいな、ばんとう「おほかた十二支ちがひじやあろぞいハ、ハ、ハ、左平「サイノウそじやさかい、アノひとり年のいたおかたがどふじややら氣のふれたやうに見へるさかい氣をつけさんしたがよいわいの、モシ雪陣へいたなら油断さんすな、首などく／＼りおろもしれんわいの、ばんとう「ソリヤきみのわるい、どうぞはやうほり出してこまじたいものじや、ト引わかれて左平次おくざしきへ來り、「モシ早速ながら損料屋が勝手へ來てござります、もふお脱なされてお戻しなさるがよござりますよ、北「アイけへしてくんなせへ、サア彌次さんおめへも脱な、トふたりながらふせう／＼にぬぎてもとのふるぬのこをきる、左平次これをそでた／＼みとなして、「ハイ損料錢の書付でござります、トさ

しいだすを北八とりあけ「なんだ、八百文こいつたけへ〜ちとまけてもらつてくんなせへ、トやつつかへしついでふうちかつてより女來りて「たゞ今新町の九軒から御勘定いたゞきにさんじたはいな、トかきつけをさしをく、彌次郎とりあけ「なんだ拾五座敷代三匁視ぶた壹匁五分すいもの拾匁三分御さかないろ〜貳匁五分御くわし六匁八分六厘が酒壹匁貳分四厘がらうそく、四拾壹匁四分ヒヤア目が出る〜、北「コウ左平さん、他國ものだとおもつてあんまり人をばかにした夕喰たものが何こんなにかゝるものか、惣體上方ものはあたじけねへ、氣のしれたべらほうどもだ、左「イヤおまいがたがあたじやわいな、何じやあろとくたものはらうて下んせにや、わしがすまんわいな、北「イヤおいらをあたじけねへとはなんのこつた、ばかなつらな、左平「錢出してから何なといわんせあたじけたいな、彌「コウ左平さんおめへいくらりきんでも此新町の書出しはちがつてある、左平「ちがつたとは何がちがふたぞいな、彌「ハテわつちらが借て來たは子の四十壹匁四分此書出しは亥の四十壹匁四分とある、左平「エ、おきくされ、てんごういわすとかね出せやい、北八「イヤこのやろめはふてへやつた、ト立かゝれば左平次も一すぢではいかぬやつ、たがひにまけず、すでにつかみ合にもならんかとおもふ所へこのかはちやのていしゆの四郎兵へかけ出左平次をしかりちらし、北八をなだめていさいのことをきくに、此ていしゆのやうすたのもしけに見

へ、ことにこの家のあるじと見てとり、ふたりもおくそなくいさいをかたり、身のうへのすかんひんなることも打あけてたのみければ、ていしゆの四郎兵へわけよきおとこにてくつとのみこみ「よござります、ハテ萬兩分限でも旅では、かねにつまることもあるもんじやけにござります、此商賣いたせば、たとへどないなおかたでもお客はお客、飯料がないて、そんなら出ていなしやれとは申ませぬさかい、何日なと逗留しておかへりなされ、彌次「それはありがたうございやす、もふそんなに長逗留してもつまりやせんから、あすは出立いたしやせう、てい主「ハテせつかくお出たもんじや、ゆるりと御見物なされ、ホンニ住吉はまだじやある、さいわいけふわしも住吉へのゆくさかいお出んかいな、しかしわしはかまや新田のかたへ用事が有さかい舟でいこが、おまいがたは生玉天王寺かけて歩行でお出なされ、新家の三もんじやといふ茶屋にお待申しよさかい、ノウ左平次どのこなさんも中直りにお供さんせ、もう四ッ過じやある、いつきにお出るがよござります、トいふにふたりもさいわいのことなりとそのそうだんにきはまり、左平次ともたがひにあいさつして心とけ、やがてしたくとゝのへ、ていしゆは舟にてゆくとのことなればこなたはいく玉てんわう寺をまいりてゆかんと又左平次のあんないにてこゝを立出、高津しんちにかゝりゆくほどにはやくもいく玉のやしろにまいりて、

御普請もあらたに見へて金ものゝひかり益なりいく玉のみや

の鳶魚 彌次郎兵衛はすつかり悄氣でしまつて、歌どころぢやない、つまらないことになつてしまつた。かういふと左平次が「サイノ」は「左様です」お氣の毒なことになりました、と云つた。今度は北八が、これや左平さん、お前が悪いのだ。吾々は他國の者で、この土地の様子は知つてゐないの、あの札の干支で當りがあるといふことは知らない——この土地の富の仕方は知らないから、江戸の富のやうに思つたので、かういふことになつてしまつた。これが本當の番狂はせだ。はじめから干支がついてゐることを話して置いてくれたら、かういふ間違は無い筈なんだ。「いつそのくされ」どうせ駄目であることのついでに、これから何處かへ遊びに行かうぢやないか、とさういつた。左平次も、本當に私も氣が付きませんでした。けれども何にせよ、一度宿までお戻んなさい。例の著物のこともあるから、著替へて出かけなれやいけな、と云つて連れ歸らうとする。一の富に當る心構が違つたから、案内の左平次も、自分が世話を焼いて借りさせた著物の損料のことも氣になる。彌次郎兵衛の方は失望して氣拔してゐる様子だから、若し橋の上から身投でもするやうなことがあつちやならん、とその方も氣をつけて、いろ／＼云ひ慰めて長町の宿へ連れて歸つた。番頭は富のことを承知してゐるから、定めて百兩ものにして歸つたらう、といふので、元氣よく出迎

へて、これはお早うございます。さあ女中達、お茶をお上げしろ、まあ／＼奥へおいで下さい。何かおめでたいことがあるといふことを夜前聞きかじりましたが、どうでございました、と云つて安否を聞いた。彌次郎兵衛が「イヤいつかうやくたい」これは本當は「やくたいなし」といふ。「なし」といふ打消がついてないといけないのですが、「なし」を省いて「やくたい」でその意味に使つてゐる。「やくたい」といふことはいろ／＼解釋がありますが、前に出ましたから「やくたい」を「やくたいなし」の意味に使ふ、といふだけに置きませう。けれども命あつての物種で、命には別條なく歸つた、と云つてひよろ／＼と座敷に入る。案内人の左平次は、頭末を番頭にさゝやいて話す。「ゑらばいばい」といふのは、番狂はせのことです。番頭はさういふことを知つてゐるから、大方干支違ひだらう、と云つて笑つた。左平次は、左様です。あの「年のいたおかた」といふのは彌次郎兵衛のことで、何だか失望して氣がふれたやうに見えるから、注意した方がいゝ、雪隠へ行つたら油断しちやいけな。首でもくゝるかも知れない、と云つた。番頭の返事に「ほり出してこましたい」とある。關東だと「ほり出す」といふところで「こましたい」は「しまひたい」の上文言葉です。それから左平次は番頭と別れて奥へ來た。損料屋が勝手へ來てゐるから、早く脱いでお返しになつたらいでせう。これは左平次が心配だから、早く取上げよう、といふのです。北八は、

あゝ返してくれ、彌次さん、お前も脱ぐがいゝ、と云つて澁々もとの古布子に著替へた。左平次はその損料物を袖疊にして、損料賃の書付を出した。北八が取上げて見ると、二人分壹貫八百文とある。こいつは高い、ちと負けて貰つてくれ、と云つて押問答してゐるところへ、勝手から女が出て来て、たゞ今新町の九軒から御勘定をいたゞきに参りました、と云つて書付を出した。弱り目に祟り目で、いろ／＼なものを取りに来る。座敷代、祝蓋、それから昨夜いろ／＼飲み食ひした料理の代を併せて、四拾壹匁四分といふ勘定になつてゐる。目が出る／＼、これは「目が飛び出す」といふので、びつくりしたことを云ふ。北八は左平次に向つて、吾々が他國者だと思つて、あんまり人を馬鹿にしてゐる。昨夜食つたものが何でこんなにかゝるものか。一體上方者は「あたじけない」これは冷酷とても云つたらいゝかも知れない。冷酷で見え透いた、馬鹿なことをするやつだ、と云つた。左平次は、いやお前方の方があたじけないのだ。「あたじけない」をつめて「あたし」と云つた。何であらうと、食つたものは拂つて下さい。さうでない私と私とが済みません。さうすると北八が喧嘩腰になつて、おいらをあたじけねへとはなんのこつた。「ばかなつらな」は「ばかつつらな」とありさうなものだと思ひます。左平次も上方者の調子を出して、錢を出してから何とでもいふがいゝ。「あたけたいな」は「けつたいな」ともいふやつです。今度は彌次郎が、左平さん、お前が何と云

つてもこの勘定は違つてゐる、と云ふ。何が違つてゐるか云ふと、ハテ私達が借りて来たのは子の四十一匁四分だが、この書出しは亥の四十一匁四分だ。これは前の富の番號違ひをこゝへ持つて来たのです。「おきくされ」は「よせ」、「てんごう」は「ふざける」です。ふざけずと金を出せ、と云つた。北八は夢中になつて喧嘩腰になる。左平次も案内なんかする男で、一筋——單純では行かないやつだから、掴み合にでもなりさうな形勢になつた。そこへ河内屋の亭主の四郎兵衛、これは本當の名のやうです。それが出て来て、左平次を叱り、北八をなだめて、委細を聞いた。二人の方でも、この亭主の様子が頼もしく見えたのと、殊にこの家の主人と見て取つたから、打明けていきさつを話した。「すかんひん」は何も無いことで、字は「素寒貧」を當てゝよからうと思ひます。四郎兵衛はさすがにわけのわかつた男だから、ぐつと呑込んで、萬兩ある分限でも旅には困ることがある。私もかういふ商賣をして居れば、どんなお客でもお客はお客なので、はたごが無いから出てくれといふやうなことは申しません。幾日でも逗留してお歸んなさるがいゝ。さう云はれて彌次郎が、そんなに長逗留してもつまりませんから、明日でも出立しませう、と云ふと、折角おいでたものだから、ゆつくり御見物なさい。まだ住吉は御見物なさるまい。幸ひ私も今日住吉へ出かけるからおいでなさらんか。はかまや新田」といふのは知りません。私はそこへ用があるから舟で行くが、

あなた方は生玉天王寺をかけて歩いておいでなさい。これは見物させる爲にさう云つたんでせう。新家の三文字屋といふ茶屋でお待ち申します。左平次ども仲直りにお供して行くがい。四ツ過は十時過です。「いつき」には一時にでせう。さう云はれたから、二人も幸のことだと思つて、左平次とも仲直りして、支度して出かけた。亭主は舟で行く。二人は生玉天王寺を廻るので、それも又左平次の案内を頼む。高津新地にかゝつて行くうちに、早くも生玉の社に來た。この狂歌は別に文句はいらないだらうと思ひます。この時分新しく建てられたものと見えます。——この九軒から勘定を取りに來たところに「新町」と書いて「なか」といふ假名がついて居りますが、やはり大阪でさう云つてゐませうか。これは少し江戸ぶりぢやありませんか。何だか劍呑です。

○共古 劍呑らしく思ひますね。

○若樹 是は算用は宜いですが、めて四十一句になりますか。「番く」は番狂せの略語でせう。目算「違」はたまに今でも聞く詞だ。心の中で算用した、それが外れたと云ふ譯でせう。

○鳶魚 奈良茂の拵へた黒江町の別荘を目算御殿と言つた。幕府の人達を連れて來て御馳走するに都合が好い。それで請負などしようと思つたのです。目算はやはり目當にする。見當を附ける事です。うね。

○共古 此宿屋の亭主は、是は何か廣告的にやつたんでせう。其處に泊つて居たのですな。

○鳶魚 一九は大阪には暫く居つて其時分心安い人であつたかも知れません。やはり御世話になつたから御禮心で提灯を持つたかも知れません。

○共古 さうらしいな。餘計譽めてあります。

○鳶魚 どうも御世話になつたらしいですな。新家の三文字屋は何かございませんか。

○共古 「はかまや新田」などといふところも實際あるのでせうな。

當社は生魂命化現の靈玉を鎮たてまつるといふ、常に參詣の人おほく境内に田樂茶屋たてつき、見せものはみがきうり、女祭文東清七がうき世ものまね、その外さまあるが中にも栗餅の曲春は此ところを元祖とす、むかふはちまきに手きねしやにかまへたるおとこ、「サア」ひやうばんじや、元祖名代あはもちのきよくつきは、生玉やが家の看板、ソレつくぞヤレつくぞ。アリヤ、コリヤ、つくつく、何をつく、栗つく麥つく米をつく、旦那はんがたには供がつく、わかい後家御にやむしがつく、隠居さんはちよちよちよち餅をつく、おやまはお客のゑりにつく、けい子にや、又してもあしがつく、コリヤ居去の金だまへ砂がつく、ヨイ、サツサ、ひやうばん、彌次「おいらは年中うそをつくがきいてあきれらア、

商賣のうまみを見せて錢金をぬれ手でつかむ栗餅の茶屋

かくて境内を打過、馬場さきとをりに出たるに、こゝはすこしの遊所ありて、おやまけい子のなまめき、行かふさま花やかかなり、爰に股引穿きてちよいと片袂端折りたる男茶屋めきたる門々に立ちて言ふを聞けば、「イヤア新吉に船場邊お醫者の娘出ほつとりとした中年増御寢間の處は愚都愚都と煎じやう常の如しとは申せども其處にはちくと匙加減お用ひなされて御覽じませ天王寺屋に是は又去る處の館屋の娘出に、つちやりくつちやり澤山な水飴もどきの上代者が出ますいづれもお頼み申ますと觸れて行く、北「左平さんアリヤア何だね、左平「あれかいな此所の女郎屋に新造が出ると彼様に言ふて呼屋を觸れて歩きをるのじやわいな、彌「コリヤ珍しいハ、ハ、ハ、左平「ときにわしは、ちよと此裏に用事があるさかい、おまいがたは此とをりをまつすぐにさきへお出なされ、ツイこのさきが天王寺じや、いつきにわしおいつくさかい、彌「よし／＼おさきへめへりやせう、トこゝにて左平次に別れ、ふたりははなしつれてたどりのゆくに、つきあたりて少しまがる所いづれへゆきたるがよきやしれざるゆへさきへゆくこへりのおやぢをよひかけ、彌「モシ／＼てん王寺へはどふめへりやすね、こへとり「わしがあとへついてごんせ、北「エ、ついてこいはあやまる、くさい／＼、トあとへさがるふとすると、こへとりふりかへりて、「コレイノわしや天王寺のツイねき

じやさかい、つれまふていこわいの、サア／＼、ごんせ／＼、おまいがたはどこじやいな、彌「わつちらアゑどでござりやす、こへとり「ハアおゑどはゑいとこじやけな、アノおゑどは肩が一荷なんほ程するぞいな、彌「わつちらアそんなことはしりやせん、北「コウ彌次さんもつとあとへさがつてゆかふ、ト彌次郎がそでを引てこへりのおやぢをさきへやらんとわざと小べんをする、此内しばらくしてかのおやぢをさきへやり、彌「いめへましいおやぢめだ、おいらに糞のねだんをきいたとてなんのわかるものだ、氣のきかねへトいひつゝもはやよほどいたりしならんとさつ／＼とゆく、むかふにまた今のこへりのおやぢ待うけてゐるに、北「エ、情ねへあそこにまたまつてるやアがる、こへとり「サア／＼ごんせ／＼おまいがた又爰で道がしれぬかる、サア／＼ごんせ／＼、今見ればおまいがたあそこで小便してじやあつたがおゑどじやあないにみなこきはなしにしてじやそふな、もつたないことの、マアおまいがたは一日にいくたびほどつゝしよんべんしてじやぞいな、彌「ソリヤア三度する日も有、四たび五たびする時もあり定まつたこたアござりやせん、こへとり「ふとう出るか、ほそう出るかいの、彌「エ、おめへもいろ／＼なことをきくもんだ、わつちなどはそんなでもねへが此男のは何のことはねへ、シヤア／＼と瀧のおちるやうに出やす、こへとり「ア、そりやよふきくじやあろにおしいことしてじや、彌「ちと急いでいかふじやアね

へか、北八「ヤ手めへ何をする、トとかめられて彌次郎のそでをひき小ごへに、北八「アレ見ねへ、糞擔の内に銀のかんざしのあたまが見へる、ト彌次郎はかのおやぢとはなしながらゆく、うしろのかたにて北八はあたりによりあふ竹きれをひろひ、はしとなしてかのこへたごのかんざしをはさみとらんとしたるとき、こへとりのおやぢやつとさとかたをかへんとするひやうし、北八のもちたるはしをはねとばされてそこらあたりへとぼしりかゝりければ、彌次郎も北八も「エ、是は、とんだことをした、はなかみを出してふく、此うちおやぢはまへのほうになりたるたこのうちに、かんざしを見つけ「コリヤ何じやいな、トあたまをつまみて、ちよいと引上げて見ればよほどめかたの見ゆるかんざしなれば、こへとり「コリヤゑいのじや、大かた雪陣の中へ、おちてあつたのじやあろぞへ、孫娘に、ゑいみやけじやドレおさきへいこわい、ゆるりと後からごんせ／＼トいさいかまはずさつ／＼と行、北八「エ、こうはらなことをした、彌次「ア、手めへろくなことはしねへ、なんだかからだ中がくさくてやつぱり今の親仁めとつれたつていくやうだ、トこゝといひながらゆくともなしにはやくもてんわう寺の西門にいたりければ、こゝにて左平次あとより來り、左平「ヤレ／＼辛度やの、やう／＼のことでおいついたコレ見なされ、此鳥居の額は小野の道風のかいたのじやといな、彌次「なるほど、はなしにきいてゐやしたが、コレヤア何だかねつからわ

からねへ

唐めきて見ゆる文字にしられけりをのゝとうふのお筆なりとは

抑この四天王寺は上宮太子の御草創にて、由來は太子傳記にくわしく見ゆ、まことに日本最上の靈場にして堂塔の莊嚴いふもさらなり、

何となくこゝろはうちやう天王寺われをわするゝありがたさには

○薦魚 生玉の境内には昔から物賣も見せ物もあつたらしい。此中で一つ東清七が浮世物まねの事が前に申して置いた積りですがございませんか。中で申しますのは女祭文、祭文は大抵は男が多いので、女は殆ど無いやうでありますが、此時分女祭文があつたといふ事が珍しからうと思ひます。モット古いのはあるかも知れませんが、何しろ珍しい。それから栗餅の曲春は此處の名物だ。是は斯んな文句に言ひ乍ら餅を舂くのでございませう。其中で「若る後家御にや虫が附」こいつはマア古い所で「色縮緬百人後家」と云ふ浮世草紙があります。「虫が附く」といふのは、後家の怪しくなることと云へば宜い。隠居さんは提灯で餅を舂くも宜いでせう。此「おやまはお客のゑりにつく」と云ふ事は分りません。御教を願ひます。藝子に足が附くと云ふのは、一體足と云ふのは芝居から出た言葉で、悪足と言つた。さうして此奴はたちの良く無い情夫が出來て、さうして藝子などの

身分に影響することが多い。それで足が附くと斯う言つたのでございませう。若しさうでも無いとすれば金魚の方に喩へ難うございます。金魚には前は足が無かつたが後から足が附いた。さうすると足が無かつたのが足が附くから歩くと云ふ事になる。藝者などは駈落をする意味になりませう。それからそれを聞いて彌次郎兵衛が「おいらは年中うそをつく」と言つたのでせう。それは何でも無いが、さう言つた處で「聞いてあきれらァ」は自分で自分を罵つて居ります。江戸人は斯う云ふ事を言つても自ら罵る。「様ア見ろ」と云ふ事は、今では人の事に言ふやうに思つて居ますが、實は自ら言ふので、人に罵られない先に自分が先づ罵る。丁度此處が自分で自分を罵る言葉であります。そこが大に江戸調子らしく私等は思つて居ります。それから狂歌、商賣の味みを見せて錢金を、是は濡手で粟をつかむ。粟餅を手に取つてさうして出来てチヨイ／＼向へ投げるのですが、若し其手を濡らして置かぬと喰付くから、それで濡手でやる。濡手で金を儲けると云ふ所から、濡手で粟と云ふ言葉を活かして、金の方へ持込んで、さうして狂歌を作つたのだらうと思ひます。それから此生玉の近所の娼家で新しく女を出します時に、觸れて歩くのが如何にも目立つて、如何にも巫山戯たものである。東京には斯う云ふことが無いものだから、それで大に氣に入つたらうと思ひます。そこで肥取と一緒に歩く處になつて、肥取の言葉に「我や天王寺のツイねきじや」側の事を「ねき」



天王寺道風の額

た。唐めいて見ゆる字を書く筈だ。それはどうだといふと道風は「みちかぜ」だけれども、音の方で道の字を「から」の唐の字に見て、それで以て狂歌が出来て居るやうに思ひます。それから次の狂歌は「何と無く心は有頂天」といふ言葉から天王寺へ持込んだので、夢中のやうになつて居るから、我を忘れるけれども難有いと云ふのが、頗る此處では利いて居る。有頂天になつて居るやうだけれども難有いと云ふことはどうも能く分らないやうであります。是はどうでございませうか。此人の狂歌は大抵即席御料理のことだから言葉の掛りで大抵用が足りて居るやうでございませうから、

と言ひます。それは大阪の方言、それから「連まふていこ」是も關東ちや言はない。此間は別に無い。天王寺の大門口に小野道風の書いた額、是は「釋迦如來轉法輪處、當極樂土東門中心」と書いてある。何の意志で書いたか知りませんが、それは小野道風が書いたといふ。そこを捉へて今度は狂歌が出来

多分是もさうだらうと思ひます。

○共古 能く讀めないが是は何です。

○鳶魚 釋迦如來轉法輪處、當極樂土東門中心、岩崎君が得意です。

○共古 鑄物の額ですな。

○鳶魚 さうです。

○共古 集古十種に是が出て居ります。

○鳶魚 他には無いでせう。林君の御説では「唐めきて」の狂歌は「おから」と豆腐とを引掛けたんだらうといふんですが、成程これは大に恐入つた。やつぱり一九の方が偉かつた。

○共古 この娼家で新しい女を觸れて歩くところは、遊女なり娼妓なり藝妓の名を書いて、さうして鬨斗をブラ下げるだけなのです。

○落花 「襟につく」と云ふのは何か古くから使つて居る言葉で、やはり著物の襟に垢がつくといふやうな處から來たのぢや無いですか。

○鳶魚 チョツと思付きませぬけれども、浮世草紙の中に鯛を貰つて、そのおうつりに襟をかけてやつたと云ふ事が書いてあります。尤も上方で襟かけ、と云つて、半玉を一本にするやうな時に誰さ



寺 王 天 四

んに襟をかけて貰つたといふやうなことを云ふ所から、何とかさう云ふ言葉が出來て居るのぢやないかと思ひます。それをつかまへようと思つて探してもしつかり分らない。

○落花 「永正狂歌合」に「さしたる垢はなけれども布子のえりにつき侍らん」といふことがあり、「曾我會稽山」にも「京の小四郎と云ふ種替りの大悪人慾に耽り襟につき」ともある。それであるといふ私共はそれ程のことでも無いと思つて覺えて居りませぬけれども、諺に襟は外へつけるものだから、のけものにすることを襟にすると云ふ事があります。もとは油といふやうな事に使つてあるのは、やはり襟に垢が附くからさう言ふのではないかと思ひます。

○鳶魚 さう云ふ古い事がありますかね。

○落花 チョツと積と云ふ中の何處か、社會事彙の中に見えました、襟を附けると熱いと云ふ時に何か書いてありました。足が附くと云ふ方が君が仰しやつた悪い者の喰付く方がどうも面白いらしく思はれます。

○共古 襟に付くと云ふ事は一遍あつたと思ひます。

御境内の廣大なる記し盡すべからず、おほかたに順拜し、こゝにもいろ／＼あれどりやくす、それより安部街道にいでゆく道すがら、畑うつ男のうたふをきけば、「坊さまよヲ、大ほんよヲ、ちよつちよとめさるまいかいの、コノ大ほんよヲ、彌次」とつさん精が出やすのもふ何時だへ、男「アイきんのふの今時分じやあるぞいな、彌次「おきアがれ、お定りのしやれをいふは、ときに北八たばこの火でもひとつたつせへな、北八「むかふに乞食が呑でるからすいつけなせへ、しかも女の乞食だ、彌次「ナニきたねへ、北八「とんだことをいふ、こつちのきせるで吸付るものを、ドレ／＼おいらがかりてやろ、コレ火をひとつかさつし、二十二ばかりの女のひにん「ハイいんま消ましたさかい、ちよとつてあけましょかいな、北八「イヤうつくらるなら、こつちにもある、女「そしたらおまいさん、ひとつつておかしなされ、北八「いゝことをいふ、しかしきさまのこつたものを、うつてかしやせう、ノウ彌次さん、見なせへ乞食にしておくれは、おいしい器量だ、

彌次「ホンニ仇しろものだ、コレ手めへ、男「あるか、女「ハイ亭主は去年わかれましてわいな、彌次「そんなら又あたらしく片付ばいゝに、女「さよじやわいな、此間も、せわやいてじやおかたがあつてな、さきのおとこもよい男じや、年中はだかでこせいれ、てん／＼てんまのおてこが、ねからゑらい上手じやて、一生貫てくはせかねんおとこじやさかい、あこへいかんかてゝいふてじやあつたが、肝心のうちがないて、よふさんじませんわいな、彌次「おれがいゝ所へせわをしてやろ、此男はどうだ、女「ヲホ、あのおかたのところへなら、わしやどふぞいきたいわいな、北八「おれもうちがねへがいゝか、しかし今普請さいちうだ、出来あがつたなら呼やせう、女「ソリヤどこにふしんしてじやへ、北八「イヤ所は何といふ所かしらねへが、爰へくるみちに橋普請していた所があつたが、あれが出来たら、そのはしの下で祝言しよふ、女「そしたらわしもあたらしい筵など貰ふて、きりもんのしたくせうわいな、北八「ドレ結納に一文やろふか、ハ、ハ、ハ、おれが乞食だと、手めへを女房するものを残念／＼、女「ハアおまいさんは、アノわたしが、なかまの衆じやないかへ、北八「しれたことよ、おいらアしらきてうめんのお町人さまだ、女「わしやまたそないにあかじみた、しゆんだなりしてじやさかい、仲間の衆かとおもふたわいな、北「エ、いめへましいことをいふ、左次「ハ、ハ、ハ、お見たてゑらいもんじや、サア／＼お出んかいなく、

それよりすみよし街道に出たるに、貴賤老若打まじりて此御神に歩行をはこぶ、道すがらのにきはひ引もきらす、こゝに大盡ふうの男まつしやあまたつれたるがさはぎたちでだんごやのかどに立どまり、おの／＼かのだんごひとくしづゝもとめてよこぐはへにしやれて出かける、この大じんの名はか太郎といふ、か太郎「コレばさまや、わしや團子より外にかふていたいもんがあるが賣んせんか、ば、ハイ／＼何なとかふておくれなされ、川太郎「そしたら此かどにたてゝある障子一まい賣て下んせ、是やろわいの、トまへさけのどうらんより金壹歩出してやるとばゝはきもをつぶし、あきれたかほしてゐるうち川太郎みづからそのしやうじをはづしにかゝれば末社もおどろき、「コレハ旦那、こないな破れしやうじ百疋とはゑらたかの數珠じやわいな、しかしこれには何ぞきよとい御しゆかうがござりましよいな、川太郎「わしやひなたあるくとのほせてわるいさかい、コレ久助コノ障子もてこんかい、コリヤそちにも壹分やるは、そのかはり、住吉までコウたてにしてもてあるけ、ヲ、そふじや／＼、トしやうじ一まいをたてにもたせてそのかけをゆくといふしやれなり、この河太郎といふは、浪花名だいのくわつぶつにて、かゝるしやれをなし、たのしみとし、その名のこりたり、彌次郎きた八これを見てきよつとし、彌次「イヤこいつはなか／＼おもしろい、北上がたもばかにやアされねへ、とんだしやれものがある、きめう／＼、

トだん／＼此人々のあとにつきてゆけば、およそ六七丁もゆきたるとおもふころ、かのさきへゆく大じん河太郎「イヤしやうじもすこしうつとしうなつたわいな、久介「ちとあけましよかいな、お庭はいこひろい、泉水は御前崎、淡路しまがつき山とはゑらいもんでござりますわいな、川太郎「久介もふ其障子ほつてしまへ、久介もふよござりますかいな、河太郎「おけ／＼、といふに、かのしやうじ道のかたはらへほうり出してゆく、あとより北八「ナント彌次さん、此しやうじをひろひはどふだ、彌次「イヤ／＼京で梯子にこりてゐる、北八「ハテふたりでかはり／＼持て、おいらは障子のかけをゆかふじやアねへか、おもしろいしやれだぜ、彌次「なるほど、けふはこうてきにあつたかで、ひなたはのほせる、北八もつてきさつし、北八「かはり／＼もつのだがいゝか、彌次「しやうち／＼、コリヤきめうだ、ト北八にしやうじをもたせて、彌次郎そのかけをゆくにやがて天下ちや屋むらなるわちうさんぜさいの見せさきにいたりけるに、

麗な天下茶屋から四方に名の羽をのす鳶のわちう散みせ

○落花 境内の広い處を見てから、それはマア略すとして、それから今度安部街道へ出て行くと、其處に百姓野良男か何か居つて唄を歌つて居る。そこで彌次郎が御世辭を言つて、煙草を吞まうと思つたら、ナカ／＼向の百姓男が馬鹿にして、思ふ様に煙草を吞まれなかつた。其時に女の乞食

が烟草を呑んで居るのを見て、烟草の火を借る處から乞食との話が出たのです。此前で「させる」多分前にもあつた事と思ひますが「させる」と云ふ言葉は一體度々考へて居るですが分らないので。此「させる」は普通の字引では西班牙語と書いてありますけれども、どうも折節私が見た書物には西班牙語の何と云ふ言葉だと云ふ事は書いて無い。チョツと私が見ました西班牙語でカチンボといふのが「させる」と云ふ字に當る字であります。それが「させる」となるのには、ちと縁が遠いやうでありますが、事に依ると私が思ひますのに、雁首だとか烟草だとか云ふ言葉が、是は一體どれが本當の名だか分らぬ言葉だと思ひます。烟草と云ふ言葉が今日我々が呑む烟草で無く、アレが烟草を呑む道具だとか云ふ説が西洋にあるさうであります。私は雁首と云ふ言葉が、雁の形をして居るから雁首だと云ふのも、全體不都合と思ひます。もとはア、云ふ雁首みたやうに附けたので烟草を呑んだものでは無いやうに思ひます。元とは竹か何かの處へ横へさして呑んだらうと思ひます。さうすると雁首と云ふのも恐らくは日本の言葉で無くて、今日西班牙か何かに残つて居る、ガチオとか云ふ言葉の端塊でありますまいかと思ふ。それに私が考へます事に日本の烟草だとか烟草とか云ふ言葉はチョツと西洋でも分らない。本當には何處の言葉だか、其語原が分らないだらうと思ひます。従來烟草と云ふものは呑む物であるか、煙管はどう云ふ物であるかと云ふ事に就ては

分つて居らぬやうに思ひます。それだけでございます。

○鳶魚 僕は煙管と云ふ事に付て井上さんから聞いた。露西亞では煙管と言ふさうですな。雁首の話は聞きません。

○共古 雁と云ふ言葉は英語などで言つて、ガンと云ふ筒のやうなものになつては居ませんか。鐵砲アレはガンですな。ア、云ふ一種の筒のやうなものを云ふ言葉が基礎になつて居るかも知れませ

ん。
○落花 カンコといふ字があります。それは西班牙語で曲つて居ること、ガチオといふのは下に曲つて居ることですから、ガンコ、ガチオと云ふやうになつて來て居るかと思ひます。

○共古 首だけ日本でガンは違つたものなのではありませんか。それから今の御話の雁と云ふ鳥の説もあります。それは必ずしも一つ雁ばかりで無くても宜い。長い首は雁のみに限らないけれども、他の鳥でも宜い、どうも雁と云ふだけの言葉は日本には無いのだらう。私の考へではガンは今英語のガンと同じ系圖を引いて居る筒のやうな物があるだらうと思ひます。是は古く西班牙などにはありませんまいか。

○落花 西班牙葡萄牙の字引は持つて居ませんが、パイプと云ふ字からはさう云ふ事は出ないやうで

す。

○共古 タバコは亞米利加インディアン語だと言ひます。

○落花 處がコロンバスなどの行つた時に其處で煙草を呑んで居たのを見たと言ひてありますね。さうすると或は其方から行くと言ひ煙草は喫煙草になります。

○共古 タバッコと言ふ言葉は、亞米利加印度の言葉だといふ事がありますね。それは亞米利加史に出て居ります。

○落花 墨西哥だと云ふのもありましたせう。

○共古 分りません。分らんがどつちかの外國語でせう。それから「しのんだ」

○落花 「しのんだ」と云ふのは、私の考へましたには是に洞むと云ふ字が約つて「しのんだ」となつたのだらうと思ひます。前の「垢じみた」は垢じんだ、又はじみたと言ふのは何ですか。多分洞んだことからしのんだといふことになつたのではあるまいかと思ひます。越後あたりで「しのんだ」といふ事を言ふ様に考へて居ります。

○鳶魚 能く話がしのんで来た、話が能くしみて来たのぢやないか。

○落花 此前に垢じみたと言つて又しのんだと言ふのは可笑しい。

○共古 江戸の言葉で「くすんだ」と云ふのと同じ事だせう。アレは燻ぶると云ふ意味でしたね。「しのんだ」といふのもやはりくすんだ、つまり煙で燻ぶつて汚くなつて居ると云ふのぢやないかと思ひます。

○落花 何でも「しのん」と云ふのは分らんが、越後にありますね。三田村君、何か歌がありましたらう。

○鳶魚 「しのんで」と云ふのは何かありました。越後ぢやありません。松の葉の中に「しのんで来たしのんで来た」と言ひます。

○共古 「河太郎」と云ふのは大阪の者で斯う云ふ馬鹿な金使ひがあつたのでせうね。

○鳶魚 それは有りました。何でも此男の事を書いた物が二種あります。それは寛政六年正月に出版された「川童一代噺」それから寛政七年に「通者茶話太郎」と云ふのと二つあります。其人は河内屋太郎兵衛と言つて船場の兩替搦米屋の主人だと書いてあります。此人の死んだ日を林君が御見付けになつたさうであります、私が調べたのぢや河太郎の死んだのは天明八年となつて居るやうですが、どうでございますか。それから寛政の初頃に「當世痴人傳」と云ふものが出来て居ります。河太郎に類似をした人物が大勢あつたやうに書いてあります、それは「川童一代噺」と「茶話太郎」

と兩方の處に依ると河太郎連もあつたやうで、十七人もあつたやうであります。「水は空」を書いた耳鳥齋などは河太郎の取巻であつたと云ふ事です。障子を外さして日除けにした話は、是は「川童一代噺」の巻四に、三人の雲助を雇つて、團扇屋の看板を買つて、二人の雲助に持たして住吉詣をした話を書いてあります。それから探つたのだらうと思ひます。それから氣を附けて見ますと、今度は「茶話太郎」と云ふ本に丁度駕籠の底が抜けて、さうして河太郎が自分は歩いて駕舁に擔がして通つたと云ふ事がございます。それは駕籠の抜けた話が丁度同じでございますから、是は「茶話太郎」の方から探つたのでせう。モウ一つ前に京都で、丸哲と云ふ按摩みたやうな奴が梅ヶ枝の身振をした話がありました。川童一代噺の巻三に河太郎が茶白山に花見に行つた時に、周囲で大變賑かになつて居るのが瘡に障つて、古傘買の源太と云ふ奴に平假名盛衰記の身振狂言をさした噺がありますから、それから来たものと思ひます。さうすると三つばかりは河太郎の團扇が此膝栗毛に這入つて居る譯になります。



亂 明

おつたごませう。

○落花 「こなるな破れ障子百疋とはゑら高の數珠じやわいな」是はどうで

○鳶魚 いらたかの珠數、平つたい粒の奴です。粒の平つたい奴、アレはいらたかと云ひます。ゑらたかと云ふ言葉はどうですか、異人さん臭いね。モウ一つ「年中裸でこそいれてん／＼てんまのおでこ」此奴は「傾城阿波鳴門」の中に「夜通のてつこづりかいよい機嫌ぢや又沙魚釣るやうにしらさ海老でつるかと思へば金でつることいふ魚はどんな魚でござんす」それから「侍婢氣質」には博奕者と書いて「てこし」と書いてあつた。兎に角「てんご」は白痴の事だ、それを押付けて「てこ」と申します。一體「てこ」といふのは手癖のことで、博奕をしながらもごまかすことです。これも「てこ」と言ふのではありませんか。其方は危い、何しろ「てこ」は、博奕の事だと云ふだけは確かでせう。

○鳶魚副書 秀鶴隨筆天明七年六月十四日の處に、傘源太のことがある、それは節抄して、實在の人物であつたのを髓めよう。

大坂傘源太とて、當年六十八歳五十一の年町々廻り申候男あり、其身わざ狂言仕、其あたへに古き傘貫ひ歸申候、町々にても古傘候へば除置申候て、源太が来るを待、狂言望申候也、今日私方へ参り申候、狂言は千本櫻四段目口、一八天窓に紙にていと鬢かつら脇差さし扇子を持、仕申候、淨瑠璃語申候也、仕舞申候て、傘集一つにくゝり脊負歸り



通者茶話太郎挿畫

申候たり、傘古骨買にて候へ共、我が身振にてあたへなく申候に付て、高位の方迄召寄られ、傘源太傘源太とて名高き者にて御坐候、我が恩にして少々成古き骨をば貰ひ候て、今日を過ぎ申候、物貰ひならずして能きたのしみなり。

難波梅傘源太振付て古骨なれど世渡の舞

○共古 「手ごと」と云ふ者があります。使はれて居る者を手子と申します、中間みたやうに使はれる者を「御手ごと」と言ひます。

○鳶魚 「茶話太郎」の中に「てんく天満のはだか神子」といふ裸で身振をする乞食のことが出てゐる。その挿畫をこゝへ入れて置ませう。

○落花 此處の「てんまのおてこ」と言ふのはやはり本来偉い上手をやつた……。

○共古 是は乞食で身振の上手な奴です。それで「一生貫て喰はせかねん男」と云ふ處へ斯う掛けたのですな。それで事が略と分ります。

○落花 「河太郎といふは浪花名代のくはつぶつは活佛でせうか。

○鳶魚 是は潤達の人でございます。……江戸のかういふ連中は大概八笑人式の茶番的のものだ。併し是は何か意味があるやうです。折角の滑稽が働かぬから見て滑稽に見えないので、本人は婉曲にや



會圖所名津橋 齋是散中和

る位な考であるかも知れませんが、餘程は男振が好いやうに思ふ。河太郎宗が早速出来る。○若樹 狂歌は天下茶やの和中散といふ藥は名聲天下に普しといふ意で、麗かな天の字から天下茶屋と言出し、それから「四方に名の」と云ふ言葉が出て、それから「羽をのす」といふので、鷺が出て来て、鷺からして鷺の輪をかくといふ輪が出て来た。それが上の麗かと云ふ方へきく。天氣が好いから鷺が上に廻つて飛ぶと云ふこと
でせう。

此内むかふのかたより下向の大ぜいづれ「てうさやノ、まんざいらくじやく、ハ、ハ、ハ、アリア何じやい、目がさのかはりじやな、アノもていきおるやつのはら見やい、糞尻の印

もちとしやうじもていくやつに、賢いつらはないもんじやわい、ハ、ハ、ハ、北八「コノさる松めらは、何ぬかしやアがる、さきのあいて「何じやい、おどれ病ひづかしくさるな、聲あけさせてこませやい、北八「コリヤゑどつ子だは、かたつばしから、はりとはすぞ、ともちたるせうじをふりまはせば、さきの大ぜいの中に、今宮しんけの権七といふあからかほのでつくりしたるおやぢ、北八をとらへて、「コリヤ此障子はどふしておとれがこへもてうせたぞい、おれがうちのしやうじじやわい、北八「ばかアぬかせ、ナニおのれがところのもんか、おやぢ「イヤこないにおつきにかいてあるのがおどれのまなこにやはいらんかいの、コレ見い、善哉餅三五團子今宮新家さいかちやとしかもわしがかけたのじや、けふこの衆と住吉講の月参にいたるすにばゝひとりおいて出たが、コリヤおとれらぬすみくさつてもてうせたのじやな、北八「ナニどろほうしたとぬふてへやつだ、コリヤア道でひろつたのだ、おやぢ「あほなことぬかせやい、しやうじすてゝゆくもんがあるかい、あんだらつくしやがれ、左平「コレノおつさん、コリヤこうじやわいな、誰やらおまいのところで、此しやうじ買つてもて来てじやが、道へすてたさかいこのおかたがひろふて来てじやあつたわいな、おやぢ「エ、こなんもあほうつくさんせ、こないに書てあるは、コリヤわしがこの看板じや、賣もんじやないわいの、北八「それでも登分出して買たをおいら見てるたは、くそたれめが、おやぢ

「おきくされ、こないな古障子、たれが百にもかふものかい、大かたおどれら團子くらひおるとてはつしくさつたのじやあるぞい、なんじやろと此しやうじおれが内までもてこい、サアあとへ戻りや、左平「コレりやうけんさんせ、ハテおまいのしやうじなら、こゝからもていんでくだんせいの、トしやうじをつきつくれば、つきもどし、かれこれとせりあふところへ、馬かた一人馬をひいてこゝへ來かかり、「何じやい、往來あけて下んせ、トひいてとをるはなのさきしやうじをあつちこちへひつはり合ほうり出せばこの馬にあたり、馬「ヒイン、トおどろきてはねあがるひやうしに、馬かたはねつけられ、一二けんむかふへのた打まはる、「あいた、左平「コリヤどしたぞいな、馬士「イヤどした所かあいた、コレ金玉がなふなつた、そこらにやおちてないか見て下んせ、おやぢ「ナニきんだまがこゝらにや見へんわいな、馬士「それでもどこへか、左平「たもとにやないか見やんせ、馬士「ドレ、ないはづじや廣袖じや、左平「コリヤこなさんもてきやしよまい、うちへおいて來やせんかや、馬かた「あほいはんせ、しかもわしや疝氣もちで大金じやさかい、こないにふくろにいでて首にかけているわいの、おやぢ「そしたらふくろふるふて見やんせ、馬士「ドレ、あるわいの今のひつくりで上のほうへつるしあがつたのじやそふな、もみ出してこまそイヤ出てきおつた、北八「ハ、ハ、ハ、なるほど大金だ、彌次「せがきのふ

くろとおなじことでふせう、一ばいある、ハ、ハ、ハ、馬士「イヤきんだまはゑいが、ひざのさらすりむいた、コリヤおまいがたは何でこのしやうじをわしが馬に打つけさんした、左平「わしやしらんわいの、馬士「しらんで、コリヤ誰がしやぢじや、おやぢ「わしがとこのじや、馬かた「見やんせ、こない疵がついてはすまんわいの、しやうじに今宮新家さいかちやとかいてあるさかい、これがせうこじや、サアこんせ、何じやあるとこゝへいてめきしやきとせりふせにやおかんわいの、トしやうじをひつたくり馬につけ、ほそびきにからみ、いさいかまわすしやん、とひいてゆく、おやぢ「コリヤ、そのしやうじどこへもて行おるぞ、まてやい、トおふてゆく、みな、あとより、「てうさやようさ、萬さいらくじや、トかけてゆく、彌「ハ、ハ、ハ、馬かためがおつをやつた、ハ、ハ、ハ、

美濃紙の破れかぶれと噴嘩せしあとのしまつの障子せんばん

かくてそれより三たりはほどなくすみよし新家にいたりけるに、けふも此御神のはんじやうましますことが兩側の茶屋にあらはれ、いづれも家作美麗にして、赤まへだれの女かどに立ならび、「お休な、おしたくなさらんかいな、蛤のおすいものもござります、鯛もひらめもござります、おはいりな、北八「ア、どれもい、茶屋が見へる、御てへそふな、

びら／＼と客のはねこむ賑ひはりやうるさかなも新家町なれ

三一〇

○共古 さうすると向の方から住吉に詣つて歸つて来た大勢の連が参りました。それが「てうさやてうさや萬歳樂じや／＼」は云ふ唯し言葉を唯、歌ひつゝ歸つて来た。アリヤ何だ、日傘の替りぢやなと言つて日蔭にして行くのだな、あの顔を見や檀尻、此檀尻は大坂あたりで出します山車であります。それが「檀尻の印もち」と云ふのは、私は此祭の事を知りませんが、多分祭に附いて行く町内の印だとか、町分の何とか云ふ者が附いて行く、其印を持って行く奴は、マア若い奴ぢやなくて些と氣の利かぬ奴が來ると云ふやうな者だ。其檀尻の印持といふと、今障子を持つて行く奴が賢い奴ぢや無いと言つて悪口を言つた。それを聞いて北八が怒つた。能く若い奴丁稚などを猿松などと言つて悪口を言ふ。猿松奴何をぬかすと言つた處が、先の奴が「何じやおどれ病ひづかしくさるな」狂人じみて居る奴だと言つた。そこでモツと確かりしろ、是は江戸ッ子だ、片端からはり飛すぞ、と言つて障子を振廻した。其時に大勢の奴の中に今宮新家の権七と云ふ肥つた親爺が、コリヤどうして己の家の障子を持つて來たと言つて北八と障子の問答が始まつた。實は今住吉詣に行つた留守に婆ア一人置いて茶屋店を出して置いた。其時泥坊して來たのだらう。ナニ泥坊したとは太い奴だ。是は拾つたのだ。阿房な事を申すな。障子を捨て、行く奴はありやしないと云つて怒つ

た。そこで左平が間に這入つて、さうぢやない、是は誰やらお前の處から買つたのだと言つて見たけれども、誰が斯んな障子を賣るものか、一分出したと云ふけれども分らぬ話だ。大方團子喰て居る間に盗んで來たらうと問答が始つた。さうして之を振廻すはすみに、其處へ馬方が馬を曳いて來た馬に打突かつたから、馬がはねて、それが爲に馬方が股を打たれて墨丸の經緯になりました。それから墨丸の處で成程大きな墨丸だから施餓鬼の袋と同じだと言つたのは、兎角お寺では施餓鬼袋は成るだけ大きくして檀家へ出すと云ふ悪口でありまして、仕方が無い、お寺の事だから不承々々詰めてやる。それを佛餉袋と言ひます。其事を持つて來た「イヤ金玉は悪いが膝の皿摺むいた誰が斯んな處へ障子を出した、何じやあるとサアごんせ／＼」と言つた。「めきしやき」はテキキバキと云ふ言葉と同じやうな事せう。めきしやきとどちか持を明けて、きつと貴様を負かして了はなければならぬと云ふのでありませう。さうして障子を引たくつて馬にのせて行つた。親爺も後からそれに喰付いて行つた。そこで喧嘩がチョツとそれが爲に切れて了つたので、彌次郎兵衛の狂歌に美濃紙の破れかぶれで喧嘩をしたもので、跡の始末が笑止千萬、可笑しいことになつたといふ處で障子へ引掛けてあります。それから二人は住吉の方へ行つた。其處は家作も綺麗で赤前垂の女、是は祇園に赤前垂がありますが、赤前垂が大坂に在ると云ふことは聞きませんが、大分あつたのだと云ふ

話を聞いて居ります。色々な女の赤前垂にも種類があると云ふ事でありませう。私は實際どう云ふ風の赤前垂があるか知りませんが、跡から三村さんでも附加へるでありませう。これから狂歌は「びち／＼」と客がはねこむ、御客も澤山はねるので、魚の新しいのが新家町なれと言つただけでありませう。

○落花 前の方で「病づかしくさるな聲あけさせてこませ」此聲あけさせてこませはどう云ふ譯でせう。

○共古 「おどれ病ひづかし」是は狂人のやうな奴だと云ふので、病ひづかしくさると言つた。ハツキリしろ。

○若樹 「聲あけさせて」と云ふのは、悲鳴を揚げさせると云ふ事です。

○共古 聲あけさせてこませやいだから、聲を揚げてハツキリ言つて来い。猿松奴が何を吐しやアがると言つたから、片方はそんなケチな事を言ふなと申した。

○落花 是は「聲あけさせて」ではありませんか。

○鳶魚 それは「て」でせう。

○落花 彼是言はないで行けと云ふ事ぢやあるまいかと思ひます。

○共古 貴様ア狐に憑かれた狂人みたやうな奴だ、ハツキリ言つて来い。

○鳶魚 聲あけさせるといふは悲鳴を揚げる、それを正付けてこませよう。向の相手に悲鳴を揚げさせてやらうと云ふ事です。

○共古 ちよ／＼らの事を猿松と言ひます。

○鳶魚 是は猿の狂言に出る猿松に何松と云ふ滑稽な役をする奴があります。滑稽人、巫山戯た奴の名でせう。

○共古 マア店野郎と云ふ事ですな。

○落花 「こませ」と云ふのはやると云ふ事で、悲鳴を揚げさせてやると云ふ事です。併し何だかチヨツと山中さんが仰しやつたやうに、そんな狂人じみた事をしやがつたと斯う言つたのでせう。それから跡はキリ／＼泣かされないやうにして行けと云ふ事です。

○鳶魚 「善哉餅」此善哉餅と云ふのは、汁粉は汁になつて居りますが、善哉餅は餡粉と餅です。それを言ふのでせう。それは宜しうございますが、三五團子は分らない。

○共古 五つ刺してある。五つ刺して三文でした。

○若樹 一つ五文ぢや高いんですか。

○鳶魚 是はあやめぢやないか。東京にあやめ團子と云ふのがあります。三つ刺してあるのと五つ刺してあるのがあつて、一串になつて居るのぢやないか。

○落花 丸團子ぢやいかんな。三五十五夜團子だ。

○鳶魚 それで月見團子の積りかな。共方が宜い。

○共古 それで團子が串刺し五つでせう。それが三本。

○鳶魚 月見團子が宜からう。三五團子と言はぬ方が増してせう。串團子で無い。共方がこじつけ振りが好い。どうも上方の者は誰も知らんから、それから此てうさや／＼萬歳樂、萬歳樂と云ふのは

私は知らないけれども、徳嶋に居りました時に御祭がありました、子供が神輿を擔いで、やはりてうさようさと言ひました。子供だけかと思ふと男が擔いで来て、てうさようさと言ひます。大人が

やつて行くのだ。上方だけに四國風で、東京ではやつしよい／＼と言ひます。

○共古 遠州の見附の夜祭は神輿を擔ぎませんが、唯裸でてうさようさと言ひます。

○鳶魚 男がてうさようさでは急けません。上方の奴は「團子喰ひくさつた」と何にでもくさつたといふ事を喰付ける。夏で無くても何時でもくさつたと言ひます。此「くさつた」と云ふのは、物を貶す言葉でせうね。それから「のた打まはす」はどうでせう。農の田と云ふので「のた打まはす」

でせうか。

○共古 聞える方です。

○鳶魚 さう行くと大分恰好よく行けるな。それから施餓鬼の袋、是は大抵寺から来たのでせうが、是は大抵細長い美濃紙で貼つた奴です。成るだけ大きい物です。

○落花 此處の「ふしやう／＼」と云ふのは一パイ溢れる程這入つて居るのですか、少いのですか。

○鳶魚 少いのでせう。

○落花 さうすると中身は不満足に這入つて居ると罌丸よりやはり風呂敷の方が大きいことになる。



浪花の眺所載



種二袋の餅煎るころこ

○鳶魚 さうでせう。

○共古 私はさうでない、施餓鬼袋は大きくて、貫つた櫃家は何時でも不承々々詰める。罌丸の方とはどうか知らないが、唯大きいと云ふ方の事を言ひ出した。

○若樹 語原はさうかも知れませんが、此處の「ふしやう／＼」と云ふのは、マアどうか斯うかと云ふ意味でせう。

○落花 罌丸が大きくてどうか斯うか張り詰つて居る。斯う云ふ事でせう。

○鳶魚 是は罌丸の方から言つた言葉ですけれども、むづかしい

ですな。

○共古 マアそれだけの事でせう。

此ところの名物は金魚酢蛤ころ／＼煎餅、唐がらし、昆布、竹馬、糸さいくなどあきなふ家、あまたある中に、りやうり茶屋は三文字屋、いたみ屋、分銅屋、戎屋などいへるがわきて客のたへまなく、はんじやうことにいふばかりなし、左平「モシ／＼爰が三もんじや、チトおまちなされ

トけんくはんよりのぞきて見れば、おくに長町の河内屋はやこゝに來りあはせ、「コリヤ左平次どの、早よごんしたの、彌次「わつちらアやう／＼たつた今めへりやした、先參詣いたしてめへりやせう、ト是より打つれて御やしろにいたる、抑此大神はちはやふる神代の御時、日向の國小戸の橋の榎原よりあらはれ給ひて、當社の御鎮坐は神功皇后紀十一年辛卯四月廿三日とかや、四社は底筒男命、中筒男命、表筒命、神功皇后これなり、攝社末此すべて三十餘前巍々としてつらなれり、まづ御本社にぬかづきたてまりて、

海上をまもりたまへる神がきやいとおだやかに見ゆる並松

和らかに歌と出かけて樂天の顔をよごせしすみよしの神

かくて御社内をめぐるに際限なければ、あらましにして、出見の濱の高燈籠もゆびさし見たる迄にて、いそぎ三文字やにもどりたるに、女どもばら／＼と立出、「おはやうござりました、サアあつちへ御出なされ、左平「アノ河四郎さんはどこじやいな、トい／＼つゝ打つれておくへとをると、かほちや「ゑらいおはよいこつちやの、北八「こうてきにはらがへつた、かほちや「マアひとつあがりなされ、トさかづきをさす、北八「彌次さんおさきへ、彌次「手めへのんでさしやれ、北八「もふくちをかけるの、左平「おさかなは何がよから、北「なんぞはらにたまりそふなものをくんなせへ、

彌次「エ、きたねへことをいふおとこだ、北八「へ、人のこたアいひながら、ソレまだ盃もいかねへうちにおめへさかをしてやるじやアねへか、左平「コリヤゑらしいしゆみになつてじやわい、彌次「イヤもふかはちやのおやかたのおかけでなりやこそ、こんなうめへものもくうやうなものゝ、なるほどせいのねへ旅はうるものつらいものだ、トさすがの彌次郎はじめてよわいねをいだしよけかへりていふゆへ、左平おかしさをかくして、「ナントおまいがたは大坂ものにならんせんかい、北八「イヤわつちらも何ぞおほへた職でもあるといふけれど、是でくをふといふことがひとつもねへからどこへいつてもつまらねへものさ、かはちや「ホンにゑいことがあるわいな、どふじやふたりのうちひとりはお賣付るくちがあるのになア、彌次「どのやうなことでござりやすね、かはちや「おとこめかけのくちがあるがどふじやいな、彌次「ソリヤほんにかへ、おもしろへく、トあつかましくもにはかにはなをひこつかせ、うれしがれば、きだ八もすつとまへのほうへ出かけ、「モシわつちがやうなもんでもよくば、おせわなすつて下さりませ、彌次「ハ、ハ、ハ、手めへじやアゆかねへ、しかし御昨今のおやかたのまへでこんなことをいふは、おかしなもんだが、わつちならさきの氣にいるにやアちけへのねへことでござりやすから、どうぞそれがほんとのことならわつちをナもし、へ、ハ、ハ、ハ、かはちや「コリヤせいもんほんまのこつちや、しかもさきのしろも

のは、ゑらいうつくしうて、年は三十四五にもなるが、船場邊でぐめんゑいとこの後家どのじやわいの、わしやそこのばんとうが心安うて、いんまのさき、こゝへ見へて、そのはなししてじやつたが、どふも役者かふて、かねつかふてならんさかい、やつかいない男めかけかへたいといふこつちやさかい、モシいことおもふてじやなら、わし世話してあぎよわいな、マアなんじやあると、その後家どの見なさらんかいな、北八「ナアニ見すともよふござりやす、せうくはめつちでも、はなつかけてもそこにやア頓著はござりやせん、かはちや「じやて、そのばんとうが供して、あつちやの座敷へ来てじやさかい、ドレわしがマアちよといて、よふ聞糺してこうかいな、彌次「ハイ宜くおたのみ申やす、ト一はいきけんむしやうにのりが来たのむゆへかはちやはたつておくのかへたゆくとあとにて、彌次「コウ北八、おれがゆくのだぜ、北八「氣のつよいことをいふ、おめへ男めかけといふつらか、ついぞ鏡を見たことはねへそふだ、彌「ばかをいふな、男がわるくても手がある、手めへにやアまじだは、北「ナニまじなものだ、ノウ左平次さん、おめへが女なら彌じさんにほれるか、わつちにほれるかどふだ、左平「わしやどつちへも氣はないわいのハ、ハ、ハ、しかし人は惚いでもおまいがたはめんくが已惚てじやさかいゑいじやないかい、北「そんなら男ぶりは五分ノにしたがい、年のわけへだけおれがい、彌「イヤおとしやくに

おれだ、左平「こうさんせ、わし鬨を出ささい長いのをとらんしたのが、おめかけさまじや、北「コリヤよかるふ、南無住吉大明神さま、わたくしへながいのをおさづけ下さりませ、左平「サアとりなされ、忍いかいな、ソレそいくのすウ引、彌「コリヤなかいのじや、しめた、トウてうてんになりてよろこぶ内、かはちや四郎兵衛かへり来り、「サアでけたわいな、ばんとうに掛合て来たがなんじややらうまいはなじや、給金は望次第で別にまた牛房と玉子代がなんほやらしきせは後家御から年中やわらかいもの何ほなどこしらへしだい、三臟圓と巨勝子圓は通ひでとのませるといふこつちやわいの、彌「忍ども山東京傳の見せに讀書丸といふくすりござりやすが、コリヤアしやれでなし、ほんとうに氣根をつよくすること奇妙といふくすりだから、ハテ氣根がつよくなればなにもかもつよくなるといふもんだによつて、是もとりよせて用ひやせう、かはちや「さよじやわいな、ときに今その後家どのが、こゝへ見へるはつじやわいの、北「ナニ今こゝへかへ、ソリヤ大變だ、ア、このなりではつまらねへ、モシ左平さん、こゝらに髪結床はござりやせんかね、北「エ、おきなせへ、むくろじは三年みかきてもしろくはならねへ、性のものを性でおめにかけるがい、たとへにも見ぬあきないは出来ぬといふが是ばかりは見たらしきにあつちからお断にあひそふなことだぜハ、左平「ときにむこの座敷から忍いとしまが来おるわ



播津名所圖會所載

字屋といふのは大變繁昌する料理屋で、客も大勢ゐる。その前まで来たから、左平次は二人にち

膝栗毛輪講

やうに忍りかきあはせ、にはかにまじめなかほしてゐると、

○鳶魚 これは住吉の名物を列擧したので、今でもさうです、兩側にすつと店が出てゐます。その中に河内屋の亭主と待合せの約束をした三文

よつとこゝでお待ちなさいと云つて、中へ入つてみると、河内屋の亭主はもう来て居つて、左平次に大變早かつたなと云つた。彌次郎が、只今参りました、まあ参詣して参りませう、と亭主に云つて社の方へ来た。それから神様のことをこゝで云つてゐるんで、格別申すこともありません。あの方の狂歌の「樂天」といふのは白樂天で、論曲の「白樂天」を取入れたのでせう。白樂天が住吉の神と問答して、その學才に驚いて逃げて歸つたといふ、それでかう云つたので、實説ぢやないのです。大凡にそこを見て、「出見の濱の高燈籠」これも今ぢや知れなくなつたが、私が先年行つた時にはまだ浪が打つてゐました。この頃は埋立になつてゐるやうです。それから三文字屋に歸つて、河四郎のゐる奥へ通る。これは早いこつた、と云ふと、北八は非常に腹が減つて来た、といふので盃をさす。北八は例の通りだから、お先へと云つて直ぐ盃を取る。こゝは飲み食ひの話で、別に解することはあるまいと思ひます。彌次郎は腹が減つてゐるから、すん／＼肴を荒してゐる。北八がそれを見て、盃も行かないうちにひどいことをする、と云つてゐる。この左平次の言葉の「ゑらいしゆみになつてぢやわい」といふ「しゆみ」は、それにはまり込んで来る。しみて用をする、などといふのが、この「しゆみ」に當る。えらい言葉で云へば「三昧に入る」といふことにでもなりませんか。そこで彌次が、河内屋の親方のおかげであればこそ、かうやつてうまいものも食へるけれど

も、錢のちつとも無い旅は随分つらいものだ。暢氣な人間がはじめて弱い音を吐いたので、左平次もをかしさを隠して、いつそお前方は關東へ歸らずに、大阪者になつたらどうだ、と云つた。北八も弱つてゐるから、吾々も何か覺えた職があればいゝが、これで食はうといふことがないから、何處へ行つてもつまらない、と云ふ。河内屋は弱つてゐる二人を慰めるつもりで、實はお前方のうち、一人は賣りつける口がある。それは何だといふと、男妾の口だ。それは本當ですか、それは面白い、と俄に喜んで鼻をひこつかせてゐる。北八も前へ出て、私のやうなものでよろしかつたら、どうかお世話を願ひます、と云ふ。さうなると彌次も、手前ぢやいけない。昨今御馴染の浅い親方の前で、こんなことをいふのはをかきなものだが、私が先の氣に入るに違ひない事がある。それが本當のこととならどうか私を世話して下さい、と云つてゐる。「せいもんほんま」といふのは、誓文を書いていゝほど本當だ、といふので、「さきのしるもの」相手は、非常な別品で、三十四五位になる。船場邊は物持の多いところださうです。さういふところの後家さんで、今しがたその番頭にこゝで逢つたがどうも役者買をして金を遣つてならんから、厄介の無い男妾を抱へたいといふことだ。行かうと思ふなら世話をし上げてよ。が、先づその後家さんを見たらどうだ、と云ふと北八は、なに見ずともいゝ。少し位はめつちかちでも鼻つかけてもいゝ、なんて云つてゐる。「じやていゝ」は「さう

であつても」です。番頭が供をして彼方の座敷に来てゐるから、私がちよつと行つて聞いて見てやらう、と河内屋が云ふと、彌次は宜しく御願申します、と一杯機嫌でやたらに嬉しくなつてゐる。河内屋が立つて行つたあとで、二人で冷かしたり冷かされたりしてゐる。たうとう團を引くことになつて、北八は「南無住吉大明神」なんて願かけしてゐる。彌次が長い團を引いて喜んでゐるところへ、河内屋が出来た／＼と云つて歸つて来た。番頭にかけて合つたところが給金は望次第、別に牛蒡と玉子代、仕著は柔物でいくらでも出る。この二つの薬は精分を強くする薬です。そこで彌次が、江戸にも薬はあります、と云つて、讀書丸のことを云つてゐます。今その後家さんが此處へ來るといふと



標商丸書讀

さあ大變だと云つて、二人とも慌てゝ身づくろひをする。この言葉の中に「むくろじ」といふのは木戀子で、追羽子に使ふ、あれです。黒いものだから、いくら磨いたつてどうもなりやしない。さ

うかうしてゐるうちに、左平次が向うの座敷にいゝ年増がある、と云ふと、あれが男妾の欲しい後家さんで、今こゝへ來るんだらうといふものだから、こたへられなくて眞面目な顔をしてゐる。そ

御免 淡路町御堂筋入

家秘 神仙巨勝子圓

法橋澤宗貞

御免 麴谷三休橋西入

調合所 法橋吉野五蓮

人參三臟圓

藥白雪糕

の眞面目になるほど滑稽に見える。京傳の讀書丸、是は誰かの書いたものに銀座の京傳の家ちや神薬を賣るといふ事を書いてあります、矢張り讀書丸は怪しからん物で、今言ふ滋強丸のものでせうかね。

○若樹 氣根を強くし何とか書いてありますよ。

○鳶魚 巨勝子圓といふ奴には腎臓を滋す——滋腎圓と書いてあります。斯う云ふものが神薬でイヤ妙な性質のものです。ヨヒンピンの類だ。

○木村 三臓圓は東京でも本町にありました。博文館の向の大阪屋久八と云ふ古風な暖簾がブラ下つて居る店です。恐らく取次所でせう。本家は大阪鯉谷三休橋の吉野五運といふ店も、今も繁昌してゐます。

○共古 初にある産物の竹馬は何ですか。

○鳶魚 春胸です。

○共古 さう書いて置けば譯は無いものを、それからごろ／＼煎餅と云ふのがありませんか。

○仙秀 あります。袋の畫を入れて置きます。

○鳶魚 酢蛤はわかりませんか。金魚も「金魚養玩草」に文龜二年正月に「はじめて泉州左海の津にわたり」といふことが出てゐる。成程堺から始つたのでせう。

○共古 次の歌ですな。

○落花 「コリヤゑらひしゆみになつて」といふのはシユミでせうか。さうすると先刻の「しゆんだ」と

いふのと同じでせうな。

かの後家といふはすつかりとした上しろもの、はへさがりふつさりとして、いろはゆきのことく白く、ふたかは目にあいきやうはほたり／＼とこほれおつるばかり、しまちりめんぬのむく、三つばかりかさねて、くろびろどのおびまへにむすび、もゝいろのちりめんぬいのある長じゆばんすそからちら／＼、すこしほろゑいきけんにはんと引つれ来ると、かはちやのていしゆの出向ひて、「コレハよふこそ、サ、あつちやへお出なされ、こけ」おゆるしなされや、ヲホ、ハ、ハ、ばんとうどなたも御免下さりませ、あつちやはおなごばかりで、ねからはから御酒のあいてがないかい、さいわいと河四郎さまのお出で、こなたの後室の大悦び、ついでにわたしたしもおあいなといたそとぞんじて、まいりました、かはちや「サア／＼もちつとねきへおよりなされ、早速ながら持合たさかづきまづあなたへ、トごけのところへさせば、につこりとしてとり上「わたしたし、さゝがすぎたさかい、もふそなひには、よふたべませんわいな、トいひつゝ少しうけてのみ、このおさかづき、御返盃いたしましたしよかいな、かはちや「イヤわたしたし先刻から、ゑらふすぎました、マアどつちやへなと、おさしなされ、こけ「さよなら、あなた近比はどかりさまながら、ト彌次郎へさす、彌次郎はしじうむちうとなり、この後家のかほばかりしりめにかけて、じろり／＼と見つめ

るたりしが、さかづきをさゝれて、ぞつとするほどうれしくうろたへ出し、「ハイ／＼／＼いたゞきやせう、左平「コレ／＼ソリヤさかづきじゃない、たばこ入じや、彌次「ホイ是は、とりちがへて粗相千萬、サア北八、ついでくりや、北八「おらアしらねへ、勝手にいつのみなせへ、彌次「エ、しよにんなおとこだ、ト仲るにつがせのみほし、ばんとうへさすと、ばんとうおしもどして、ばんとう「ゑらいお手際じやな、最ひとつかさねなされ、彌次「イヤもふわつちは、いつも酒をのむと、だん／＼色が白くなつて、後にはとんと白はぶたへのやうになりやすが、けふはなぜか、こんなに眞赤になつてこたられやせん、こけ「おあいなといたしましよかいな、彌次「ハイ、ノウ北八あなたへおあいをおたのみ申そうかの、北八「かつてにしなせへ、彌次「ハ、ハ、ハ、さやうなら、はゞかりじやけれど、こけ「なんのまあ、トさかづきとりける、かはちや「コリヤおふたりしてあつちやいこつちやへ、とんと婚禮のさかづきのやうじや、こけ「チ、おかし、チホ、ハ、ハ、彌次「コリヤこてへられぬハ、ハ、ハ、北八「しづかにわらひなせへ、さかなの中へ、おめへのつばきがはいらア、彌次「はいつてもいゝ、だまつてゐろへ、モシとかく此男めはわつちがすることにけちをつけてなりやせん、わつちは是でも、唄もうたひやす、三味もかぢりやすから、女中がたを、ころ／＼とおもしろからせることが、ゑてものでござりやす、そんな時にはとかくきやつめが、やきもち

をやいて、こまりやす、こけ「ホンニおまいさんはどふやらおもしろそふなおかたじやわいな、トおもひの外うけのよさに、彌次郎は心のうちにもふしめたよろこびるうち、後家がめしつかひのおんなきたつて、「モシたゞ今、あら吉が見へまして、さつきにから、あつちやのさしきで、あなたのお出なさるをお見うけ申しましたが、御遠慮いたしておりましたけれど、ちよつとなど、お伺申すので、あつちやのさしきに、待てとござりますわいな、こけ「アノあら吉が来てかいな、コレハ河四郎さん有がたふござります、みなさんこれにへ、ハイさよなら、トにはかにそはとはとしてあいさつもそこ／＼ばんとう引つれて、たつてゆく、彌次郎はあつけにとられたかほして、「コリヤ何のことだ、モシあら吉だア何のこととござりやすね、かはちや「アリヤあらし吉三郎といふて、今でのたてもの、としはわかし、おとこぶりはよし、大坂一ばんの役者じやわいな、彌次「ハアそんなら後家どのがにはかに狼狽て立てゐつたは、その役者にほれてゐると見へるわへ、かはちや「さよじやあるぞいな、左平「コリヤア彌次さん、いかいおちからおとしじやわいな、北八「ハ、ハ、ハ、おもしろへ／＼、コウ彌次さん、こゝへ來がけに見たらこのちつとさきに髪結床があつた、おめへ今いつて髪月代でもして來ねへな、彌次「何とでもいやアがれ、トつらふくらしてことといつてゐる内ばんとうまた出てきたりて、「河四郎さんきゝなされ、これじやさかい、わしや心つ

かひじやわいの、アノあら吉がゑらいひいきじやさかい、さいわいのこつちや、これからあら吉といつしよに船でもふいぬさかい、わが身はひとりあるひていねて、わしばかりまかれましたわいな、もふ御相談のこともあかんはなしじや、おさきへまいりましよ、どなたもこれにござりませ、トあいさつそこくにして出て行とやがておくざしきから庭におりて、かの後家はあら吉をとまひこしもと下女打つれて何やらおもしろそふにわらびさどめきて出かけるていをこなたより見て、左平「アレくあら吉はなるほどゑい男じや、彌次「アノ黒仕たてのやろうか、ナニあれがい、男くそがあきれる、いろのなまじらけた日影の瓢箪見るやうなしやつらだ、仲居「おまいさん、そないにいふてじやけれど、あないなゑい男はやつとはござりませんわいな、そじやさかい、あら吉にほれんおなごはおさかぢうにはないわいな、北八「アレく彌次さん、見なせへ、何か後家がさゝやいてこちのほうへ指をさしてわらつてゐるは、大かたおめへのこつたらう、彌次「いめへましいかはちやのおやかた、おめへがうらみだく、トむしやうにぐちをいつてくやしがる、後家はいさいかはず、さわぎつれて出てゆく、彌次郎「うらめしげに、「モシノ」わつちらもふけへりやせう、かはちや「ゑいことがあるわいな、わたしがふねまたしてあるさかい、みないつしよに乗て敵等が舟のじやましてやろかないな、彌次「コリヤいとおもひつきだ、サアそんなら出かけ

やせう、左平「しかしおまちなされ、どふじややら雨がおちてきたじやないかいな、彌次「雨でも鎗でもとんじやくはねへ、サアおたちなせへ、トひとりきをもみ、さきへ出かけるところに、時ならぬかみなり、彌次郎のあたまのうへにて、「ごろくくくく、みなく「コリヤやくたいじや、彌「くはばらく、とうろたへてかけもどる、此うちあめはしだいに大ふりとなり、いなびかりすさまじく、かみなりはしきりになりつゞけ、あま戸をくるやら、まどをしめるやら、三もんじやの家内のももたちさはけば、みなく「ひとつ所によりかたまり、北「コリヤとんだめにあつた、此かみなりでうらやましいはあら吉だ、今ごろはふねのなかでごろくくひつしやりといふたびに、アノ後家がチ、こはなぞとしかみつきおるだろうの、かはちや「ソリヤそふはかいの、アノ後家はあら吉にゑらはまりじやといふこつちやさかい、このかみなりをさいわいにくらひついたりひついたり、はなれはしよまい、北「さやうく、アノまた後家がひたいつきやはへさがりのあんばいではこたへられめへのふ、彌次さん、彌「おがむからもふいつてくれるな、左「ソレ又ひかつた、かみなり「ごろくく、北「チ、こはやの、トごけのものまねして、彌次郎にだきつくと、つきとばして、「アイタ、、、エ、何をしやアがる、あいたく、北「コレどこがいてへ、彌「このふろしきにつゝんだ天狗の面がいたくてこたへられねへ、北「ハ、コリヤそのはづく、左「と

きに雨はやんだそふじや、この間ちやとふねへ出かけましょかい、彌「サア〜、はやくめへりやせう、トひとりせきこみさきへたちて、けんくはんのかたへ出かけると大そうなるいなびかり、「ひかり〜、かみなり「ころ〜、ひしや〜、トあたまのうへ〜おちかよることき大かみなりに、彌次わつといふて、そこへたばりかほをしかめて、「あいた〜、左平「何としたぞいな、彌次「エ、何とした所かへしおれた〜、北八「なにをへしおつた、彌次「今のひしや〜、はつとへたばつた、はづみに、かの天狗のめんのはなばしらがほつきりといつたやうだあいた〜、トきんたまをか〜へていたがるゆへ、みな〜おかしさどつと打わらひてけうにいりけるうち、ほどなくあめもかみなりもやみ、そらもあをくもとなりたるに、かはちや「うれしや、天氣になつたそふな、ナント最いづばいッ、わつさりとのみなをしていのわいの、ト又あらたにさかなをとりよせて大わらひとなり、おの〜よきほどに、酒くみかはし、それより打つて長まらへとかへりける、斯て彌次郎兵衛、北八は、河四郎の方にまた〜逗留して、残る方なく見物しける内にも、ふたりとも江都氣性の大腹中にてかゝる難澁の身をへちまともおもはず、洒落とをすこしもめけぬやうすに、かはちやの亭主大きに感心し、衣類などあたらしう著かへさせ、路用も十分にもたせ、大坂を出立させけるゆる此度は木曾路にかゝり、草津の温

○木村 さて前から引續きの話だけで、處々に語原や何かと一つ二つあるやうですが、後家さんの形泉に一回り遊び、善光寺へ廻り、妙義榛名へ参詣し日出度歸國したりける、此紀行は追て著すべく、先爰にて筆を擱き畢んぬ。



鏡場樂圖集拾遺所載

装からみても、大さう仇ッほい後家さんのやうで——少し芝居掛りのやうですな。此嵐吉三郎は何代目ですか。

○鳶魚 「しよにんな男だ」と云ふのはどうでございませう。

○井古 洒落本あたりに澤山あります。

○落花 意地の悪いのに使ひます。諸々の人と書くのではありませんか。

○共古 初の人です。おほこといふので、人招れない、初人だ。人中に附合をしないこと、お前が初人だといふのと、人招れないとか、人馴れないとか云ふ所に使ひます。苛められて泣き出すと初人だと云ふ。私は分らないから嫌だといふとお前は初人だと言つた。

○鳶魚 「うぶ」といふ事ですな。

○共古 それから轉じたのです。兎角此男めはわつちがする事にけちを附てなりませぬ。けちは何か御説がありましたやうです。「日本人」に出て居ました。けちの説が……。けれどもさう云ふ所では無いやうに思ひます。

○落花 つまり端の方の隅つこを押して通りませぬ。

○共古 それはさう云ふ事があります。京阪などで「けち」といふ事を申しますが、江戸で言ふ「けち」とは違ひ、怪事、怪しい事、是はけちが附いたといふ時は怪事であります。何か榮えた家がチヨツとした蹟き事からして其家が段々微祿して行く。さうするとあの家はけちが附いたと申しま

す。

○落花 成程急にけちが附くといふ事はそれでございますが、「けち」な事をするといふとどう云ふ譯ですか。

○共古 或事業を企てた、是から遊びに行かうとすると、さうすると一人の人が自分の懐中から考へて嫌だといふ。さういふ風になつちやいかん。其爲に折角の目論見が崩れた。そこで彼奴がけちを附けたといふ所から轉じた金を吝む處へ來るのです。

○鳶魚 雷様の時に桑原々と云ふのは何か關係がありますか。

○共古 色々の事がありますが、桑原家は菅公の系圖を引いて居る家で、其家には雷公が落ちないから桑原々と云つて居る、堂上方に桑原家があります。

○鳶魚 語原は分らないが、咒文みたやうなものだね。落ちないと言つて居つたが處が是は五六年前に落ちたさうです。その落ちたのは何か攝州で大阪と京都の間あたりでしたよ。モツと終ひの方で「ナント最一盃宛つさりと言直して」東京ではアツサリと言ひます。それから一番終ひに「江戸氣性の大腹中」是などは浮世草紙などに「江戸の大氣を現はす」大きい氣を現すとあります。是はやはり江戸の人間を褒めるのに大氣を現はすとか、大腹中だとか言つて、上方の人が褒めると言ふ事

三三六
だ。實は江戸だつて大腹中な譯ちや無い、殊に此終ひの如きはやり放して一向大腹中でも無いです
がね。それまで言つて褒めて呉れた譯であります。

「膝栗毛輪講」は大正六年一月から同七年四月まで、前後十九回（速記不良のため覆講したのが一回
ある）で業を了へた。その中七編の上までを「日本及日本人」に載せ、以下は未發表のまゝに在つた。
今それを全部纏めて上中下三巻としたのである。もと／＼當時の輪講筆記そのまゝのものであるの
で、今日の眼から見れば不満な點、増補せねばならぬ點が尠少でないが、當時の面影を傳へるために、
わざとそのままにして置くことにした。此の事は下巻を上梓するに當つて、特に一言して置く必要が
ある。

十年の月日は経つて見れば早いやうだが、又さのみ短いものではない。當時輪講に加はられた諸君
にして、已に物故された方が三人に及んでゐる。今更乍ら感慨に堪へぬ。

昭和四年師走

鳶

魚

膝栗毛輪講挿繪目錄

あ

あつまからげ……………上四〇九・四一〇
 あと附……………中九
 間の山……………中二七・八
 油繪の菓子器……………上三三
 アマの面……………上四二・四
 網嶋柏戸……………下二五
 あみだが池(大阪)……………下二七
 嵐璃寛……………下三三
 荒井の關所……………上六五
 有松の絞店……………中二一

い

あ・い・う・え

う

いちこ……………上五三・五三九
 一本さした乞食……………上六〇・六
 いろは茶屋のれん……………下二三
 浮瀬の什物……………下二九
 宇治橋……………中二九四・三三
 馬をのむ圖……………中一五四
 梅ヶ枝……………下八九
 え
 江戸神地神……………上六三
 江鮎すし……………下三二

お

お杉お玉 中三九
 おつゝら馬 上四九
 負笈 上六四
 大阪天満宮 下一六六
 大阪夜中時廻之圖 下一六八

か

高津 下一七七
 鏡立の圖 上三七三
 柏原殿屋 上三七七
 柏餅 中三三
 合羽かこ 上五〇七
 叶福助 中三〇
 川越(大井川) 上五〇〇

き

川端のふしこ商標 下一七七
 釜元の白粉商標 下一三三
 紙屑買の籠 下一九四
 からくり的 中三六
 かるさん 中二九
 北野天満宮 下一二一
 北山鹿苑寺(金閣) 下一〇八
 木津川安治川口 下一三四
 紀の字屋 上四三・四三四
 鏡臺の圖 上三七七
 櫛たとうの圖 上三九九
 櫛箱の圖 上三七一

く

管をならす圖 中四三
 熊膽傳三郎 上一三四
 久米平内 上四六九
 くらばんか舟 中六四
 くらはんか舟使用の皿 中三五六
 貫筒 中一四〇

け

けん角力 上五八八
 原本さし紙 下一三六
 原本の袋(五篇追加) 中三七七

こ

乞食の圖 上三六〇
 小じよくの圖 中一九八
 かい 中三三

さ

巨勝子圖 下一三三
 五大方の替 上二七・三七・三九
 米櫃の圖 上五七
 ころ／＼煎餅の袋 下一三六
 ころ／＼煎餅屋 下一三五
 金比羅樟 中三四九

采籠 中六八
 櫻の宮 下一三五
 サシメラマツカコウ 中三九九
 小夜中山 上五二四
 小夜中山館店 上五二七
 三十三間堂 中四〇九
 三藏圖 下一三五
 三度笠 上一九〇

し・す・せ・そ

三方荒神 中三三

し

質札 上五三

七里渡の地形 中二七・二八

四條橋 下二九

四天王寺 下二九

尿管 中二七

鳩の内色籠 下二三

巡禮 上二六

性悪の成敗 上四九

しらみひも看板 上二六

す

じんくばしより 上四〇

新町(大阪)太夫道中 下二四

四

スタール自署 上二二

砂場いづみ屋 下二八

住吉三文字屋 下二七

關所の手形 上二〇・二一

雪駄なほし 下二九

千石屋(解舟町) 下二八

扇容曲 上二六

千里膏の圖 上二七

そ

宗十郎 上二七

染飯の圖 上四七

染飯の袋 上四八

た

太々神樂 中二六・二六

大佛餅 下二四・二五

道中記の一葉 上二七

高瀬舟 下二〇

竹馬 上五〇

竹させる 上二五

狸の翠丸 中四一・四二

ち

晝三の妓 上六七

地まはり 上四三

茶筌うり 下二七

「茶話太郎」の挿繪 下三〇

チロリ 上三〇・三〇

た・ち・つ・て・と

て

出見の濱の高燈籠 下三三

天満青物市場立賣木鐵 下二七・二八

天王寺の額 下二九

と

銅亂 上三二

兜整 上六〇

讀書丸の商標 下三四

とつつけ 上三一

銅鉞子 上三六

富の箱 下二〇

とろ汁 上四六

十圍子の圖 上四八

五

な・に・の・は・ひ

な

長崎風……………中三七
なくりの浮世英産……………上六〇三
納豆うり……………上二四
納豆の柄杓……………上三〇
難波御堂の穴門……………下三三

に

二軒茶屋(祇園)……………下五三
二方荒神……………中三八

の

野袴……………中二六

は

配當座頭……………上五八五

六

法藏寺御影……………中六
箱根の關……………上三三
梯子を持つ彌次……………下六
八間……………上四八
八軒家……………下四八
八寸(膳)の圖……………上四三〇
八百八後家……………上五〇一
早飛脚……………上二九五
はやみち……………上二七〇

ひ

火打袋……………中六
火打ち……………中一〇一
人穴……………上二四〇
平野社……………下二八

ふ

深草の團屋店……………下九
藤の森の牛……………中七三
藤屋の印判……………中二九七・二九八
ぶつさき羽織……………上三〇二・三〇三
古市……………中二八八
古手屋……………下二九
豊後節の「ことかいなあ」と反つた所……………上四八七

ま

巻ばしよりの圖……………上二七
枕……………上二六〇
丸山のかるやき……………下二

み

ふ・ま・み・む・や

御影堂の扇折……………下四

みきばこ……………中一〇三・一〇五

む

結びふくさ……………中一六
紫帽子の野郎……………下三二

や

焼蛤の圖……………中一六三
彌次喜多樓の徳利……………中三二
やつし(醬)……………下二五
宿屋の引札……………上六三七・六四〇
谷中天王寺富の圖……………上二〇六
山中五色綱店……………中七三
山岡頭巾……………上六〇九

七

よ・れ・ろ・わ・ゐ

よ

吉田火口店……………中四〇
四ツ足門……………中三〇〇
四日市大入道……………中四〇〇
四ツ手かご……………上六三三
夜泣石……………上五二六

れ

蓮臺わたし(大井川)……………上四九六・四九九

ろ

六部……………上三六三

わ

和中散是齋……………下三〇六

ゐ

猪熊の顔……………上四七一
井戸の辻(大阪)……………下三三〇

東海中膝栗毛輪講索引

あ

あい……………上二七三・三〇〇
アイヌと六の數……………中二二一
赤いわし……………中三三
赤坂……………中五五
赤坂ベイ……………中八七
あかすかベイ……………上三三九
縣神子……………上五三四・五三三
あかんわいな……………下二六四
商人のよき衣きたる……………下五
あくど……………中五〇
あけ荷……………上六五六
朝がほなり……………上三三三

あ

麻吉……………中三〇〇

浅柄の苧……………中一七一・二〇八

浅草の門跡……………上二五五

あさまがたけ……………上四三三

足がつく……………下二八九

足久保の茶……………上一八

足もとの明るいうち……………上〇三・六〇四

あじやうしたへ……………上一八一

あじやらしい……………上三九七

足をつける……………下三七

「飛鳥川」……………上一〇六

あだ……………中一七二

あた(じげない)……………下二八三

あたじけなすび……………下二〇九

あたじけれえ……………上三六・下六三
 あたげたいな……………中二九
 あたたまる……………下二七〇・二七二・二七六
 頭へきけて……………下六九
 あたまをわる……………上二五八
 あだもの……………下二八〇
 新しい……………上二〇九
 盛り……………上四一
 あつかましい……………上三六
 吾妻錦繪……………上九四
 穴藏で味噌をする……………下六九
 あなどり……………上五九二
 あはざ鳥……………中二八九
 栗餅の曲春……………下二八九
 あび手……………上二四六
 相手ほしきの玉手箱……………下二七

間の山節……………中二八
 鏡が淵……………上四六四
 あぶらいふ……………下二五七
 油壺……………上二〇二
 油屋(古市)……………中三一
 油繪……………上三三・四二六
 蛇もとらず蠅もとらず……………上九九
 安部川傳馬町……………上四〇二
 あべ川彌勒……………上四〇三
 あべ川もち……………上四三二
 あま……………上四三六
 網うけの乞食……………中三〇
 網嶋……………下二三四
 あみだが池……………下二二七
 網の目に金とまる……………中三一
 雨風闘亂……………中一六・一九七

雨の宮風の宮月よみ日よみの御命

貼のなます……………中九四
 嵐吉……………下三〇・三四・三三三
 あらまい……………中八五
 あらまし……………中七三
 あらひ粉の看板……………上二〇八
 新井の關所……………上六五四・六五五
 有松絞……………中二二
 青丹よし……………中三四六・三四七
 青物と小便の引かへ……………中四四四
 あんぐり……………上五六一
 あんだら……………中三九四・四五一
 あんだら臭い……………下二七一・二七四・二七五
 あんだら臭い……………下一九六
 あんどん(雲介符腰)……………上二四五
 あんばいよし……………中三四七・三四〇・三四一
 あんま代……………下二三八
 あんま代……………下二五七

あんまとり

いよきせん……………上一九五・二〇四
 いがぐり頭……………上二五八
 いき……………上二八八
 生馬の目……………上四九三
 生口をよせる……………上五三二
 いきな……………上三三
 いきもへうたんも……………上三四六・三四四
 いけしぶとい……………中五八
 いけしやあ〜……………中五七
 いこ……………下二四九
 いさくさ……………上五八・下六一
 伊崎庄之助……………上三三
 いさみ肌……………中七三

石龜のじだんだ 上二八五
 いしかる 中三五五
 いしこや 下二〇三・二八七
 石たか道 上二〇七
 いじや御座い 中二二・一五
 石井殿 中三七七
 伊勢音頭 中二七三・二七六・二八二
 伊勢の山田 中二八一・二八三
 「いせへ七度熊野へ三度」 上二二三
 いせ参り 上二五五
 伊勢者の商ひ巧者 中一〇一
 痛い腹は都の生れ 下二〇三
 潮来 上四七・八一
 いちこ 上五三・五三七・五四六・五六七
 いちこの珠数 上五三・五三九・五七〇・五七一
 いちこの所屬 上五三六

いちこの鼓 上五三七・五六八・五七八
 いちこの箱 上五三〇・五三六・五四七・五五〇・五六四
 いちこの弓 上五三七・五六九・五四五
 一膳めし 上二四〇
 一番越 上四五四
 一番船 中一三六
 一番桶 中四二二
 いちぶしじう 中三三六
 一分と拾匁 上四一八
 一目さん 上一九五
 一升 下一八一
 一九 上九・二
 一九の妻 上五五四
 一刻を千金づゝの(狂歌) 中三八四
 いつそのくされ 下二八〇
 いつち 上三三七

一片舎南録 中二四四・二四六
 一本 上二〇九
 絲だて 中四八
 絲をひく 中四七一
 いにしな 下二六三
 犬神 上五三四
 いはしろの結 中三七七
 今切 上六五七
 いもかば 中一〇三・一〇七
 いりがら 中三七七
 衣類の損料貸(江戸) 下二六三
 いろは茶屋 下三二・三三三
 いんでんの巾著 上三〇六

う

浮む瀬 下二二九・二三三

浮世物まね 下五一
 うげにくからう 上二〇一
 請とりや 中三六・四一
 右近の馬場 下一六六
 牛鬼 上五四五
 うしやがれ 中七五
 うすのろい 中四三七
 うすべり 上三六・三八
 うたとよみ 中四二六
 内方 下一六三
 打がへ 上九三・二八一
 うつむげに 下六一・六二
 うつら焼 中一〇〇・一〇四・一〇六
 うどんやの粉ひき 下六六
 産衣の鍔 下一〇〇
 馬さし 中四

馬でもものんだか……………中一五〇・一五五
 うまられえ……………上六〇五
 梅の木の立場……………上三九九
 裏店と長屋……………上二五一
 うろん……………中一八二
 うみらう(菓子)……………上一八七
 うみらう(薬)……………上一八六・一八九・三三三
 うみらう賣……………上一八八
 うんきんだらりかんちくりん……………中八五
 雲水……………上四四五

え

『驛路馬子唄』……………上七〇
 えぞい目……………上七〇・八二・八九
 江戸ッ子……………上二五・八六・八八
 江戸橋(伊勢)……………中二六〇

江戸前……………上二〇
 櫛につく……………下九九・二九二
 エレエレこせつばい……………上三八・七五・七六
 エレハイエレ……………上三六

お

おあし一すぢ……………下一五
 おいづる……………上五八・五九・三六四
 おいへ……………中八四
 お家……………中四二六
 お家さま……………下三三
 おうち……………下三三・七六
 おかし……………下二五四
 おかた……………中二四
 おかつさま……………上一六・六九
 おかべ(豆腐)……………上四二

おかまを起す……………上四八・八五
 おかめ……………中一四五・一五三
 お龜女……………下二四四
 おきまり……………上一九九
 おきやアがれ……………中一四
 おけさ松坂……………中三五五
 おけんつう……………上三〇・六八・八五
 お小休……………中九四
 おこわ……………上二〇四
 おこわにかゝる……………上四九一
 おざうき……………中二〇六
 おさか(大阪)……………中三九四
 おさへの拍子木……………中三三
 おさまらない……………上六〇三
 おさんどん……………上一六一
 御師……………中二八四・二九三・三四二

おしてるや……………下二七・二九
 御師の侍……………中二八五
 お十念……………中一八九
 おしやらく……………上二四四
 おじやれ……………上二〇二
 お杉お玉……………中二八二・三七
 おすゑ奉公……………上二六
 おせわ……………上二五三
 おだぶつ……………上四六三
 おたなれ……………中二〇一
 おちがくる……………下四四
 お地頭さま……………上四七四
 青樓の蠟燭代……………中四七六
 落をとる……………下九六
 お月様の年……………上二七・三三・三三
 おつとめ……………中四七七

おつにはぐらかす……………上二五三・二五四
 おつる……………中三二
 お土砂……………中四二
 おとぼれ……………上五九七
 おとまり……………上一四七
 おとろし／＼……………下二四五
 鬼太のどてら……………中四七一
 お年貢米……………中五〇
 おぼちをまほす……………上一五八
 お初尾……………中二〇六
 お半涙の露ちり程も……………上一九五
 おひやり……………下二二六
 おひみ……………下二四
 お袋……………上五五
 おぶさる……………上六六
 おぶしやれ……………上一八二

お文様……………下二二
 お文様ときけば(狂歌)……………下二二
 おへれへ……………上一〇一
 大木のほし……………上四八〇
 大西の芝居……………下三二
 大平……………上一七二
 大屋さん……………上三九・一〇七
 大屋の手形……………上一〇三
 おます……………中一〇七
 おまな板ななしに(狂歌)……………中三七
 お守を首にかけつゝ(狂歌)……………下二七
 おむし田樂……………下五五
 おやどの籠……………中一六三
 お雇の仲間……………中二九・三三
 親分……………上五五
 おやま……………上六三・六三〇

か

おろよい……………下二五
 お繪符……………中三九・四四
 音頭……………中三九
 おんばこ様……………中二〇・二四・二五・二四七

海上のわたし……………上六五
 開帳……………上六九
 かいな……………中四九・四六
 がいに……………上二六六
 香堂前の粽……………下三九
 高野六十……………上三八三
 高麗屋……………中五〇
 講親……………中二六七
 鏡の社……………上五四
 がき……………上四一九

か

かぐはな……………上三八
 額風呂……………下二四八・二四九
 かくやへの香の物……………中二七
 かけじ……………上三三
 かげまの玉代……………上一九
 駕の陸尺……………上五七
 傘さして出る穴(狂歌)……………中四〇八
 笠寺観音……………中一九
 柏もち……………中三二・三三・六七
 頭百姓……………上七〇
 かすり……………上五九七・六〇
 風まつり……………上一二七
 かたい……………上一二
 片じまひ……………上六一
 かたのひけたる……………中三四
 帷子の宿……………上一二八

梶原の馬がくつた笹葉……………上四二四
 ちんなんば……………中四七・四五九
 かつがれた……………上三三
 合羽……………上四三六
 合羽籠の竹馬……………上五〇七
 河童の尻……………下三三
 合羽干場の地請……………上二九〇
 門出八幡……………下二二
 かどはかし……………上四四
 叶福助……………中二九・六五・六六
 かな棒ひき……………上四七三
 かれて手管と(唄)……………中九五
 川越人足……………上五〇九
 川越の貨銀……………上四〇・下八五
 川崎音頭……………中三九・三七七
 河太郎……………下三〇一

川止……………上四二
 川端のふしこ……………下六
 河原院の舊跡……………下二二
 加判……………下一〇五
 かぶと石……………上三三九
 かぶりかく……………中三〇
 かぶりもの……………上二五・三三
 釜が淵……………上二九六・二九七
 かまぼこ……………上二五五・二五六・三二一
 釜元の白粉……………下六・四
 神(取巻)……………上六五
 神下しの文句……………上五三・五三八
 神風の伊勢……………中二三
 紙屑買の呼聲……………下一九四
 雷の聲……………上三七四
 神のまんどころ……………上五五

紙屋川……………下二四
 紙屋の符牒……………下三三
 髪結床……………上四七
 髪結の飛脚……………上三九
 加茂川の名酒……………下二三
 がらい……………上四四・四七四
 傘源太……………三〇三
 がらくた物……………上二〇一
 からくり的……………中三七
 釜酒落……………上三七
 から尻のうまい(狂歌)……………中三三
 から汁……………上三四
 から茶釜……………下二六
 からッけつ……………上四
 からつぼの札……………下二〇一
 からのかゞみ……………上四四

釜風呂……………下二四八・二四九
 がら……………上三三
 假宅……………上三三
 かるさん……………中二七
 軽尻……………中八
 寒鳥の黒焼……………上四六七
 神田八丁堀……………上二九
 蒲原盗賊の出典……………上四四五
 看板……………下二七四・二七六
 神戸……………二二五
 きいたふう……………上六三
 聞いて呆れらア……………中四八
 舊観帳……………下二九〇
 久三……………下四九・五〇
 ………………下二四六

牛車樓……………中三一
 きざ……………上四三
 紀州様のお七里……………上三〇・三四〇
 きじやき……………上四六
 義者ぼる……………上六九
 きじろいろ……………上四一六
 寄進淨瑠璃……………下一七五
 きせる……………下二九八
 きたない……………上三五〇
 北野の御神木……………下四
 北山時雨……………上一九一
 木賃……………上三五一
 きつもんか……………上二〇〇・二〇一
 きつね福……………下二六
 きつねけん……………中四一
 木戸錢を棒に(狂歌)……………下四六

木戸番のはで模様……………下三三
 きどり……………上一四七
 後朝の情を知らば(狂歌)……………中二五〇
 氣のきかぬ……………中七四
 きの字屋……………上四〇・四二一
 氣はさんざ……………上一九一・二二五
 きびしよ……………中三六六
 急須……………中三六五
 きほひ……………上四一一
 奇妙頂來……………中四七三
 きめの判官……………下二四
 きもをひやす……………上六四六
 京近在の女商人……………下七〇
 狂言の詞……………上三三〇
 京雪駄……………下一七五
 氣疎い……………下八三

經堂前(北野)……………下二七
 京と生魚……………下四一
 京の著倒れ……………下二
 京の肴屋……………中四二五
 京上りの座頭……………上五八〇
 京の水……………下八四
 京の料理屋……………下五九
 京の女の立小便……………中四四・四七五
 客人の神……………上四〇四
 魚田……………下一一〇
 きよとい……………中三六・四七一
 清水敦盛さんの墓所……………中四三四
 清水の舞臺からとぶ……………上三〇九
 清水焼……………中四三・四七七
 きらず……………上二四
 祇園香煎……………下五二

祇園社……………下五〇
 銀ごしらへ……………上六二・六四
 錦袋圓……………上五二・五三・五六五
 金玉嘉雪……………中二五〇
 ぎんながし……………上二七四
 金の鱈……………上四七三

く

空也寺……………下二七
 空也寺の僧……………下二六
 くげん……………中八六
 九軒の揚屋……………下二三
 くさつた……………下三四
 噓の後の糞を喰へ……………中一九〇
 串團子の數……………上三九六
 くし箱……………上三六九

くすねる……………中四五〇
 葛引田樂……………下五五
 薬を飲む湯……………中八一
 糞をくらへ……………中六六
 下り……………上三四三
 くだをまく……………上六〇一
 朽木わらじ……………上六六
 口に風を引かせる……………中一九三
 口よせ……………上五三〇・五三七
 口よせの實況……………上五三〇
 ぐつと……………中一八〇
 國澤……………上二五四・三三三
 國大夫……………中二六八
 くに所……………上二三三
 國ものゝ面よこし……………上六三三・六三五
 くはつぶつ……………下三〇五

桑原々々……………下三三三
 首だま……………上一二〇
 くびる……………中二四
 熊野傳三郎……………上一三三
 工面がゐいから……………上一四八
 雲介……………上二四三・三三六
 雲介符牒……………上一三三
 雲津……………中三三七
 九紋龍……………上一一六
 くらはんか船……………中三六三
 くらへそばへる……………下二三三
 鞍馬の木芽漬……………下三・一〇
 くるま……………下三九
 黒いよふであまいは遠州濱松……………上三三三
 くるゝ戸……………上六四九
 荒神様……………上四六六

荒神様があらア……………下二五九
 課役をふる……………中七
 火事が行く……………下六六
 くわしん……………下二五三
 貫差……………中五
 願にかけて……………上三三

け

外宮には四十末社内宮には八十末社……………上五九九・五四二
 けゝれなく……………上四七五
 解死人……………下二〇四
 けたいな……………下一六六
 下駄をばく……………下二三八
 けち……………下三三四
 結構人……………中三七一・三七三・三七五
 けつかる……………上五九六
 けつかる……………下一六一

けこ

尻でもしやぶれ……………上二四
 けつり友達……………上六・八八
 けれど……………上二八六
 げんこ……………中二二・一六
 げんこ(雲介符牒)……………上二四六
 源四郎……………下一六四
 けんつう……………上四六
 げんなま……………上一〇〇
 源之助……………中五〇
 劍菱……………上三三
 原本説……………上八・二〇・七三・一〇六
 後架……………上二六四
 こうきふし……………中九四・一四五
 口せき……………中六一

五右衛門風呂	上二九四
御きんとう	下二二
後家の質店	上四三・四四 下二五
活券	上二五三
九ツ梯子	上三七五
ござつた	上二二九
御状箱の人足	上三九四
御状箱わたり	上四七・四八
御所女の横柄	中四五二
小じよく	中一六・一九・二〇
虎字をかいて犬を御く	中七七
ござ	中三・二六
巨勝子圓	下三六
五大力	上三七三・七四・三七・三八
五道の冥官	上五五
こちくされ	下二六

御定法の質銀(馬)	中四八
五條新地	中四八
五條の橋牛若の千人斬	下二六
ことづかる	下八三
戀川春町	中二五三
鯉のまな板	中二六
業ざらし	上六五・三九三
こましたい(上方言葉)	下二八一
こませ	下三三
こまのはい	上二八一
小室節	上四四九・四五三・四五七
米の買方	上六三
米のめし	上三二
五目淨るり	下二六
五文もち	上二五
後夜の鐘	中一四

小やらう	中二三
御覽じやれ	上二九
これしこ	下二四
ごろく煎餅	下三六
景色	中六〇
聲あげさせて	下三二
権五郎の古跡	中三九
権五郎ならねど(狂歌)	中三六
紺の看板	下三
金びら樽	中四八
金びら参り	中二〇
金輪際	中四三

ウ

濟生湯	下三
サイノ	下二八

財は身のさし合せ	上三九
宰領	中四
さいろう	中五八
酒井忠輔	上八・七・八四・三
さかり松	上六三〇
先拂ひ	上二六
さくらの宮	下三四・二八
さくら丸	上二〇
酒一升肴一斤	上六八 下八一
酒の値	下五五
さし合	中二〇
さしこの風呂敷	中三三
さすが	中八一
砂糖餅	上三六八 中五一
さつ手屋	上二六九
ざつとした所が	下六

座頭.....上五六一
座頭あんま.....中二〇・二四
さばすし.....中四六一
下三九・四〇
澤村宗十郎.....上三一
左平次.....下二七五
三味線の皮.....上三七二
さみづ.....上二〇八・二〇九
佐屋まはり.....中三二・三六
さらけ出す.....上六四三
さるがしらや.....中三四〇
猿松.....下三〇・三三
さんがらへ.....中四四
三五團子.....下三三三
三五郎.....下三〇・三四
三十石船.....中三七七
三十三間堂.....中四三

し

三尺.....中五六
三膳圓.....下三三
三太郎.....中一五・一四五
三條の編笠屋.....中四五
さんどかさ.....上二八九
三渡飛脚.....上二八九
棧留の布子.....上六一五
さんなむめ.....上五八九
さんなあるかいな.....中八五
三枚におろす.....上四一
しいな.....上三三・四四
姑の畑嫁が田.....上五七・五七八
しかつべらしく.....中一九三
下二〇五
橘の葉.....上五四五

二六

時雨蛤.....中一九九
しげ.....中四四
しげ込む.....上四〇三
中四六・三二
しこたま.....中四一・八二
下二九
しその實.....上一五五
しだし.....下四四
した地ト醬油.....上三九・三七
下ッ腹に毛のれえ.....下二六四
七軒町の硯ぶた.....上四二五
七軒もどり.....下二六
七難かくす.....中二六
七難即滅.....下二〇二
質の流れ.....上五五二
七篇巻頭の斷書.....下二二
しちむつかしい.....上四七四
紙帳.....上三六

し

四重謎.....上三六
七里潔敗.....上六四
しつたかどうだか.....上五九九
四條の生洲.....下二二
四條のかまぼこ.....中三八四
しなだれ.....上二五七・三一
品野坂.....上一四五
しば.....上三三
芝居のやつし.....下二六
しびん.....中三九
執著の涙の雨(狂歌).....中二〇・二三
十二銅.....上三九七・二九八
十二坊.....下二七
十念寺(桑名).....中一九三
十六分三分.....中四六〇
鹽井川.....上五七九

二七

鹽井川の趣向 上五七六・六〇〇

しまさん花色さん 中三九

嶋の内の迎ひ駕 下三三

竊屋の番頭 下九

しみつたれ 上三三・三六・三七

しめこの鬼 中一八三

下坂井村 上二五

四文粉(煙草) 中一七〇

四文錢一文 中二三

上下 中一五五・一六〇

じやうに 上四八五

じやうもん 下六

性悪の髪切 上四六

性悪の成敗 上四六・四四五

じやて、 下三三

しやんす(長崎) 中三六

芍薬亭大人 中二五二

宿入の奴様 中三三

術にかけて 下二二

しゆびん 中一四二

しゆみ 下三三

しゆんだ 下二七・三〇〇

俊滿(尙左堂) 中三三

巡禮 上三三七・三六二・三六六

しよげかへる 中一四四

じよさい 上一九九・二六七

所作と振事 下三三

所帯 下八五

しよつばいやつ 上三九三

しよにんな男 下三四

しよびく 上一七二

しよんがへ 上三三

白板(かまぼこ) 上一四四・一五

白きてうめん 中一八二

白子観音 中三〇

しらみひも 上一六七

白旗明神 上一六

尻くらゐ観音 中五・六・九・七〇

尻に帆かけて 上一七

しりよふれ 下二四

しれた事よ 中一五三

白酒 中一七二

じろり 上三九・中五

信仰がうすい 中三〇六

心氣くさい 中四六

甚句 中四七一

新造 上五八

尋常な 中三六

新宅 上一五一

新田 上三一

新田のうなぎ 上三七

新町(大阪) 中三九

新町の「なか」 下六四

しんりあんかん丹 上五三

す

水牛の櫛 中三九

水道の水 上一三

須賀 中二三

すがき 上四〇六

助郷馬 上一六〇・一六一

すけんぞめき 中二六九・三四二

すこたんく 下三三

鱧庖丁の趣向 下二二

鈴口……………中四六
 雀色時……………上三二
 すぐりふた……………上一五三
 すつぼかし……………中四五
 すつぼん……………上三六・三五七 三七七
 砂場の和泉屋……………下二七
 すれふり……………下五一
 脛をかじる……………下七一
 墨色判断……………下三六
 すみかき庖丁……………上一〇二
 「すみほん」……………下二五
 陶物……………中四〇

せ

青黛……………上九五
 せいもんほんま……………下三三

せいらく……………下三三
 ぜい六……………中四七・四七二
 焼酎賣……………上二六〇
 せうぞくかけし合羽……………上六一四
 小便に犬……………中二九九
 小便の失敗……………中一四一
 せうろく四文……………中一五三
 せがきの袋……………下二二・二五
 關所切手お改め……………上一二二
 關所の手形……………上一〇四・三六
 石塚様……………上四六九
 關の山……………中一〇一
 せしめうるし……………中二二六
 せしめる……………下二五四
 せずことがない……………上一四〇
 世帯……………下八四

そ

搦社と末社……………下五〇
 雪隠……………上一六四・三三
 せと……………上四七九・四八〇
 瀬戸物の染付……………上四七九・五六四
 錢膏藥……………下九九
 錢買なされ……………中三五〇
 淺間様の天の面……………上四二三
 善哉餅……………下三三
 千手観音……………上一五八
 千秋庵……………中二四九
 仙助の能……………下一九〇
 洗濯女……………上一四六
 せんば煮……………上四八五・五七五
 川柳點の前句集……………上九八・二五・二七
 千里膏……………上九二・九六

そ

そうは虎の皮……………下一五九・一六〇
 曾我の墓……………上一三〇
 そくばつたのつうからす……………下二四四
 そしやうりやう……………上五四三
 そじやて……………下六一
 訴訟……………上六五
 そより……………上四〇
 反商日屋呂……………中二五〇
 外は白壁中はどんく……………上一八二
 そとばの干物……………上六七
 その手はくはぬ……………上六三
 そべる……………上二六
 染飯……………上四七
 そらさぬ顔……………下九七

空へあがる……………中三五
 そんない……………上四三
 そんだんで……………上二五
 損料屋の印……………下二五七

た

醍醐の獨活芽……………下三〇
 大根……………下四
 大庄の鰻……………下二七
 大正の蒲焼……………下三三
 大切な……………下二七〇
 大道は髪の如し……………上九・九五
 太々講……………中二六六
 太々神樂……………中二六七
 たいなし……………下四六
 大日山……………中四一・四四二

太夫主……………下二四八
 大佛殿……………中四〇六・四〇九
 大佛殿方廣寺……………中四〇六
 太夫の借代……………下二五六
 太夫を借る……………下二四七
 「太平國恩俚談」……………上二〇四・二〇六
 大名の道中駕……………中三一
 道具……………上二〇
 道者……………上二四三
 道成寺の山づくし……………下二八三
 道成寺のけいし……………中三九
 道修町……………下二六二
 唐人……………中三三
 道中じら……………中二九三
 道頓堀……………下二四三
 道理で狐の子ぢやものを……………上六九

當話

當話……………上二〇九
 高瀬舟……………下二〇
 竹馬(住吉)……………下三六
 竹の皮……………下二八
 竹の皮鼻緒……………下二九
 竹のきせる……………上二四九
 竹のすの子の天井……………上二八〇
 竹梯子の石……………下二六
 竹光……………上六・五
 鎗薬師……………中二八八
 他生の縁……………中二五
 たいき納豆……………上二四・八三
 たみいわし……………上六
 たうち……………上六
 立小便と蹲躡小便……………中四七五
 たちつけ……………中三七

た

たてば……………上三〇〇
 店おろし……………中三九九
 たなツ尻……………上二九
 駄荷……………上五〇六
 狸の罌丸……………中四〇七・四一六・四七五・四七四
 たのみ(結納)……………上三九
 たばこ……………下三〇〇
 旅雀……………上二七
 たへもん……………上二七
 たば……………上二四七
 玉子のぶはく……………上四九三
 玉澤……………上二五〇・三三三
 田町の反魂丹……………上二六七・五三三
 たまみそ……………上二四四
 だまりん……………上二九七
 たらす……………中四七二

たらふく……………上四〇一
 たりがてい……………下二四五
 たれたも同前……………中七五
 たわいなし……………中二七一
 たんこぶ……………下七七
 檀尻の印持……………下三三三
 だんない……………下二四
 だんないく……………中三三

ち

知音女房……………下二六九
 晝三……………上六二七
 直……………上二五三
 知行……………上元
 地口……………中九三
 ちくら船……………下三八・三三

ちくるい……………上二六一
 地藏……………中七八・一八三
 地腹をきる……………上二〇三
 地まはり……………上四一一
 長五十……………上四九三
 茶かす……………上六〇三
 茶粥……………中四五〇
 ちやくふく……………中二〇六
 ちやくぼく……………中一六
 茶代……………上三〇三
 茶の子……………下三三・二六一
 ちやらくら……………中八六
 中書嶋……………中三五四・四〇一
 忠七の浮世ものまね……………下一九〇
 中ッ腹……………上二
 ちよこいふ……………下一〇三

ちよつくと参らぬ彌次郎兵衛……………中三五五

ちよぼ……………下九四
 ちよま……………上三九
 ちよろまかす……………中八八
 ちよんがれ……………上二六・三三
 ちろり……………上三〇・三六
 塵劫記……………上三七
 ちんじちうやう……………上二八六
 ちんぢばしより……………上四〇八

つ

つかねへ……………上三三六
 つかもねえ……………中五九二
 つき馬……………上六二
 つくにう……………中三八三・四三四
 筑摩の鍋かぶり……………中三三三

つて

つげが悪い……………中四三
 附拍子……………下二七七
 つせら馬……………上四五〇・四三三
 づない……………上三七一・三九九・四四四
 づない人……………上四七六
 つばまる……………上三〇九
 つべこべ……………上六六・六五九
 ツレンく……………上一九五
 つんぼの笠印……………中三四七

て

てあい……………上一六五・三三
 てうさい坊……………中三二
 てうさやう萬成樂……………下三二四
 てうし盃……………上二八
 丁場……………上三九四
 中一五三

鳥目……………上二五八
 手形請取つた……………中六・四七
 手形をあけて……………上三一
 敵等……………中二三
 てこめ……………下二七
 中七五
 手そぶり……………中一七
 出見の濱の高燈籠……………下三三
 上二五一
 てやい……………中七五
 照わたる(狂歌)……………中三九
 天蓋(鶴)……………中一六・二〇
 てんがう……………下二五・二六
 田樂……………中四三
 田樂茶屋……………中四三
 てんこち……………上三九・六八
 天井……………中三九
 てんぢうちやばりひぢぢや……………中三〇

天竺……………上三七
 てんつるてん……………下二四
 てんく〜てんまのおて……………下三三・三〇
 でんない〜(だんない〜)……………中二一
 てんぼの皮……………中二〇
 天王寺の額……………下二九

と

「ト」(言葉と地の文の間の)……………中三七
 同行二人……………上三六・四三
 同志……………上四五
 東寺の燕……………下三九・二一
 投扇興……………上一六
 東南さん……………下二四
 どうめくら……………上六〇・六五
 時の太鼓(大阪)……………下二六

解船町……………下二七・四三
 讀書丸……………下三三
 とぐろまく……………上六六
 どさくさ……………上四四・四九
 としま……………中一七
 豊嶋屋……………上三二
 枳面屋……………上一六・七九・八〇
 戸塚の大罌丸……………上一四八・二九・三〇
 とつげもない……………上六一・五六
 とつびやうし……………上三六
 鳥羽か伏見か淀竹田……………中二五
 とひやうもない……………上三七一
 とぼす……………上二〇七
 通り者……………上五〇・五二
 富……………下二〇〇・二七一・二七三
 富の公許……………下二〇三

富をつく……………下二〇四
 とめ女……………上一三七
 友吉……………下三〇
 虎が石……………上一七
 虎屋の饅頭……………中三九
 鳥貝……………下一八二
 鳥貝のすし……………中四九・四六
 鳥飼殿頭……………中二〇
 泥棒……………上一三一
 とろ汁……………上四三
 十圍子……………上四三
 どんぐが飛ぶなら桶かぶせ……………中三九・四〇
 富田茶賀丸……………中二五
 とんだ目に合の山(狂歌)……………中三八
 どんぶり……………上五九
 問屋……………上一六

問屋場……………上五〇三
 問屋へかゝる……………上五〇二
 な
 内儀……………中五
 内陣……………中四三
 中がさ……………中一八八
 中河原……………中二七一
 長崎のたこ……………中三五六
 中田屋の勝山……………上四六・四三
 長町……………下二六・四三
 長町の分銅河内屋……………中三九一
 長持(雲介符牒)……………上四五・三四
 長持唄……………上五九九
 中回向……………中四三四
 名栗……………上六〇八

なづき……………上二六〇
 難波江のよしあしくとも(狂歌)……………上七二
 難波新地……………下三七
 なは目……………上四〇
 なま……………上四四二
 なみ銭……………上二七〇
 なむ三……………上四九
 なら茶……………上二二
 なら茶籠……………上二二
 ならの坂……………上二六六
 なり込む……………上五五
 なる口……………上二四四
 鳴海のおつる……………中九七
 なをぞかし……………上六四
 南京の薄鉢……………下二二
 なんだかばれらア……………中一五三・一五四

難波うどん……………中四二
 難波御堂の穴門……………下二二・二二
 南部じま……………下二五
 南りやう一べん……………上一九五

に

西坂……………上六三〇
 西陣……………下二
 廿八日お尻の用心……………上七〇・八三
 二軒茶屋(祇園)……………下五三
 二軒茶屋(平野)……………下二八
 にづら……………上四七〇
 二方荒神……………中三三〇
 「二十八で文つけられて」……………上六三三
 下九九
 煮花……………下三三・一六一
 入が馬入……………上一六

二尺五寸……………中二〇
 二尺五寸の脇差……………上六〇九・六五九

ぬ

ぬきもん……………下三六
 ぬくと……………中二三
 ぬけがけ……………中一八一
 ぬけ参り……………上一三五
 ぬこまいか……………中三三
 盗人に追分なれや(狂歌)……………中一九七

ね

ねき……………下二九〇
 ねぎまのふるふき……………上四九九
 ねっこ……………中二四
 ねぶかトれぎ……………上四六一

のほ

根ほり葉ほり……………中四三
れ物語の里……………中二四
年頭……………上四七五

の

のいてかんせ……………中三四
のた打まはす……………下三四
のど佛……………下七〇
呑込山……………中五五
野袴……………中六六
のふらくもの……………上九五
のら猫……………上六六
野呂間どの……………上三〇
のんこ醬……………下二五

は

はたご……………上二四二
畑の婆……………下七一
八はい豆腐……………中三九・三九三
恥をかく……………中三四四
はつ……………下三九
八間……………上四七五・五六二
八軒家……………中三四九
八寸……………上四二〇
はつち……………中三三三
はつつけ……………上三三三
「八百よこせ」……………上五〇二
花屋の柳……………上五三〇
はなをあかす……………下三三七
はひかけし(狂歌)……………中一八〇・一八三
はへ附て置た……………下二六一
はまる……………上五九二・五九七

ひ

四〇

ばあちやア……………上三六
俳諧堂亡業……………上八・七二・八四・三三四
寶藏寺……………中七七
坊主持……………中三六・四三
亡命……………上二〇九
博勞……………中四九
はげぎ……………上六八
刷毛序……………下二五
はこにしたるろり……………中一六三
はこれの關……………上二二四
はこ枕……………上二五九・二六〇
梯子の親と子……………下六六
馬耳東風……………中二〇
はじまられへ……………中四三
はしよる……………下六三
柱の穴……………中四〇八・四三六

はや……………上二九四・二九五
はやみち……………上一七〇
早桶……………上六六
原川……………上六〇八
腹は北山……………上一九〇
腹はぼんぼこな……………上五九六
ぼり……………上二二三
ばんく……………下二六一・二八四
番狂はせ……………上三一
番附……………下二七四
番附繪本……………下三六
半びつ……………上五七

ひ

火うち(袋)……………中五・六・一〇
火方盲碌……………下四四

ひがのこのへりとりむく……………下二四・二六
 引負……………上五九
 ひきはだ……………上五〇六・五〇四
 引舟の大反……………下二六
 引まはし……………中三三
 飛脚の速度……………上二九七
 火消の皮羽織……………上三〇九
 ひげらかす……………上二七五
 秘藏弟子……………中二四六
 膝栗毛……………上七・八八
 柄杓をふつてもおいせ様……………上二九四
 びた錢……………上三三
 ひだるい……………上二四
 ひつぱり……………上四三
 一つの穴の狐……………上二九〇
 一つくだされと犬めが(狂歌)……………下三三

日なし……………上五五三
 日なたぼ……………下三三
 火繩……………下三・三三
 ひれくつた……………中三〇
 火吹竹の應用……………中一四八
 姫街道……………上六五七
 ひやかし……………上四二二
 百石取……………上四五
 百萬遍……………上六四三・六四四
 ひゆつと……………中八四・一〇六・一四九
 ひゆつと出る……………中二〇
 ひようたくれ……………上二四・四三六
 ひよぐり……………中七
 ひよんな……………上五八・八二
 平假名盛衰記……………下九四・九六
 ひらの晝三……………上六六

ひりやうず……………上五二・五七一
 ひるがんどう……………下二七一
 ひろうたと思ひし(狂歌)……………中二・三・六七
 びろく……………中八五・四九
 ひろふ……………上三九
 脾胃虛……………上五五三
 ………………下二六

風眼……………上六八
 富貴自在冥加あれとや……………上五二・九三
 無鹽……………上四九三・五七五
 ………………下三四
 無鹽の奴風……………下三四
 吹矢……………中三七
 ふく一まん……………上五四二・六四八
 福德天王……………中三七
 ふくろび……………上六

武家の内葬……………上五〇四
 ぶさ打……………中三四・二六
 富士の人穴……………上二九
 伏見の扇……………下八
 伏見の晝船……………上二四三
 無しやれ……………上八三・二〇三
 ふせうく……………上四七七
 二筋……………上二五八
 藤の森……………中三七三
 藤屋(山田)……………中二九七
 ふづくつて……………上一九九
 佛餉袋……………上二〇〇
 ぶつさき羽織……………上三〇三
 ぶつそうづら……………下二四六
 ぶつてうし……………上五三三・五四三・五四四・五六八
 たいそば……………上三二五

ふと棹……………上三七七
ふとりのあいびろうど……………上三七二
鮒卵……………下三四・四三
ふめる……………上二〇三・二〇七
ふり込んで来る……………上四四・八九
豊後節の「ことかいなア」……………上四八七
ふん込……………中二六
ふんだん……………上二九五
禪の質入れ……………上二四七
禪を忘れてかへる(狂歌)……………中三四
ふんばり……………下二六二

ほ

へこたらず……………上四八四
へさえる……………上四八八
へたなす……………上二七二
蛇が女を見込む……………中四三三
へぼ……………中一一三
べらさく……………上四九一・四九六
べらぼう……………上六〇・八三・八九
べんくう……………上五四一
へんちき……………上四九六
通路……………中一八三
上三六六

ほうぶら……………中三三三
下三四五
ほうくくのてい……………中二五八
保久の代物……………下二二三
ほしい物有松染(狂歌)……………中一一三
ほしかの仕切……………下二二六
細田……………上六〇九
ぼた餅の看板……………上六四九
ぼつこり……………下二七五・三三九
發端後成説……………上一六六
ホツホよい……………中四三三
ほてくろしい……………中四七一・四七二
ほてぼら……………上二五八・三三八
棒手振……………上四四・八六
骨までくさる……………上五九二
ぼやく……………下二〇四
ぼやけ太り……………下二五〇

ま

堀川……………下二四
堀川の染物さらし……………下六
本馬……………上五〇七
本堅地……………上二〇七
ぼんくら……………中一六八
本貫……………上一〇九
本陣……………上一二六

まごつく……………上三七・四四五
 下二〇
 馬子の乗打……………中二五
 まじくじ……………上〇三・六四四
 下六三
 まつくりになつて……………中七四
 まつくりになつて腹立つ(狂歌)……………下二八
 まどふ……………下二七〇
 まなか……………上四八八
 まはし……………中三三・三四二
 まゝのかは……………中三二
 まゝよ……………中一七
 まめ……………中一四四
 豆蔵……………下二五
 豆茶屋……………下二七・二四一・二四三
 眉毛につば……………中六・三・六四
 迷ひ子の長太……………上六四四

み

圓山の輕燒……………下一〇
 まんがら……………下二四
 まんざらでもれへ……………中二四五
 まんなほし……………中一九七・二〇七
 上七一
 萬年屋……………上一三
 御影堂の扇……………下二
 みかの原……………上六三二
 みきばこ……………中一九七・二〇二
 三くだり半……………上四・八七
 みそ……………中六一
 みそべつたり焼生姜……………上四九四
 味噌をつける……………下六一
 みだれ……………中四七三
 下二七六
 道草をくふ……………上一三

みつから……………中三〇七・三三〇・三三一
 下三六

三津五郎……………中三六〇
 水引……………上六九
 水をむける……………上三〇
 「身延様へはどう参ります」……………上三一
 壬生の茶……………下三
 み佛の(狂歌)……………中七三・七
 明星が茶屋……………中六七
 宮川……………中七〇
 宮川町……………下三二
 宮川や神に(狂歌)……………中七〇
 みやげ……………上三四九
 宮重大根……………中一五三
 宮園……………中六八
 宮の泊の趣向……………中二九
 宮の渡し賃……………中三五・三九

む

宮の渡の商ひ舟……………中四一
 宮の渡の時間……………中二七
 宮めぐり……………中三二
 三渡の藤九郎狐……………中六二
 向ふ棧敷の前側……………下三一
 むき身しぼり……………上九三
 むくろじ……………下三七
 むげちなく……………上八九
 無間の鐘……………上五〇・五二八
 蟲のいゝ……………中二三
 むすびふくさ……………中二七・二八
 夢中作左衛門……………下二四
 胸髭の話……………上六九
 無筆の犬……………中二五九

むもない……………下二五
紫帽子の野良……………下三〇・三一

め

「名物選」……………下二
目が出るく……………下二六
目鏡屋の口上……………下二七
めきしやき……………下三〇
目くされ金……………上五八・八一
目黒……………上四六
飯盛……………上一四
めのこ算用……………上三九・三六
目引の立竈……………中四八
目もとの汐……………中三〇
めんよふ……………上一二

も

目算違ひ……………下二八
餅の名の柏橋とて(狂歌)……………上三八
もつげな顔……………下三〇
もむない……………中三四
もろ白……………上一四
門跡様……………中五〇
紋付の酒こも……………上二四六

や

やアセ……………上一三七
「やがてすばらに鳴鐘ならば」……………下二四三
焼杉の下駄……………上二四・三一・四〇九
焼蛤……………中一六〇
焼餅……………上四四・六一

やく……………上一三〇

やくたい……………上三二・三四
下二八四

やくたいなし……………下二六一

やくと……………中四六・六六

役に出た馬……………上五九

彌次郎兵衛……………上一六・八五・八六

やたら……………上一〇
中三七

彌弟さん……………上四六

宿帳調べ……………上六四

宿賃……………上一四三・一四四

宿引……………上六

宿屋に札うつ……………上一四七

宿屋の有様……………上一六

柳こり……………上一四三・一五一

柳……………上一九・二五・二七

家主に断る……………上一七

や

屋根屋のふんどし……………上三九・三四

矢場……………上四六

やばなこと……………中三九三
下二〇三

藪にも剛のもの……………上一七九

やぶにらめ……………上一二〇

やば……………上一六六

山……………上一七三

山だし……………上四三・四三

薯蕷鰻にならず……………上一二七

山の神……………上一五八・三六

山原七右衛門……………中二九八

病ひづかしくさるな……………下三〇・三二

山岡頭巾……………上六八・六〇九

聞くも……………中六三

やみげんこ……………中一五三

やみらみつちや……………上一八九

野郎のしゝ……………上二四八
 やらやつと……………上四九〇
 やりからかす……………中八五・一四九
 やりたご……………中三八〇
 やりて……………上四三三
 和らかに歌と(狂歌)……………下三三三

ゆ

由縁齋貞柳……………中三
 湯灌場……………上六三六
 油断……………下二六〇
 ゆで蛸の紫(狂歌)……………中八〇
 指につけし管……………中四〇・四三
 弓と矢のつがひ……………上五四四
 弓も木太刀も額……………上九三

よ

よかばた(長崎語)……………中三五六・四〇一
 よこさるき……………下二四六
 よこつたをしめ……………下一六六
 横になつて歌ふ……………中四・七
 吉田大獄……………中二五一
 吉田の的場……………上三九九・四〇〇
 霞町新道……………上一一九
 四ツ足門……………中三四〇
 四ツ手かご……………上六二二
 よつてかしんかいな……………下一五五
 よつばらかんだ(長崎語)……………中三五九
 四谷寓……………中八九
 淀川の夜船……………中三五〇
 淀の大橋……………下一三三

り

琉球表の毛拔合せ……………下二七三
 りうもん……………下二四
 兩側の芝居……………下三四・四三
 兩相場……………下二五
 りやんごうさい……………上五八九

れ

料理屋の書付と秤……………下五六・六四
 靈符の女……………下一九三
 蓮臺……………上五〇二
 蓮臺賃……………下八五

ろ

六十匆替……………下五五

夜泣石……………上五二五・五二八
 夜泣松……………上五二五・五二八
 よれ……………上二八六
 米木津……………上三二〇
 ヲの字かきの字か……………下二二三
 よばひ……………中一八三・二〇九
 線尻をさする……………上五七

ら

雷子(鶯)……………下二二五
 浪人……………上三三三
 羅生門……………下一三三
 らちのあかれへ……………上一九二・四三六
 らんこく……………中四九
 亂塔場……………中五八